

# 人間島

遠藤正一朗

水まみれの中に俺はいた。

頭上からは激しい風雨。辺りを見渡しても、視界に広がるのは激しく波打つ海面のみ。俺は、小さく頼りないボートの上で嵐が過ぎ去るのを祈りつつ、進入する雨や海水を掻き出し続けてこの足場が水没しないように、ただひたすらに必死だった。

俺はいつからこんなボートで嵐の中に投げ出されたのだろう。両手で水を掻き出しつつ、そんなことを考えてみたが、今より以前のことを考えようとすると、どうにも頭の中がぼんやりとする。そう、それに今はそんなことに思いを巡らせている場合じゃない。ボートが沈めば溺れて土左工門は確実だ。

それにしても、なんで水死体を土左衛門と呼ぶのだろう。あれは確か、昔いた力士で土左衛

門って奴がいて、そいつが色白でぶくぶくして、まるで水死体のような感じだったからか。

こんなくだらない豆知識を憶えている自分に辟易としつつ、耳の奥で不快な高音が鳴り続けているのを俺は自覚した。暴風と、それに応じた大波の強烈な爆音で、鼓膜がすっかり与太つてしまったらしい。

高音が原因かどうかはわからないが、俺の思考は次第に混濁し、気がついてみれば水を掻き出す単純作業を繰り返しながら「アー、ヴァー」と獣のようなうめき声を上げていた。こんな姿、もし他人に見られたらどう思われるだろうか。やはり見たままで哀れなのだろう。揺れは一層ひどくなり、水を掻き出すのも難しくなってきた。こうなるともう、ボートの縁にしがみついて、振り落とされないようにするので精一杯だ。どうやら時間の問題かもしれない。あともう

少して俺は、大昔にいた力士のように、無残な屍と化するだろう。不思議と死に対する恐怖はなかったが、自分が何者で、どうしてこんなことになってしまったのか、やはりそれだけは思いつかなかった。しかし相変わらずの高音と、全身を揺さぶる波が冷静な判断力を失わせ、落ちていて記憶を辿るといふ行為はまるで不可能だった。

記憶への拘りに区切りをつけた俺を次に襲ったのは、生への激しい執着だった。

ふざけるんじゃない。こんなわけのわからぬ海で死んでたまるか。俺はたまらず豪雨に向かつて叫んだ。本当は「俺は誰だ！」とドラマの主人公のように叫びたかったが、ゆとりもないため結局は、喚き叫ぶ獣言葉がせいぜいだった。叫んだ直後に海に投げ出されれば、それはそれで映画のように演出が利いた絶妙のタイミ

ングなのだろうが、現実はずっと無様で、俺は相変わらずボートの上で嵐に晒され続けていた。叫んですつきりしたためだろうか、鼓膜をくすぐっていた不快な高音は消え去り、その代わりに今度は、水を掻き出す音が背後から聞こえてきた。俺の他に誰かこのボートに乗っていたのか？ そう思いつつゆっくり振り返ると、全身黒づくめの小柄な人物が、ボートの後部で水を必死に掻き出していた。

「誰だよ！」

こんな奴、いつからボートに乗っていたのだろう。確かに後ろを見ている余裕などなかったから、気が付きようもないのだが、途中乗船の可能性はゼロに近いこの状況で記憶にまるでないということは、俺が認識できているのはつい先ほどからで、それから以前のことは覚えていないと言ふことなのだろう。

風雨を手で防ぎながらよくよく見ると、水を掻き出している小柄な人物が着ている黒づくめの正体は、詰襟の学生服だった。額面通り受け取れば、つまり彼は学生なのだろう。

「誰だよ。どうしてここにいるんだ!？」

轟音にかき消されないように、俺はありったけの音量で叫んでみた。しかしこの少年は水を掻き出すのに精一杯で、俺の存在をまるで無視している。

一人より二人の方が、やれることの幅がずっと広がるだろう。彼に俺の存在を認識してもらい、共に生き延びる努力をしなければと、俺は激しく揺れるボートの縁を掴みながら、なんとか少年のいる後部へと移動しようとした。

と、その瞬間。

一際巨大な波がボートの後方から迫り、俺達の頼りなく小さな足場はその勢いに押し出され、空中に舞った。

俺も少年もボートの縁にしがみつき、放り出されないように必死だった。ボートの浮遊は俺の胃をふわりと浮かび上げらせ、そこからくる嘔吐感はまだでジェットコースターや高速のエレベーターのようでもあった。空中での滞在は数瞬で、今度は海面に叩き付けられる振動が俺達を襲った。シヨックは肩と膝の関節を軋ませ、食いしばった奥歯はギリギリと痛み、大量の水が背中に被り、もう本当におしまいだろうと覚悟を決めた。それにしてもしつこいようだが、一体なんでこんなことに。どうせ死ぬなら記憶のはっきりしている内に、自分が誰なののはっきりとわかるうちにして欲しかった。こんな意識だけがはっきりとした、それでいて何がなん

だかさっぱりわからない状況で果てるのは悔しい。

最後にこの馬鹿げた嵐をしつかりと見てやる。そう思った俺は思いきって上体を上げた。しかし、そこに見えたのはどこまでも続く、穏やかで静かな海面だった。上空には青空が広がり、太陽の光が強烈に俺を照り付けていた。なんだこれは。こんなものってあるのかよ。すっかり普通じゃねえかよ。なんなんだよと呆れつつ、ポートの後部を見ると、学生服姿の少年が、まだ蹲り続けてガタガタと震えている。そして更に後方に視線を移すと、あの忌々しい嵐を生んでいた黒雲がはるか彼方の上空を覆い尽くしていた。

「なあ、おい。少年、少年」

俺は少年の背中を軽く叩き、こちらに注意を向けさせた。ようやく彼は頭を上げ、俺を見上

げてくれた。顔はクシャクシャにしている、それを差し引いても美少年にはやや遠い、平凡でいて陰気な様子を漂わせた少年である。眼鏡の奥からこちらを凝視する目は小さく、気の弱そうな印象を俺に与えた。詰襟と小柄な体格からすると、おそらく中学生なのだろう。

「どうやら俺達は嵐を抜けたらしい。つまり助かったんだよ」

「僕は…僕は…」

鼻にかかった変声前の高い声で、少年が呟いた。

「僕は怖いのです。恐ろしいのです。僕は…」

「あ、ああ…そりゃそうだ。あんな嵐だもんない俺とこの少年は生と死の境を行ったり来たりし、それは思い返すだけでも今なお身体が震える恐ろしい体験だった。せめてもの救いは俺の記憶が曖昧だったため、その期間が極めて短か

ったことぐらいだが、この少年はどうなのだろう。

「あなたは誰なのですか。僕は自分ことは、まるで覚えていないのです」

どうやら、彼も俺と同じのようである。あの嵐のショックで俺達は記憶喪失にでもなったのだろうか。ボートに二人で乗っていたということとは、俺とこの少年には何らかの関係があるのかもしれない。だけど俺は彼のことをまるで覚えていない。

ここまでひどい記憶障害なんてあるのだろうか。もしそこまで悪いのなら、もっと他の、たとえば日常的な挙動にも影響が出てもいいはずだ。なのに俺は、自分が何者でいつからどうしているかという記憶以外、つまりは物や事を見て観察して判断することは普通に出来ている。判断ができるということは、経験に照らしてい

るはずだから記憶自体はあるんだろう。実に都合よく、自分個人のことを思い出そうとすると頭にモヤがかかる。彼もそうなのだろうか。しかしこんな複雑な質問をしても、まだ子供の彼は混乱を増すだけだろう。

「俺もそうなんだ。まるで覚えていない。たぶん嵐のショックで一時的に記憶が吹っ飛んでるんだろう。だから君が誰なのかまるでわからないんだ」

「そ、そうなのですか……」

満足の得られない答えが返ってきたためか、少年は視線を落としてボートの床を見つめた。俺もそれに合わせてみると、ボートの底には亀裂が生じていて、そこから浸水が始まっていた。「さっきのショックで割れたんだ！」『ミハシ君』、水を出すんだ！

俺達は先ほどまでそうしていたように、浸水

をボートの外に掻き出した。しかし浸水は俺と少年の努力をあざ笑うかのように勢いを増し、別の手段を講じるべく、着ていたジャケットのポケットを漁った。

「なんだよこれ」

出てきたのは青いハンカチだった。駄目だ。こんな物じゃ水が染みるだけで浸水の根本的な解決にはならない。他に見つかつたのは定期入れだつたが、これも亀裂に対してサイズが小さすぎる。仕方なく、まだマシだろうと思い、俺はハンカチを亀裂に押し込めた。

浸水は一応止み、隙間やハンカチそのものから海水がチヨロチヨロと漏れていたが、この量ならボートが水没するのに随分と時間が稼げるだろう。意外とやればできるもんだと安堵した俺は、笑みを浮かべ少年を見た。少年もこの結果に一定の満足をしたのか、俺に笑みを向けて

いる。

「さてと…応急処置はできたけど…」

「これからどうするんですか？」

「ボートを修理して助けを求めよう。とにかくこの状況から抜け出すんだ」

言つてはみたものの、ボートをどうやって修理して助けを求めるのか、具体的な方策はまるで思いつかなかつた。

途方に暮れた俺は立ち上がつて辺りを見渡した。青空と海。視界に広がる風景はただそれだけである。嵐を抜けた直後は希望に満ちた静かなる光景であつたが、今の状況では、この「なにも無さ」は絶望の世界に見えてしまう。本当になにもない。船も陸も、もちろん人も。ここに在るのは俺と少年と壊れかけたボートだけである。腕を組んで顎に手を当てると、チクツとした感触が指に伝わった。伸び始めた髭か。じ

やあ昨日か一昨日ぐらい前までの俺は、髭を剃れる環境にいたってことなのだろう。けど今は剃刀の一本もない。もしそれがあれば、ポートの縁を削って亀裂に充てることができるのに。そんなことをあれこれ考えていると、先ほどポケットから取り出した定期入れの存在が急に再浮上した。あれは自分が何者であったかを示す大きな手がかりである。沈没の危険が遠ざかった今、定期入れに対する興味は充分過ぎるほど沸き起こり、それをもう一度取り出して調べてみることにした。

「池袋：練馬高野台」

ポケットから取り出した定期入れには、水浸しになったよれよれの定期券が一枚入っていた。路線は西武池袋線で、有効期限は三月二十七日まで。肝心の名前を記入する欄を見ると、そこは汚れがひどく、最初の一文字目がかろうじて

判別がただけであった。ここから苗字ぐらいは思い出せるだろうと判読すると、それは「簸」という漢字であった。これは確か「は」「か」「ひ」と読めたはずだ。それにしてもなんて珍しい字だ。これではどんな苗字か想像すらできない。

そう、俺にとつてこの「簸」という漢字は、記憶の一片も刺激しなかった。しかし練馬高野台という地名にはなんとなく覚えがある。どんな駅だったかは今一つ思い出せないが、多分俺はこの町に住んでいたか勤めていたのだろう。そんなことを強い日差しの中、あれこれと考えていると、少年がこわばった表情で俺の背後を指していた。

「あ、あ、あ……あ……」

少年の差した指の角度は水平で、俺は振り返ってポートの先頭から先に視線を向けていた。

はるか前方、青い海の彼方に緑色の物体がほ



つんと浮いていた。

よく目を凝らして見ると、その緑色は葉で、下のほうには暗い茶色の幹が下りていた。つまりあれは木々で覆われた島の姿だ。

「島か：小さいけど…島だな…」

背後にいたため、少年がどんな様子で俺の咳きを聞いているかはわからないが、恐らくこちらと同じように安堵しているのだろう。あの島に上陸できれば、少なくとも海という孤立した脅威からは開放されることになる。

ポートは漕ぐ必要もなく、自然な波の流れで島へと近づいていた。段々と大きくなってくる島を観察してみると、水面からわずかだが岩肌が見え、岬のような大岩が左右に伸びていた。こちら側にも同様に岬は伸びていて、なんの確証もないが、多分こちらから見えない反対側にも岬があって、つまりは四方に伸びているのだ

ろうと俺は勝手に推測した。それ以外は先ほども見えた高く生い茂った樹木が見えるだけで、その姿は、さながら広大な海に浮かぶ巨大なパセリのようでもあった。

「このままいけば、ポートは島に着く。そうしたら上陸しよう」

「そ、そつです…誰かいればいいんですけど」少年はそう言ったが、多分あれは無人島だろう。建物も見当たらないし、見渡しても他に島は一切見えない。しかしそんな絶望的なことを言って、少年を脅かしても何の意味もない。俺は返事をせず、ただ無言で頷いた。

ポートはしばらくして島の側まで流れ着いた。眼前は岩肌であり、その高さは三メートル程度、その上には木々が強い日差しをいっぱいに受けていた。

「この岸壁を登って地表まで行こう。できる

か？」

俺がそう少年に尋ねると、彼は不安そうな表情を浮かべた。

「多分僕は運動が苦手なのでしょうね。まるで自信がないのです」

自信は俺にもなかった。岩肌は突起が豊富で、よじ登るのに適していたが、三メートルという高さは微妙であった。しかし他に選択肢はない。

「君から登るんだ。もし落ちても下は海だし、いまは穏やかだから俺が助けることもできる」

「は、はい」

俺を信頼しきつていっているわけではないだろうが、決心を固めたのか少年は立ち上がり、ボートから岩肌の突起へと手を伸ばし、よろよると足を離して壁面へとしがみついた。

「い、意外と安定できます。行けそうです！」

「そうか、ならそのまま登るんだ」

少年はぎこちなく何度も足場を確かめながら、長くもなく、決して短くもない三メートルという岩肌を登り始めた。その挙動は俺から見ても不安になるほどおっかなく、滑稽ですらあった。

「もう平気です！」

岸壁を制覇し、島への上陸を果たした少年が振り返り、俺を見下ろした。だが途端に彼の顔面は青ざめ、数歩後ろに下がると背中を向けて大きく深呼吸をはじめた。

「ど、どうしたんだ！？」

「ぜえぜえ…はあはあ…い、いいえ…随分高いと思いまして…」

背中を向けたまま少年はそう答えた。たった三メートルの高さにしては、その言葉は少々大げさのように聞こえたが、感じ方は人それぞれであり、彼が強い度胸の持ち主には見えなかつ

たため、俺は落ち着くのを待った。

「ちよ……ちよっと見下ろすのは怖いのです……こ、このままでいいですか？」

「ああ、背中を向けたままでいい、そこから地表の様子を見てくれ！」

俺の促しに頷くと、少年は背伸びをして島の様子を見渡した。

「ジャングルです！」

「え？」

言葉の意味が今一つ判断できないため、俺は短く聞き返した。

「木と草ばかりです！ あと、右と左に大きな岩が伸びています」

「岬」という言葉が咄嗟に出なかったためか、少年はそう表現をした。

「今から俺も上陸する。危なくなったら手を貸してくれ」

少年がそうしたように、俺も突起に手をかけ、岩肌に体重を預けたがどうにも身体が重い。多分その原因は、海水をたつぷりと吸い込んでしまった上着のジャケットにあるのだろう。しかし今更それを脱ぐこともできず、俺は必要以上の労力を用いて岩肌を登った。

次にどの突起に手をやればいいのかだろうか。足場はいつ崩れるのだろうか。いきなりの事態に俺の反射神経と肉体はどこまで対応できるのだろうか。考えれば考えるほど不安で、つまりそれは、俺がこうした身体を使った所作を得意としていない証明なのだろうと理解した。よじ登るこの姿を眺めることができれば、さっきの少年と同じかそれ以上に無様な姿なのだろう。おそらくこれからは、こうして肉体を使って事態に対処することが増えるはずなのに、それが苦手とは情けない。落ち込みつつもようやく上

陸を果たした俺は、少年の隣に立つて周囲を見渡した。

少年が先ほど言ったように、眼前には草むらと背の高い木々が生い茂り、その様子はさながらジャングルのようであった。そして左右には岬が伸び、やはり建物などはにも見えない。ふと崖から下を見下ろすと、あの小さなボートが海面に揺らされていた。あれは俺達の命を繋ぎとめてくれて、今後も島から外へ出るのに大切な移動手段である。

俺はボートをなんとかこの島に止めておく手段を考えてみた。ロープがあれば固定できるのだが、もちろんそんな物はない。ジャングルに『つた』があれば代用できるだろう。しかし、突然の高波が岸壁を打ちつけ、しぶきから身を守った俺達が再び海面を見下ろすと、ボートは波に飲まれたのか、その姿を消していた。

絶望感はそれほどではなかったが、これは多分ボートがなくなったという事実より、陸地に到着したという安堵感の方が強いからだろう。これから先、いずれは失った代償の重さに気づくはずだ。

これで選択肢は減ったが、それだけにすべき行動は明白であった。

「君、とりあえずジャングルに入ってみようと思っただけど」

「は、はい…」

不安そうに少年は答え、俺の背後に続いた。腰の高さまで伸びた草むらをかき分けながらジャングルの中へ入ると、そこは小さな波の音以外何も聞こえない静寂であった。

もしかしたら、このジャングルの中に人間がいるかもしれない。食べ物が見つかるかもしれない。そんな期待を抱いての探険であったが、

樹木は何の実もつけておらず、人はおるか鳥や小動物、目に付く限りでは虫一匹すら姿を見つけない。静か過ぎるこの空間にひどく違和感を覚えつつ、十分も歩くとジャングルを抜け、俺達は島の反対側へと出てしまった。その光景も、入ってきたときと大差のない、わずかな岩肌と左右に伸びた岬があるだけの、まさしく対称な希望のかけらもない風景であった。違う点があるとすれば、太陽が沈みかけて海面が朱に染まっていることぐらいである。

「野球場ぐらいの広さですね。この島」

「だな：まいったな：食い物もなにもない」

「まるで無人島なのでね：ここは……」

そう言うと、少年はその場に座り込んだ。決死行と探険、その結果判明した希望のない状況にすっかり疲労しているのだろう。俺にしてもそうだが、年長者が情けない姿を見せられない

と思い、とりあえず左手の岬まで歩いてみることにした。

岬の長さは四メートルほどで、屈強な岩は俺が乗ってもびくともしなかつた。沈みゆく夕日を眺めながら、もう一度ボケットを漁ってみたが、定期入れ以外はやはり見つからなかつた。

何者かもわからず、正体不明の少年と二人きりで無人島にいる今の状況。まったく絶望的である。食料はどうやって調達しよう。やはり海で魚を獲るしかないのだろうか。けどそんなことをできる自信は全くない。不安を紛らわすため、俺は手を揉んでみた。すると、右手の甲に奇妙な物を見つけた。

なんだこれは、右手の甲に赤く「管」と書かれている。俺は気味が悪くなり、爪でそれを削ってみた。しかし痛みが生じるだけで、文字は削れない。だが刺青のように彫られている訳で

はない。よほど強力なインクで印刷されているのだろうか、「管」という赤い文字は不明瞭な不安を与え続けていた。

「あ、あの…」

背後から少年が声を掛けてきたため、俺は慌ててポケットに手を突っ込んで振り返った。

「こんな物がポケットに入っていたのですが

…」

少年の手には、緑色の百円ライターが握られていた。気弱そうな見かけによらず、親や教師に隠れて煙草でも吸っていたのだろうか。俺は少年からライターを受け取りつつ、苦笑いを浮かべてしまった。しかしこのライター、見た限りオイルは半分以上入っているが、何度着火を試みても火が着かない。

「しけつてるなあ…まああの嵐じゃ仕方ないか

…」

「僕の持ち物はたったそれだけなのです」

「そうか…とりあえずこれを乾かして、火をつけて狼煙を上げよう」

「助けを求めますね」

「ああ…船や飛行機から見えるように、そしてジャングルを焼かない程度の火をつけるんだ」

「僕達…助かりますよね」

少年は頼りなくそう呟いた。狼煙を上げたところで、助かる保証はない。これまでの状況、つまりボートでこの島へと流れ着くまでの、何もなかった海から想定して、船や飛行機がここを通過する可能性は少なく思えた。俺は少年の不安に彼の肩を叩いて返事をするのが精一杯だった。

「これからどうするのです…?」

「あ、ああ…」

先ほどまで俺達の命を脅かした、あの嵐がこ

の鳥を襲う可能性もある。しかし風雨を凌げるような建物も洞窟もこの島にはない。「これからどうする」という少年の単純な問いに答えることも出来ず、俺は握り締めたライターを凝視して考え込んだ。しかしいくら考えても名案は浮かばない。思いつくのは飢餓や天災などの、悲観的な想像ばかりだ。

恐らく陰鬱な表情を浮かべているであろう俺の袖を、少年が軽く引つ張った。

「さつき…僕のこと、『ミハシ』って呼びましたよね」

そんな覚えはなかった。咄嗟に言った可能性もあるが、だとすればなぜだろう。やはり俺と彼は知り合いで、一瞬記憶が蘇ったのだろうか。それとも、知り合いに「ミハシ」という少年がいて、彼がその人物に似ているのだろうか。

「俺が…君を…そう呼んだのか？」

首を傾げながらそう尋ねると、少年は小さな目を見開いて、大きく頷いた。

「そうか…じゃあそう呼んだかもしれないけど…理由は特にないと思うよ…なんとなく、なんとなくだよ」

「そうなのですか…あ…それと…僕は綱堀って学校に通ってたみたいです」

なぜそんなことが言いきれるのだろうか。そんな疑問を浮かべていると、少年は自分の袖を俺に見せた。学生服の袖にはボタンが付いていて、それには確かに「綱堀」と浮き彫られていた。

「なるほどねえ…」

素性に近づく手がかりがあっさり見つかる制服とは、こういった状況では頼りになる。もっとも、記憶を失って無人島に流れ着くなどという状況がそうそうある訳ではないのだが。

少年は自分の正体にわずかだが近づけたため

か、その表情は若干明るくなっていた。やはり美少年というほどの容姿ではないが、こうして見ると愛嬌がある。おそらく、これから先しばらくはこの少年と一緒に過ごすこととなるのだろう。めせて少年にできるだけ好意を抱きたいと思いつつ、そんな考えを自嘲してしまった。「あと……どこかで靴を無くしたみたいなので」

そう言って、少年は膝を上げて靴下を履いた足を俺に見せた。

「よくそれでジャングルを抜けられたなあ」  
「痛かったです」

あまりにも短いが、それ故に実感のこもった言葉に、俺は思わず吹き出してしまった。少年もそれに吊られて笑顔をみせたが、不安が完全に払拭された訳はなく、靴がないという具体的な悩み事に考えが至ったためか、彼は再び表情

を曇らせた。

「そうだ……制服の上着に名前が書いてあるかもしれない……確かめてみたらどうだい？」

少年を元気付けるために、俺はそんな提案を試してみた。彼は素直に頷くと上着を脱ぎ、内側を調べ始めた。それにしても自分の着ている物をよく確かめるなんて光景はそうそう見られるもんじゃない。少年の所作を見ながら俺は、この奇妙な状況に慣れ始めているゆとりを感じていた。

「どうだい？」

「何も書かれていませんし……刺繍もされていません……駄目みたいですね……」

「そうか……」

「僕は残念です……」

力なく少年が肩を落とし、上着を着ようとしたその瞬間、海から突風が襲い、学生服が宙へ



と舞った。

俺は慌てて空中へジャンプして、なんとか学  
生服をキャッチした。我ながらよく掴めたもの  
だと感心しながら岬の根元付近に着地すると、  
ガランという金属的な音と共に、四方二メート  
ルばかりの地面が土煙を立てながら板のように  
めくりあがった。

「な、なんだあ!?!」

間抜けな叫びを上げ、俺はその場から後ろへ  
跳ねた。なんだこれは、岬の根元だった地点、  
着地したその場所は、なんと地面が板のように  
めくりあがっている。

恐る恐るずれた地面の断面を確かめてみると、  
それは人工的に製造された金属であった。

「板の表面に岩が貼り付けられてて…こりゃカ  
モフラージュか…」

カモフラージュだとすれば、人の手が施され

ているということである。言いながら、俺の声  
はうわずっていた。

制服を受け取った少年は、そのまま板に手を  
かけ、力を振り絞ってそれを垂直に立てようと  
した。無論、俺もその行為を手伝った。

板の裏側を見ると、それは鉄板になっていて、  
ペンキのようなもので「南」と書かれていた。

「日本語か…」

俺の呟きに少年の表情が明るいものへと変化  
した。不安もあるが、この展開は希望に満ちて  
いる。

俺達は重い板を放ると、それがあつた場所を  
見下ろしてみた。そこは空洞になっていて、緩  
やかな空気と人工的に調整された生暖かい空気  
の匂いが漏れていた。四方二メートルばかりの、  
煙突のように垂直に降りた穴である。よく観察  
してみると、一面に梯子が取り付けられていて、

底の方からはかすかに機械のような作動音が聞こえてきた。

「地下に…何かの施設があるな…」

草木と岩だけだと思っていた無人島。しかしその地下には人工的な施設が存在した。その事実をよく考えてみると、ようやく俺の頭に不安と疑問が浮かんだ。なぜ地下へと通じる扉が、わざわざ岩肌に模してあったのだろうか。この下はなにか入ってはいけない秘密の施設、例えば軍隊の基地や政府の研究所、はたまた収容所でもあるのだろうか。

「よし…俺が先に下りる。君はここで待っていてくれ。安全を確認でき次第、君を呼ぶから」

「い、嫌です…僕も一緒に行きます。こんなところに一人で待つのは嫌です」

不安そうな様子ではあるが、少年の言葉には力が込められていた。ここまで強い意思を否定

することはできなかったため、俺は仕方なく頷いた。

「よし、俺から降る。君は続いて降りてくれ」

「はい…あ、あの…ミハシって呼んで下さい…」

少年の提案に俺は戸惑った。

「だ、だけど…君はミハシって名前に…」

「はい。心当たりはありません。ですけどいいのです。ミハシで」

なぜそんなことを彼が言い出すのか、俺には今一つ理解できなかったが、おそらく「君」と呼ばれることに抵抗でもあるのだろう。勝手な推測ではあったが、こちらにしても「君」というのは言いづらい。

「わかったミハシ君。降りるぞ」

「はい…先生」

「せ、先生…」

聞き返した俺に、少年ことミハシ君は照れ笑

いを浮かべた。なんで俺が先生と呼ばれるんだ。

「俺は先生だった覚えはないんだけどなあ」

「あ…なんとなく、なんとなくです。そちらは僕から見ると、先生って感じがするのです」

彼がそう呼びたければそれでいいだろう。

先生と呼ばれることに抵抗はない。「おじさん」などと呼ばれたら、鏡を探して自分の外見から

判断できる年齢を確かめたくもなるが、年下の少年に「先生」呼ばれるのは悪い気はしない。

案外、俺は本当に先生なのかもしれない。もっとも、何の先生かは皆目見当もつかないのだが。

俺達は梯子を降り、地下の施設へと向かった。

先ほどまでかすかであった機械の作動音は次第にポリウムを増し、定期的な振動も梯子から手へと伝わってきた。地下の施設は稼動している。そう確信して見下ろすと、底の方から灯りが漏れているのはつきりと見えた。

「ひいいい!!!」

頭上から、俺に続いて梯子を降りるミハシ君の悲鳴が聞こえてきた。何かと見上げると、

彼は梯子にしがみ付き、目を閉じてガタガタと震えていた。

「だ、大丈夫か…どうしたんだ」

「し、下を見てしまったのです…恐ろしくて…」

全長十五メートルはある、長くて高い梯子である。薄暗いとは言え、下を見れば恐ろしくなるのも道理だが、少年が上げた甲高い悲鳴は、

少々オーバーにも感じられた。

「下は見るな。前だけをずっとだ。もし手や足が滑っても、俺がいるから大丈夫だ」

「は、はいいい…」

この少年は、多分高所恐怖症なのだろう。返事をして、正面を見据えたものの、ミハシ君の震えは止むことがなかった。

しばらく梯子を降り、俺達はようやく地面へとたどり着いた。それは土でも草でもない、適度に柔らかく薄緑色をした人工の床であった。

見上げると今まで下りてきた二メートル四方の穴が見え、その彼方にはもうすっかり日も暮れたのだらう、小さな星空が広がっていた。そして視線を下ると、前方にまっすぐと通路が伸び、その先にはいくつかの机と椅子のような物が小さく見えた。

通路の壁はページユ色で、所々に扉も見える。この施設は出来てまだ間がない。床や壁の清潔さを見て触れて感じつつ、俺はそんな確信を抱いた。さてどうしたものか、俺達がこれからとる行動には大きく分けて二つの選択肢が存在する。一つは大声を出してこの施設にいるかもしれない何者かと接触を試みることに、そしていま

一つは声を潜めて静かに施設内を調査すること。しばらく考えた結果、俺は後者を選択することにした。

「ミハシ君：静かに、ゆっくり：取り敢えず目の前の通路に行く。目的地はあそこに見える机や椅子のあるエリアだ」

「は、はい：わかりました。だ、誰か：いるのでしょうか」

「さあ：これだけ大掛かりな施設だし、人がいると信じたいけど：友好的かどうかはわからない。まずは慎重にいくぞ」

俺の言葉にミハシ君は小さく、だが力強く頷いた。まだ多少声が震えていたが、梯子下りの恐怖は収まったのだらう。俺は彼の信頼をわずかつつではあるが得ている。そんな充足感を抱きながら、真っ直ぐに伸びる通路をゆっくりと

進むことにした。

通路に行く途中、左右に合計四箇所ほど扉があり、俺もミハシ君もそれを開けることを試みたのだが、どうやら鍵がかかっているらしく、そのいずれもが開くことはなかった。どの扉も如何なる部屋なのかを記すプレートもなく、ノブだけで鍵穴も存在しないシンプルなもので、ひどくぶっきら棒な印象を与えていた。

通路を五分ほど進むと、ようやく俺達は机と椅子のあるエリアに到達した。

そこは直径五メートルほどの広さがある円形のエリアで、ジャングルを歩いていた感覚と照らし合わせてみると、どうやら島の中心部に位置しているようであった。

辺りを見渡すと、東西南北の四方に通路が伸びている。隠し扉に書かれていた文字からすると、俺達が来た通路は南側通路なんだろう。西

と北の通路は南側と同様に真っ直ぐ伸びていたが、東側だけはすぐ行き止まりになっていて、壁で行く先が阻まれていた。円形広場自体には机が三つ三角形形状設置されていて、オフィスで使うような椅子が、それぞれにあてがわれていた。

「先生、これは……」

ミハシ君の小さな声に俺は振り返った。彼は机の一つに置かれているパソコンのような端末を指していた。

「なんだ……」

灰色の四角い箱はそれほど大きくなく、横には電源の入っていないモニターが設置されていた。俺は端末をよく観察してみたが、どこにもスイッチの類がなく、背面を覗き込んでみても、モニターに接続しているケーブルの他には電源コードらしき物が見当たらなかった。

「内臓バッテリーで動くのかなあ」

言ってみたものの、俺はこうしたコンピューターに関する知識に自信がなかった。しかしミハシ君は、引き出しの中からキーボードを見つけて出し、いくつかのボタンを叩き、時折端末の前部についているダイオードの発光を確認したりと、とにかくとても手馴れた様子で調べていた。

「さすが若いなあ。俺はこんなのよくわからな  
いんだよ」

「僕も…それほどじゃありませんけど、このパソコン、妙ですよ」

「そうなのか？」

「はい…これを見てください」

ミハシ君はキーボードを俺に向けた。しかしそれはありふれたパソコン用のキーボードにしか見えぬ、どこが妙なのか、俺にはさっぱりわからな

からなかった。こちらがしきりに首を傾げていると、ミハシ君がようやくその答えを語ってくれた。

「キーボードにもパソコンにも、文字が全然書かれていないのです。普通、キーボードには最低でも一つ一つのキーに英語が印刷されていますし、パソコンの後ろ側にはどのケーブルを接続するかの注意書きが書かれたりしているものなのです」

なるほど。確かにキーボードはつるつるで、文字の類は一切書かれていなかった。

「これじゃどのキーが何なのか、さっぱりだよなあ」

「大体の見当はつきますけど…何かやっぱり変です。気持ちが悪いです」

「ああ…」

俺は机の引出しを次々と開け、その中身を調

べてみた。しかしその全てが空っぽで、ようやくミハシ君の感じた気持ち悪さが俺にも実感できた。

「ここは何かの作業場なんだろうけど…書類や筆記用具が何も無い…おかしいよな」

「ええ…」

「綺麗過ぎるし、仕事をしていた形跡もない…となると、この施設は出来たばかりなんだろうな…」

そんな小さな範囲の予想しか今の俺には立てられなかった。ミハシ君は椅子に座るとキーボードを手当たり次第に、だが慎重に叩き出し、端末の起動を試みようとしていた。この件は彼に任せた方がいいだろう。どうやらミハシ君は自信もあるようだし。俺はそう判断すると、もう一度この広場を見渡してみた。

「おや…」

天井を見上げると、これまで気付かなかったある一つの事実を認識した。この地下施設の天井は床から四メートルという結構な高さがあるのだが、どこにも電球が取り付けられておらず、それでいて十分な光量を施設全体に与えていたのだ。そう、天井自体が光を発しているのだ。記憶喪失の俺ではあるが、これまでにこんな照明は見た覚えがなかった。不思議な灯りであり、ぼんやりと眺めていると、妙に心が落ち着いて穏やかな気分になされてくれた。すると、俺の鼓膜を鈍い機械音が刺激した。

「やつたあ！」

叫んだのはミハシ君であった。振り返ると彼は慌てて口を押さえたが、その喜びは隠しきれないようであり、笑顔で端末を何度も指した。どうやら起動に成功したようである。俺は急いでミハシ君の背後まで駆け寄り、彼の座ってい

る椅子の背もたれに両手を掛けた。

「やるじゃん。すごいな」

モニターは先ほどまでの真っ黒とは違い、一面暗い緑色に変化していた。端末のダイオードも赤く発光している。

「いくらキーを入力しても駄目だったので……このパソコン自体を叩いたら、電源が入ったのです」

「じゃあ故障してたんだな」

判断に自信はないが、叩いて電源が入るのは多分そうということなのだろう。俺達が画面をしばらく見ていると、そこにはやがて大きく文字が表示された。

「S904 H 管理システムVer1.05」

文字を読んでみたものの、その意味はさっぱりわからなかった。しかし管理システムと表示されている以上、この端末を使えば施設の構造

や目的も調査できるだろう。そう思っていると、モニター表示は期待を裏切るパスワードの入力画面に切り替わった。

「ああ……」

ここに何か正しいキーワードを入力しない限り、先の画面には進めないことぐらい俺にも理解できる。「正しいパスワードを入力してください」と表示された後には間抜けな空白が存在し、それが気分を暗くさせたが、ミハシ君はすぐさまキーボードを叩き始めた。

空白には「」という文字が五文字入力された。ミハシ君はキーボードの中央やや右よりの一際大きいキーを最後に叩いたが、次に表示された文字は「パスワードが間違っています。正しいパスワードを入力してください」であった。「なあ……キーボードに文字が書かれていないんじゃない、どんなキーワードを入れたかわからない



んじゃないのか…この端末を動かすのは無理かもよ」

「いえ、このキー配列はCの規格です。それなら手が覚えていきますから、どのキーがなんなのが見当はつきます。ただ問題は、やはりパスワードが何かということなのです」

「ブラインドタッチという奴か。俺には到底出来ない芸当だが、どうやらミハシ君はパソコンを使い慣れているようだ。しかしキーワードとなると、そもそも気が付いたら嵐の中にいて、いつの間にかこの島に上陸した記憶もない俺達に、キーになる言葉など思い当たるわけもない。ミハシ君の疑問に俺は応えることが出来ず、気が付けば腕を組んで首を傾げることくらいしかできなかった。

他人の判断が当てにならないと思ったのだろうか、ミハシ君は入力を再開し、その度に「島」

「無人島」「岸壁」「嵐」「地下施設」など、これまで俺達が見たりしてきた物を手当たり次第に呟き出した。おそらく、その言葉通りのキーワードを入力しているのだろう。しかし画面はその都度先ほど同じエラーメッセージが表示されていた。こうなるとミハシ君の力になれない。そう判断した俺は、この地下施設のまだ行っていないエリアを探索してみることにした。

「こつちは任せたよ。俺はあちこち回ってみる」俺がそう告げると、ミハシ君は左手を上げることで返事をした。いくらパスワードの解析に集中しているとは言え、随分と愛想がないものである。俺にはいまのミハシ君が端末とセットでなにか自分とは違う生き物のように思えた。そして、その突飛な感じ方はどこか不気味であり、たまらず首を数回振り、これからの探索に気持ちを切り替えた。

最初に俺が選んだのは、これまで俺達が来た南側通路と反対側の、おそらく北へと向かう通路であった。ゆつくり進んでみると、先ほどからずっと聞こえてくる機械の作動音が次第にボリュームを上げ、行き止まりにはその主である巨大な機械が設置されているエリアが存在した。機械は天井までの高さがあり、天井自体もこれまでとは違い、はるかに高い位置にあった。

俺はゆつくりとそれを見上げた後、機械をよく観察してみた。高さと幅は十メートル、奥行きは五メートルほどあり、パイプ類が本体から発し、それは床へと伸びていた。操作パネルの類は一切なく、暗褐色の巨体には注意書きも書かれていない。定期的に振動が生じ、それが靴から足に伝わり軽い痒みを感じられた。

駄目だ、何の機械かさっぱりだ。だがこの振動と巨体は恐らくかなり大掛かりな機械なのだ

ろう。もしかすると、この施設の動力源かもしれない。そんなことを思いながらうろついていると、壁に梯子がある事実気が付いた。梯子は上に伸び、天井を超えた先には二メートル四方の穴が開いていて、まだまだ梯子は続く。それを目で追って見上げていくと、やがて小さく四角い夜空が視界に飛び込んだ。これは施設に入った直後に見た光景と全く同じである。つまり、北側の岬の根元にも、地下施設へと通じる煙突状の通路があったということだ。

なんて間抜けな話だ。北側の岬と言えば、俺達が上陸してすぐ右か左にあった岬のことじゃないか。もつと早くこの存在に気付いていれば、あんな静か過ぎる不気味なジャングルにわざわざ入り込む必要もなかったのに。

「そういうもんだよなあ」

俺は声を出してそう呟いた。しかしである。

夜空が見えるということは、北側の入口はすでに開かれていて、今現在も開けっ放しということである。それはすなわち俺達の他にも誰かがこの施設に侵入したという証であるとも言えなくはない。根拠は薄いがなんとなくそんな判断をすると、衝動が両足を動かせ、俺はたまらず来た通路を引き返し、ミハシ君の待つ中央広場へと小走りした。

「ミハシ君！ ここには俺達以外に誰かがいる！ 多分だがいるはずだ！」

低く、だが中央広場まで届く声量で俺は叫んだ。だがミハシ君からの返事はない。言いようのない不安が俺を襲う。何かヤバイ感じがする。危険な予感がする。小走りはやがて駆け足へと変化していた。

叫びながら中央広場へ戻った俺が目にしたのは、見知らぬ男とそれに羽交い締めになれ、ナ

イフを首筋に突き付けられ、こちらに救いの視線を向けるミハシ君のか弱い姿であった。

黒い皮ジャンに青いＴシャツ。ジーンスの下は薄汚れたスニーカー。それがミハシ君を捕らえている男の姿であった。エラの張った色黒の四角い顔に、小さく、それでいて鋭い目つき。髪は茶髪であつたが所々が黒く、ひどくずさんな印象を俺は受けた。

「誰だ…てめえは」

低くかすれた声で男は言い放つた。年齢は三十代前後だろうか、服装からしてこの施設の間ではないだろう。まさか俺達と同じ漂着者なのだろうか。

「お前こそ誰だ…この島の人間かよ」

「聞いてるんだよ！ 俺が！ 答えろよ！」

男が興奮して拳動が激しくなつたため、首筋にナイフを突き付けられていたミハシ君の表情がより一層恐怖にこわばつた。言葉遣いからし

ても、この男はさほど高い教育を受けた者ではないだろう。こういつた輩は下手に刺激をすると何をしてくすかわからないが、なだめすかすのは、なんだか悔しかった。

「俺と彼はさつきこの島にやって来たばかりなんだ。嵐にあつて、ボートが沈んで上陸して…南側の岬からここへの通路を発見して…」

「本当か!？」

「ああ…もしかして…あんたも俺達と同じなのか…」

「違う！ 俺は違う！」

最後に舌打ちをして、男はミハシ君を突き飛ばして解放した。気の短い奴のようだが、この場合それは好都合である。俺はミハシ君を自分の背後に隠れさせると、男のナイフから視線を外さないように努めた。

「せ、先生…」

ミハシ君は俺のジャケットの裾を強く掴み、頼りない視線で見上げてきた。俺は彼の頭を撫で、できるだけ鋭くナイフの茶髪男を睨み付けた。男は少したじろいだのか、一步後ろに下がるとミハシ君が先ほどまで操作していた端末に一瞬視線を落とし、再びこちらを睨み返した。

「てめえ…先生なのかよ…」

「さあ…俺も彼も記憶がないんだ…気が付いたら嵐の中にいた…先生ってのは仮の呼び名だ」

納得いく回答ではなかったのか、男は再び舌打ちをし、ナイフをケースに収め、それをジーンズのポケットにしまい込んだ。

「お前はいつからここにいるんだ？」

俺がそう質問すると、男は床に視線を落とし、しばらくしてこちらを見据えた。

「えっと…二週間ぐらい前だ…俺は気付いたらここにいたんだ。記憶がないって言ったな？」

ふん、俺もそうだよ。自分が誰でここにいる前のことはまるで思い出せねえ…だけど嵐は知らねえ。そっちの扉を開けて一度しか外には出ちゃいねえ」

聞いてもいないことまで、男はぺらぺらとしゃべり始めた。しかし得られる情報は多大であり、俺も知らずのうちに興奮してくるのを感じていた。

「二週間ってことは、食料と水があるんだな」

「ああ…あることはある。寝床もトイレもな。それなりの生活はしてるさ」

島に上陸し、ボートが波にさらわれてから最大の懸案事項であった、風雨をしのぐと食料と水の確保という二大問題はこれで一挙に解決できた。俺は男に歩み寄り、彼は一瞬たじろいだ様子だったが舌打ちをして椅子に腰掛けた。

「端末を操作してたんだ。なあミハシ君。キー

ワードは解けたのか？」

「いいえ…まだです」

ミハシ君は決して男に近づくことなく、俺の背後に隠れていた場所から一歩も動いていなかった。無理もないだろう。目の前にいるのは先ほどまで自分の首筋に鋭利な刃物を突き付けていた男だ。彼が今も極度の緊張状態にあり、男に対して強い警戒心を抱いているのは明白であった。

「俺は拉致されてきたんだと思う。ここは外国の収容施設なんだ」

男はそう俺に告げた。しかしその予想は恐らく間違っているだろう。ここには警備員も不在で、海へ出る方法さえあれば出入りも自由である。そんな収容所がある訳がない。しかし短気なこの男を刺激するのは厄介だと思い、俺はその考えを口にはしなかった。だがこちらが無言

だったためか、男は苦笑いを浮かべると目をぱちくりとさせた。

「なあ先生よ…なんなんだよここは」

男が口にしたのは根本的かつ最大の疑問である。しかしそんなこと俺にもわかるはずがない。その究極の疑問にたどり着くには、何にしてもまず情報が必要だと判断した。

「この地下施設は全部調べたのか？」

「歩けるところは全部な。ここが中央広場、北側にはよくわからねえ機械があつて、南側はただの通路で扉は全部開かねえ。東側はすぐ行き止まりだ」

「東側の岬に隠し扉はあつたのか」

「わからねえ…ちょっと見た感じはなかった。

しかしよく外側から南側の扉を開けたな」

「偶然な…思いつきり乗ついたら壊れたんだ」

「ふん：」

最初は物騒な奴だと思ったが、こうして言葉を交わしてみると案外意思の疎通が計れるものである。こいつにしても、訳もわからない状況に警戒し、緊張していただけなのだろう。しかし東側には何も無い岩盤だけなのだろうか、それとも何か施設があるのだろうか、後々調査する必要がある。ふと、一つの疑問が俺の脳裏をよぎった。

「西側は」

俺の問いに男は自信のある笑みを浮かべた。

「ああ：そこが要するに俺がメシ食って、風呂入って、便所行つて寝たりしている場所だ」

「つまり居住エリアってことなんだな？」

「ああ：今から案内するよ。先生もガキもメシ食ってないんだろ？」

これまで空腹感は意識していなかったが、男

の言葉がきつかけでそれは渴きを伴って雪崩のように襲いかかってきた。

俺とミハシ君は男に案内され、西側エリアへと通路を進んでいた。この通路も南と北と同様の壁に床であり、突き当たりまでの距離も同じようなものであった。

ますますこの施設は中央広場を中心に対称な構造になっていて、やはり東側には、なにか重要な施設が隠されているのではないかという疑念がより強まっていた。しかし今は空腹を満たすのが最優先である。

しばらく歩いた俺達はやがて一つの部屋に案内された。それにしてもこの茶髪の男、廊下を案内しながら何やら何度も頷き、顔には時折笑みを浮かべている。俺達の登場がそんなに嬉しいのだろうか。男の自分勝手な感情表現に苛立ちつつ、案内された部屋を見ると、そこは十二

畳ほどの広さがある薄暗い倉庫だった。

「調理場と食糧庫だ。もっとも、調理場は使い道がねえけどな」

男がそう言ったように、この部屋には段ボールがいくつも置かれ、右側には流しがあった。それが恐らく彼の言う調理場なのだろうが、使い道がないとはどういった意味なのだろうか。俺とミハシ君が倉庫を見渡していると、茶髪の男が段ボールの一つから小さな箱を二つ取り出し、それをこちらに向かって放り投げた。受け取った俺は一つをミハシ君に手渡した。

「それがメシだ」

男の言葉はうわずり、何か嫌味が込められているようであった。箱を見てみるとそれは灰色の紙製で、「カレーライス・中辛」と印刷されていた。中を開けると、プラスチック製の容器にビニールで密閉されていたカレーライスが入っ

ていて、どこか懐かしい印象を受けた。多分、

俺は記憶を失う以前にこの種のレンジ食品をよく食べていたのだろう。それにしてもパッケージが随分と愛想がない。

「電子レンジのカレー……だけど売り物には見えないよなあ……」

「え、ええ……」

俺の意見に頷きつつも、ミハシ君の視線は手にしたカレーに注がれていた。

「レンジはこつちだ」

茶髪の男は流しの側の床に置かれている四角い箱を指差した。見るとそれは紛れもなく電子レンジであり、なぜ床に置かれているのかと疑問に思いつつも、いまはとにかく腹ごしらえをするのが先決だと思った。

俺とミハシ君は、すっかり温まったカレーを手に、密閉されていたビニールを急いでがし



た。カレーの香ばしい匂いが食欲を大いに刺激する。俺とミハシ君が倉庫の床にあぐらをかいていてみると、茶髪の男もカレーを手に腰を下ろし、俺達にスプーンと水の入ったコップを差し出した。

「この食糧はこのレンジカレーとたらこスパゲッティの二種類だけ。スパもレンジ物で、流しの使い道といや、スプーンやフォーク、コップを洗うぐらいだ」

男は二週間、ずっとこのレンジ食品で命を繋いできたということか。先ほどの苦笑いの正体に気付きつつ、俺は一心不乱でカレーを貪り、コップの水で喉の渴きを潤した。

パサついたレンジ食品特有の米の食感が何とも味気ないが、とにかく食えるだけでも満足である。しかし二週間も食いつづけるとこの心境も変化するのだろうか、事実俺と対座する男は

実に落ち着いた様子でつまらなそうにカレーを口に運んでいた。

「二週間これじゃ、大変ですな」

カレーをあつという間に平らげたミハシ君が、初めて茶髪の男に話し掛けた。男は苦笑いを浮かべると、カレーの容器を床に置いて段ボールの詰まれた一角を振り返った。

「色々工夫してみたんだぜ。カレースパにしてみたり、逆にたらこメシにしてみたり、カレースパはいけたけど、たらこメシは失敗だったな。塩味しかしねえんだよ。調味料もねえしよ。」

男の言葉にミハシ君は吹き出し、男もそれに呼応して微笑んだ。

「さつきは悪かつたな坊主」

「あ…はい…いいえ…」

素直に謝罪されたミハシ君は戸惑い、頭を掻いた。俺は嬉しくなり、浮かれた気分になりつ

つも、これからのことを思うと気が重かった。

「明日になったらこれからのことを話し合おう。  
三人いれば出来ることも多くなるだろう」

「例えばどんなことだ？」

「狼煙を上げたり、魚を獲りに出たり、この施設をもっとよく調査したり」

俺のその言葉に茶髪の男は何度も頷き、最後に鼻を鳴らして感心して見せた。

「思えばやることは山積みなんだなあ。俺はこの二週間、ただ寝て起きてただけだもんなあ。やつばあんたは先生だな。うん。魚はいいよな。うん」

「このエリアは…他に部屋はあるんですか？」

「ああ…ベッドのある部屋が三つある。あんた達はそのうちの一つを使ってくれよ。二段ベッドがあるから」

ミハシ君の質問に男はそう答えた。俺達は立

ち上がるとカレーの容器を男が指示する段ボールの一つに捨てた。中を見てみると、同じような空の容器が山のように詰まれている、この二週間の彼の生活が伺え、たらこメシという固有名詞に俺は思わず口の両端を吊り上げてしまった。

恐らく久しぶりの食事だったのだろう。カレーで満たされた胃袋は急速に活動を再開したらしく、身体の中が随分と騒がしく感じた。記憶を失っていたからだろうか、思考力の大半が現況と体調の把握に費やされているらしく、俺の感覚は変化に対して敏感であった。

男はこちらの態勢が整ったのを見計らうと、寝室へ案内するべく俺達を廊下へ促した。その挙動は軽やかで、表情にも柔和さが伺えた。この男はどうしてこんなに機嫌が良さそうなのだろう。まさかたらこメシの惨状を話して気が楽

になったからではないだろう。先ほどまでナイフで脅していた殺気もまるでなく、わずか数十分での変化に俺は戸惑ってしまった。

「あれ：なんです：」

寝室に案内される途中、扉の開いているある部屋の前でミハシ君が立ち止まった。彼は部屋の中を指していて、それに視線を合わせてみると、ガランとした開き部屋の隅に、一メートルほどの高さをした透明のカプセルが置かれていた。

「さあ：なんだろうな：俺にもわからねえんだよ。あんた達で調べてくれるか」

茶髪の男はつまらなそうにそう言った。部屋に入つてカプセルを調べてみたが、下が金属製で、カプセルの透明部分が意外と軽く持ち上げられる他には機械らしき装置も一切なく、何に使う道具なのかは全く見当もつかなかった。

「ガラスかと思つたら：透明プラスチック製か：」

それにしてもガラス並の透明度である。俺は金属部分に透明部分を置き直し、何度もそれを観察してみた。しかし何度見てもこれがなんの目的で作られた物なのかはわからない。ミハシ君は観察に飽きたのか、気が付けば部屋から通路へと戻っていた。もう少しこの奇妙なオブジェクトを調べてみたかったが、それは明日からでもいいだろう。俺もミハシ君に続いて廊下に戻つた。

「ここで寝泊りしてくれ」

茶髪の男は寝室に俺達を案内した。そこは六畳ほどの広さがあり、二段ベッドが設置されていた。入口のすぐ横にはスイッチがあり、それを押してみると天井の発光が止み、部屋には通路からの灯りだけが差し込んでいた。

「トイレはそっちの扉、シャワールームとセツトだ。洗濯もそこでやってくれ」

一通りの説明をすると、男は部屋から出て行ってしまった。ミハシ君は学生服を脱ぐと、身体を下の段のマットに放り出した。

「し、下でいいですよねえ」

ミハシ君はあくびをしながら俺にそう告げた。短く返事をしつつ、俺は洗濯はどうしようか、先に風呂に入るべきかとあれこれ考えつつも、気がつけば服を脱ぎ捨て下着姿でベッドに上がり、中へと潜り込んでいた。風呂も洗濯も起きてからでいいだろう。カレーで満腹に近づいたら急に睡魔が襲ってきた。

そう。今日という日はいろいろなことが起こり過ぎた。下からはミハシ君の寝息が聞こえてくる。彼も案外肝が据わっている。カレーを平らげるのも早かったし、寝つきもいい。不安も

色々あるが、今は休むべきだ。

ふかふかのマットに体重を預け、俺は深い眠りに落ちた。

どれくらい寝ていたのだろう。とても深い眠りだった。これまでの経験や積み重ねをすっかり忘れてしまったからだろうか、何も考えず、身体はベッドに溶け、どこまでも心が落ちては昇り、落ちては昇り、全ての重さから開放された最高の睡眠だったと思う。しかしそんな至福の時もやがて終わりが来る。人間は起きて食べなければ生きていけないからだ。そんなことを考えつつ、俺の心は意識を現実世界へと引き戻そうと努力をし、やっとのことで眠りから覚めることができた。

目を開けると、そこには皺だらけの顔面が広がっていた。

「うぐう……う、うう？ うう！」

俺はうめき声を上げ、掛け布団で視界を遮断した。すると耳元で、

「よう寝とるね」

というしわ枯れた声があった。おそらくいま見た皺だらけの主から発せられたものだろう。

恐る恐る掛け布団からちらりと外を覗くと、一人の老人がベッドの縁から見を乗り出して、にやにやとこちらを見つめていた。誰だこいつは、こんな奴じゃないぞ。乏しい記憶を総動員して老人の正体を思い出そうとしたが、やはり全く覚えがなく、そもそも自分で覚えていることに大して自信がないため、俺は結局混乱するだけであった。

「だ、誰だあ！」

「まー坊だよ」

「まー坊」と名乗る老人は掛け布団に手を掛け、それを引き剥がした。生暖かい施設の空気が下着姿の俺を晒し、思わず全身を抱きかかえてしまった。「まー坊」は俺のそんな乙女のように

なりアクションを鼻でせせらわらいながら、背後に視線を向けた。その先、つまり老人の背後からやや下の部屋の隅では、やはり下着姿のミハシ君が身体を縮こまらせてがたがたと震えていた。

「せ、先生……」

声変わり前の高くか細い声でミハシ君はこちらに助けを求めた。いや、助けというよりは「こいつ誰ですか?」といった類の質問の意図だろう。しかしそれに答えられるはずもなく、今はただこの珍入者が俺達に何をしようとしているのか、それを見極めてすばやく対応がとれるようにとにかく落ち着くことに努めた。こちらが起きたことに満足したのか、老人は二段ベッドの梯子をゆっくりと降り、俺はその姿を見下ろしてみた。

老人は柿色のくたびれたワイシャツに、灰色

のスラックス、サンダル履きといった服装で、頭髪は耳の上に多少残った白髪であり、背は「く」の字に折れ曲がった、まさしく老いた男性そのものであった。

「あなたはおじいさんだよな。誰なんだい?」

俺の質問に老人はゆっくりと振りかえると、皺だらけの顔でにっこりと微笑んだ。

「まー坊だよ」

ボケているのだろうか、返事の言葉は明瞭明快であったが、それも度が過ぎていたため俺はそう感じた。しかし返事をしてくれるということは、少なくともこちらに今すぐ危害を加えようとしている訳ではないのだろう。まともな答えを当てるにはできないが、俺は二段ベッドから降りて質問を続けた。

「まー坊：あなたは何者なんだ？ いつどこからここにいるんだ?」

その問いに対する自称「まー坊」の答えは案の定明確かつ、突拍子もないものであった。

「僕は鳥になるんだ。文鳥だよ。君は何になるのかな？」

ボケているにも程がある。質問の答えになっていない上、意味も不明である。わかつていたものの、「まー坊」の言葉に俺はなんだか怒りが込み上げてきた。しかしこの気持ちは当の「まー坊」に伝わっていないのだろう。彼は相変わらずニコニコとこちらを見つめるばかりであり、自分から注意を逸れているため安心したのである。うか、ミハシ君はよろよると立ち上がると、壁伝いに出口へと向かった。すると、そこには茶髪男の姿があった。彼は鋭い眼光で「まー坊」を睨み付けていた。

「チツ…またウロウロしやがって…クソジジイが…」

忌々しい口ぶりで茶髪はそう言い放った。この口ぶりからすると、こいつはこの老人のことを知っているのだろうか、しかし昨日はそんな話題はまるで出てこなかった。俺は不信感を抱きながら男に尋ねてみた。

「この老人は何者なんだ…」

「知らねえ…」

なんて素っ気ない返事だ。俺は怒気を男に向けようとしたが、機先を制する形で男は言葉を続けた。

「三日目だったかな…俺が北側のパイプから岬に出たら、東側の岬でぼうっとしてたんだよ」

パイプとはつまりあの煙突のような通路のことなのだろう。そう理解しつつ、俺は頭をフル回転させて男の言葉を分析した。

「じゃ、じゃあつまりこの人は十日ぐらい前からここにいるんだな」

「いや：そうとも言いきれねえんだよ先生。俺がこいつを見つけた時：その：なんつーか、こいつはもう随分と慣れた感じだったんだよな。まあなに聞いても訳わかんねえことしか言わねえし、とにかくこの地下に連れてきたら、真っ先に隣の寝室に行つてよ、そりや結構前からここに居るって感じだったぜ」

「なら：あなたとこの人は、一緒にここで暮らしているのですね」

ミハシ君の質問に男は苦笑いを浮かべ、肩を一度上下させた。

「一緒にねえ：まあそういやそうだけだよ。俺も別に面倒見てるわけじゃねえし、ジジイも何かしろとか言わねえし、勝手にやってるよ」

どうでもいい。男の言葉にはそんな感情が満ち溢れているようであった。彼なりに当初はコミュニケーションを取ろうとしたのだろう。し

かし当の「まー坊」と言えばこうして自分が話題になつて居る間も、こちらにニコニコしたり、いきなりうめき声をあげて天井を見つめ出したりとさっぱりである。男のこれまでの苦勞に同情しつつも、だが納得がいかない事実が一つだけ残つていた。

「なあ：なんで昨日、彼のことを教えてくれなかつたんだ？」

その問いにも、男は実に面倒くさそうに答えた。

「だつてよあ：先生達疲れてたみたいだしよ。起きてからでいいと思つたんだよ」

つまり、この男にとって「まー坊」の存在を俺達に伝えるという作業はとても優先順位が低かつたということなのだろう。

「しかしな：こちらがそちらを疑うきっかけになつてしまう。ボケてても、もう一人人間がい



るって事実はずごく重要なことだぞ」

「ボケてる？ やっぱ先生もそう思ったかい？」

自分と同様の判断をこちらがしていると気付いたためだろうか、男はひたすら得心がいったらしく、こちらの糾弾を無視してしきりに何度も頷いた。その様子があまりにも嬉しそうだったため、俺はなんだか疲れてしまい、気を張るのを止めた。

「はつきりとボケてるとは言いきれないな…ボケ老人を世話した記憶なんてないしな…」

「だけどこいつは絶対ボケてるだろーよ」

男は笑いながら、天井を見上げる「まー坊」を指した。

「あ、ああ…多分な…」

「これでボケてんじやなかったら…まてよ…」

何か思い当たるフシでもあるのだろうか、男

は神妙な面持ちで考え込み、やがてなんらかの結論を導き出したらしく、大きく頷いた。そんな自分勝手な彼の挙動に俺はますます疲れを感じ、昨晚脱ぎ捨てた服を着替えながら「朝メシにする」と告げて部屋を出た。

そんな俺に続いて廊下に出たのはミハシ君であつた。茶髪はまだ寢室でしきりに「うんうん」と声を上げ納得を続け、まー坊老人のうめき声も合いの手のように聞こえてくる。

「先生…どう思います…あのおじいさん…」

「ああ…多分あいつが言ってるようにボケ老人だな…つまり老人性痴呆症。脳の一部が溶けたりして使えなくなつて、まともな思考力がなくなつたり、記憶がきちんと時系列に並ばなくなつたり、怒りや不安なんかの強い感情が剥き出しになつたり…まあまともじゃないし、この状況を打開できる当てにはならないな」

言いながら、よくも我ながらボケに對してこ  
うもすらすらと言葉が出るものだ感心した。

それはミハシ君も同様で、廊下を並んで歩きな  
がらも俺を見上げる目はきらきらと輝いていた。

「さすが先生ですね。なんでもしつてる」

「どうなんだろうね」

曖昧な返事をしつつ、俺はミハシ君の尊敬を  
はぐらかした。

俺達は倉庫の段ボールからスパゲティを取り  
だし、それをレンジで暖めて朝食とした。昨晩  
のカレーと同様、これも灰色の紙箱に「たらこ  
スパゲッティ」と書かれているだけの素っ気  
ないパッケージで、明朝体で書かれた平仮名の  
「たらこ」が妙に間抜けに見えた。

味は美味くも不味くもなく。カレー程の興奮  
と感動は得られなかった。これから先、状況を  
打開しなければこいつとカレーのローテーショ

ンが待ち受けているのだろう。今はまだその事  
實に對する現実的な恐怖は感じられないが、な  
んらかの手を打たなければいけない。

島の周辺に魚はいるのだろうか、地上のジャ  
ングルに食べられる果物はあるのだろうか、そ  
んなことをあれこれ考えながらピンク色のソー  
スがかかった麵を食べていると、先に朝食を済  
ませたミハシ君が、後片付けをして段ボールを  
ごそごそと漁り出した。

「どうしたんだいミハシ君？」

「はい。食糧の残りを調べています。もし魚が  
獲れなかった時のことを考えて」

「そうだな……」

「段ボール一箱に四十八個入ってるみたいで  
す……未開封の段ボールが八個に、この段ボールに  
残り二十三個入ってますから……全部で四百七食  
分……四人で一日三食として一日十二食分が消費

されますから…割ってみると……約三十三日分、つまりだいたい一ヶ月持つ計算になります」

ミハシ君は途中何度も暗算をしつつ、そんな結論を告げた。俺はその的確な計算にすっかり感心し、拍手をしてみたいそうになったが、馬鹿にしているようで嫌だったため、彼の両肩を何度も叩いた。

「すごい、すごい躊躇のなさだよ」

俺の感心にミハシ君は照れてしまったのか、耳を真っ赤にしながら頭を掻いた。

「た、単純計算です…僕達が一日二食にすればもつと日数は増えますし…」

「い、いやこういうのは最初は切り詰めて計算しない方がいいんだ。これから先、何が起こるか分からないしね」

「何が起こるか…ええ…そうですね」

気付いてみれば奇妙な事件の連続である。こ

れから先のことなど俺にもわからない。ただここではつきりとしておかなければならないのは、今という現況を的確に見極めて、これから何が起こっても対応できるように不安要素をできるだけ取り除くということだ。食糧の備蓄を把握しておくのは重要な判断材料であり、それをいち早く行動に移した少年の判断力が俺にはとても嬉しかった。と、同時に、まー坊の存在を告げなかつた茶髪のいいかげんさに、腹が立つてくる気もした。

「あんたら、そこで何やってんだよ」

険悪さを込めた声色が俺達の背後からした。

振り返ってみると茶髪が腕を組んでこちらを睨み付けている。まるでこの主は俺だと言わんばかりに、その目には怒気が宿り、初対面の頃の殺気が戻っていた。

「食糧の備蓄を調べてたんだ。俺達四人で一ヶ

月は持つ」

きつぱりと言い放った俺に、茶髪は怒気を消し視線を床に落とした。恐らく自分の反応が過敏で、向けてしまった殺気に後悔でもしているのだろう。しかし次に彼の口から出た言葉は単純かつ、理解に苦しむものだった。

「あんまりごちゃごちゃいじんなよな」

そう言い放って彼は廊下に姿を消した。俺は思わずミハシ君に顔を向け、ミハシ君はきよんと立ち去る茶髪を目で追っていた。

「あいつ…なんで怒ってるんだ？」

「さあ…不安…なのでしょうか…」

「なんで不安になるんだよ…別に盗み食いをしていたわけじゃないのに…」

あの男の気分は乱高下する。しかしその原因が俺にはさつぱりわからなかった。だがミハシ君言う「不安」という言葉は妙に納得がいく気

がした。

奴が不安だとすれば、それは多分この状況そのものに対してだろう。奴は俺達をまだ信用していない。だから俺達が自分の知らないところで何かやって、その結果状況が進展するのが不安でしようがないのだろう。しかし自分からこちらへ積極的に行動を提案するセンスは持ち合わせていない。俺はそう結論づけると、まー坊はともかく今後はあの茶髪も含めた三人という単位でできるだけだけ行動するべきだろうと無理やり思い込むことにした。

「先生…」

「ん…なんだい？」

「あの人のこと…なんて呼びます？」

あの茶髪男をどう呼ぶのか、それはすなわち俺達と奴の人間関係を構築していく上で、極めて重要なことのように思えた。ミハシ君の問い

かけに俺は頷き、顎に手を当てて考えてみた。

「そうだな…なんて呼んで欲しいかだよな…」

まずはそれを話し合うことが、彼と俺達の最初のコミュニケーションだと判断した。そう、この島から脱出、もしくは安定した生活を手に入れるために協力しなければいけない、奴も言わば同じ境遇の「仲間」である。早く奴を「俺達」という単位に組み込まなければこれから無駄な労力を費やすだけだろう。俺は倉庫から茶髪を追うために駆け出し、ミハシ君もそれに続いた。

「俺をどう呼ぶか？」

茶髪は戸惑った様子でそう呟いた。俺達と茶髪は端末が置かれている中央広場にいた。茶髪は椅子に腰掛け、俺は彼に向き合う形で机に寄りかかり、ミハシ君は壁にもたれていた。

「ああ…いつまでも『君』とか『あんた』じゃ言い辛いんだよ。これから一緒に行動していくわけだし、俺は一応『先生』あの子は『ミハシ君』それにおじいさんは『まー坊』って取り敢えずの呼び名があるだろ、君にも必要なんだよ」「それもそうだよなあ」

先ほどまでの怒気と殺気はどこへ行ったのか、茶髪は俺の提案に面白がつている様子だった。

「だけどよ。記憶がなんにもねえんだよな。だから名前の手がかりも全然なんだよな」

茶髪は、まだら色の頭髪を掻きながらそう呟いた。俺にしてみれば、こいつは「茶髪」と呼んでしまうのが一番手っ取り早い。しかしいくらなんでもその呼び名はあまりにも非友好的で、彼自身が気に入るとは思えないため、こちらから提案のしようもなかった。彼は数分ほど黙り込むと、やがて結論を導き出したのか、再び頭

を掻いて照れくさそうな笑みをこちらに向けた。

「リキってのはどうだろうか……」

どうだろうかと言われても……そう呼んでほしいのならそれでもいいだろう。「リキ」という固有名詞にどんな意味があるのか、俺にはわからないが、こいつの僅かな記憶の琴線に響くキーワードなのだろう。

「い、いや……ちよい待ち……いや……シヨウってのもいいなあ……い、いや……どっちがいいだろう」

茶髪は苦笑いを浮かべつつ、俺に判断を求めた。「リキ」と「シヨウ」なんだか芸名みたいで、どちらにしても呼ぶには気恥ずかしさが伴う名前だ。俺が判断に困っていると、茶髪の背後から甲高い声が上がった。

「リキだよ。リキだよ」

その声の主は、いつの間にかやってきたまー坊であった。茶髪はどきりとして振り返り、背

の折れ曲がった笑顔の老人を睨み付けた。しまー坊はまるで動じることなく、ただひたすら「リキだよ、リキだよ」と繰り返して、最後には茶髪の両腕を掴んで、必死の形相で「リキ、リキ」とうめき出した。これにはさすがの茶髪も参ったのか、まー坊を振りほどくと机の縁に手を置き、冷静さを取り戻しつつ頭を何度も振っていた。

「うー、うーうあー」

まー坊はうめき声を上げながら、中央広場から西エリアへとよろよろと歩き去っていった。

俺は思わずミハシ君に注意を向けたが、彼は呼吸を整えている茶髪を無表情に凝視していた。

「じゃあ……リキでいいんだな」

俺の提案に、数瞬躊躇したのち、茶髪は小さく頷いた。

「あ、ああ……へへ……名前があるのっていいよ

な。なんかいいよな。記念に酒でも飲みたい気分だぜ」

リキは笑みを浮かべてそうつぶやくと、ペロリと唇を一舐めした。

「じゃありき…これから俺達でできる脱出計画を練ろう。ミハシ君もいいね」

ミハシ君は頷きながら着席し、これでようやく俺達三人が落ち着いて事態の検討ができる状況が整いつつあった。

脱出計画を練ると言ったものの、提案をするのは俺ばかりで、茶髪ことリキはこちらの言葉に時々頷くだけで、よく理解しているのかどうかも怪しく、ミハシ君も話は聞きつつも目の前にある端末のパスワード解析に目と手を集中させていた。

「なあ…二人から何か提案するべきことはないのかよ。さつきから俺ばかりがしゃべっているぜ」

俺の困った声に、リキが眠そうな目を擦りながら反応した。

「いいつスよ…先生が提案した通りで…こいつはパソコンの解析、先生と俺は島の調査に狼煙の準備と食料の確保…完璧じゃないっスか」

リキは面倒な考え事は全て俺に任せようとしているのか、責任を軽減するためなのか、言葉

遣いもいつの間にか変化していた。ミハシ君もリキの言葉に軽く頷き、その後「そうでしょ」という目でチラリとこちらを一瞥した。

特に理解し難いのはミハシ君の対応だった。たった二人で嵐を抜けて、それからしばらくこの少年は俺を頼り、時には的確な助言を与えてくれていたのに、今ではすっかり端末の虜である。リキの名づけを提案してくれてから、まだ三十分も経っていないと言うのに…疲労感を覚えながら、俺は彼らからの建設的意見を導き出すことを諦め、机に突っ伏しているリキの傍まで寄った。

「地上に上がるぞ…狼煙を上げにいくんだ」

「今からっスか？」

面倒くさそうにリキは呟き、その目は眠そうにとろんとしていた。

「今こうしている間にも、飛行機や船がこの側



を通過しているかもしれないんだ！」

俺の叫びにミハシ君は手を止め驚き、リキは上目遣いに睨み付けた。

「一体どうしたんだ。助かりたくないのか？もつと緊張しろよ！」

「あー…わかったよ…だから怒鳴らないでくれよ…」

リキは体調でも悪いのだろうか。気だるい口調で咳くと、面倒くさそうに立ち上がった。

北側の出口から岬へと登った俺とリキは、早速あたりの岩や石を集めてそれを囲むような形で置き、狼煙を上げる場を作った。

「これでいいんスカね」

出来上がった狼煙場を見下ろしつつ、リキが困り声を上げた。

「さあ…俺も狼煙なんて上げたことないから…ただこれだけ岩を積み上げとけば、取り敢え

ずいいんじやないのかな。ジャングルからも離れているしな」

「そ、そうっスよね」

膝の高さまで積み上げた石や岩を見下ろしながら、俺達は気まずい笑みを浮かべ、そこにジャングルから刈つてきた葉や枝を放り込み、最後にライターで火を付けた。昨日までとは違い、乾いたライターは勢い良く着火し、瞬く間に火は炎となり、俺達はたまらず口を抑えながら退いた。

「ねえ先生！」

メラメラ、バチバチという燃焼音に負けないように、リキが叫んだ。

「こんな勢い良くて、ジャングルの木、あつという間に燃え尽くすんじゃないっスカね？」

「いざとなったら地下から燃やせる物を持って来よう」

「そう、それもそうっスね。食い物の入れ物とか、燃やせる物はあるっスもんね」

額から流れる汗を拭いつつ、俺達は取り敢えず完成した目印に満足し、互いに笑みを交わした。

狼煙の火は、俺とリキ、そしてミハシ君の三人が交代で見張る段取りになっていた。しかしこの炎がいつ尽きるか、狼煙の経験がない俺には見当もつかなかったため、最初の当番は自分ですることにした。夕飯のカレーを平らげた後、俺は梯子で地上に出て、狼煙場へと向かってみた。

案の定、火は燃え尽きていて、狼煙場は暖かい空気と焦げ臭さに包まれていた。石や岩で作った囲みの中に、あらかじめ用意しておいた予備の枝や草を放り込むと、俺はポケットからライターを取り出して火をくべた。しばらくする

と炎が辺りの闇を照らし、その向こうにはいつの間にも地上に上がってきたのか、まー坊の姿があった。

「散歩ですか？」

まともな返事など返ってくるはずもないが、俺はなんとなく岬をとぼとぼと歩く老人に声をかけてみた。まー坊はこちらへ振り返ると、俺の背後で燃えている狼煙の炎をじっと凝視して口をもごもごと動かし始めた。何を言っているのかと興味を持って近寄ってみると、まー坊は炎を凝視したままこんなことを呟いていた。

「あつい、あつい…あああ、あつい」

汗はかいていないようだが、狼煙の炎が強いのだろう。そう判断した俺は、まー坊の両肩を掴んで、狼煙場から遠ざけた。

「まー坊さんは…今朝、文鳥になるって言うんですけど、ありやどっいう意味なんですか？」

返事を期待せずそう尋ねてみると、まー坊は俺の手をぎゅっと掴んできた。

「鳥になって帰るってこつたよ」

まー坊の声は、意外としつかりしていて、妙に確信に満ちたものだった。

島の調査は思うように進まなかった。あれから五日が経過したが、調査開始二日目にして地下施設の探索は完了してしまつた。と言つてもわかつたことなど何ひとつなく、閉ざされている南エリア扉はびくともせず、北エリアの機械は何かの動力源であるという事実以上は何も判明せず、東エリアが存在するとしても、そこへの進入方法も見つからなかつた。

主に行動を共にしたのはリキであったが、日に日に彼はその仕事を面倒くさがるようになり、四日目からは俺が単独で調べ、彼は狼煙の番以

外は地下施設で一日ぼうつと過ごしていた。まー坊は実に気ままで、地下と地上を自由に行き来し、時々言葉を交わすこともあつたが、意思の疎通を図ることは無理であつた。

そして、ミハシ君も狼煙の番以外は中央広場の端末にかかりきりであつたが、たまに俺が画面を覗いてみても例のパスワード入力画面から先に進んではいなかつた。

もちろん、俺達四人以外にこの島には虫一匹すらおらず、船や飛行機が通過することもなかつた。調査がてら地上に出てみても、島の周りには静かな海と雲ひとつない青空が広がるばかりで、全てにおいて、漂着した日から変化は何もなかつた。

ある日、ふと疑問に思い、この島の水がどういったシステムで確保されているのか調べてみると、シャワールームから水道管を辿ってみ

ようとしてみたが、壁の中へと続く管を追ってみようにもその知識も手段もなく、結局はシャワールームのパネルを一枚はがすだけの結果に終わっていた。しかもその際、パネルの撤去に必要なナイフをリキに借りに行こうとしたところ、彼は一度はそれを拒絶し、事情を詳しく話してやつとのもので借りることができた。

狼煙に使う草や枝はこれまで俺とリキが順番にナイフで刈っていたが、この日以来、その仕事はリキが全て独占するようになっていた。刃物の所有権が独占されていることは危険ではあったが、俺はそれをリキに告げることができず、そもそもその考え事態が仲間に対する不信感の表れであるのを悟られるのは怖かった。

俺達は、この大海に浮かんだパセリの上で、互いに最低限のルールを守りつつ、実にばらばらに生息しつつあった。

一週間目の朝、停滞した俺達の状況を変化させるのに、丁度いい事件が起こった。ミハシ君が朝食のカレーを拒絶したのだ。

「僕：今日は夜だけでいいです：先生みたいに外を調べてるわけじゃないですから：そんなにお腹も減りませんし：」

飽きを理由に食事を抜こうとしているのは、ここ数日彼の食事の様子を観察してよく理解していた。ミハシ君に当初の食欲はなく、最近ではスプーンやフォークを動かす所作も緩慢である。俺は全員の気分を転換するのにいい機会だと思い、皆を中央広場に集めた。

「なあ、俺から提案があるんだ」

リキは腕を組み、ミハシ君は椅子に腰掛け、まー坊はぼんやりしながら、俺の言葉に耳を傾けていた。

「魚を捕りに行くこうじゃないか。この島の周りは海だ。きっといるはずだし、ぼちぼちレンジ食品にも飽き飽きだろう」

俺の提案に、リキとミハシ君は目を輝かせた。まー坊は相変わらず視線を宙に泳がせているが、二人が賛同してくれそうな事実、俺は正直ほつとしつっ、気を引き締めた。

「狼煙を上げているが、おそらくこの島はどの飛行機や船の航路からも外れているんだろう。あと数週間もすれば食料はそこを尽きる。ジャングルを畑にするって手もあるが、種もなければノウハウもない。魚捕りが一番手っ取り早いと思うんだ」

「あ、あの…」  
ミハシ君が気弱そうに手を上げたため、俺は彼を軽く指した。こうなるとまるで本当の先生のようなのである。

「釣りの道具とか…どうやって作るのですか？」

「ふん…んなもん、枝を竿にすんだろ、その辺に落ちてるロープを解して糸にすんだろ。針は…そうだな、プラスチックのフォークを削りこみや、サマになんだろ。エサはカレーやらスパやらでどうにかなる」

リキはそう畳み掛けるように言い、その口調があまりにも断定的であつたため、ミハシ君は納得したのか何度も頷いた。

「そう…ここである物でなんとかなる。まあまずは海の様子を調べよう。どんな魚がいるか、実際に潜ってみるんだ」

「あ…ですけど…僕は…泳ぐのは…」  
「安心しろ。俺が潜ってみる。泳ぎは…たぶん得意だぜ」

ミハシ君があまりに不安そうだったためか、

リキは力強く告げ、俺へ自信に満ちた視線を向けた。彼がこんなに乗り気ならば、もつと早めにこの提案をすればよかつたと思ひ、そう言えば最初に彼と会つた際、「魚はいいな」と嬉しそうな様子であつたことを今更ながらに思ひ出した。やはり生理に直結する欲求となると、人間は能動的になるものなんだろう。

まー坊を含めた俺達四人は、初めて揃つて地上へと出た。日差しが相変わらず強く、空には雲一つない。漂着以来、なんの変化もない青空を見上げながら、俺達一向は北の岬までやつて来た。

「この岸壁を下つて海へ潜ろう。リキ…やつてくれるか？」

「うっす」

リキはジャンパーを脱ぐと、それをミハシ君に手渡し、岸壁にしがみつきなながら海面へと降

りて行き、途中で海へと飛び込んだ。

「ひゃー！ 海は生ぬるいっすよ！」

「だろーな。この日差しだもんな」

「島の周りを泳いでみるっす！」

言いながら、リキは最初はクロールで、やがて平泳ぎで島の外周に沿つて泳ぎ始めた。確かにその泳ぎには躊躇がなく、彼が言う通り得意な方なのだろう。安心した俺は、ふと辺りを見渡した。すると、まー坊が狼煙場へと向かつてふらふらと歩き始めていた。これだからボケ老人は困る。火傷でもしたら面倒だと、俺が彼を連れ戻しにいくと、何を思ったのかまー坊は突然ジャングルに向かつて走り始めた。

「こら！ じいさん！」

たまらず俺は、まー坊を追いかけてジャングルへと分け入った。しかしまー坊の足は思ひの他早く、気が付けば俺は彼を見失ひ、静寂のジ

ヤングルに一人いた。

本当に静かなジャングルだ。遠くから聞こえる波と、風が葉を擦り合わせる音以外は何も聞こえない。

膝まで生い茂った草を引きちぎり、なんとなくそれを掌からこぼしてみる。草のうち何本かはそのまま地面へと落下したが、一本だけ、風についてのるか前方へと飛んでいった。奇妙なまでに落ち着いた気持ちでその行方を視線で追っている、やがて俺の視界に一人の少年の姿が映った。

そう。確かにあれは少年である。黒い髪に黒い瞳、薄手のYシャツと半ズボンも真っ黒で、白い肌とのコントラストが強い日差しの中で輝いているように見えた。ミハシ君よりもっと幼いその少年は、俺の存在に気づくと顎を上げ、冷たい視線をぶつけてきた。その鋭い目付きに

は威圧感こそないが、何かこちらの胸の内を見通しているような冷徹さが感じられた。

それにしても色の白い少年である。見た目に生気がなく、まるで幽霊のようにも見える。もっとも、本物の幽霊などこれまでに見た憶えはないが。

「君は誰だ!？」

俺の問いかけに、少年は右手をすっと上げることで応えた。手足は全身の体形相応に細かつたものの、指の先は思いのほか太く、それが奇妙な印象を与えていた。そして、彼の右手の甲には、俺と同じく赤く「管」と書かれていた。

「それが返事か! それは俺と同じ印だ! これは一体なんなんだ!？」

しかし、少年はその問いかけに何の反応も示さず、右手を突き出した姿勢のまま、冷たい視線をぶつけ続けていた。彼は俺達とは違う。こ

の確信に満ちた行動は、俺達のような記憶喪失の漂着者ではなく、この島そのものを理解している者のはずだ。直感的にそう理解した俺は、少年との間を詰め、もつと具体的な質問へ行動を移そうとした。その瞬間。

「先生！ 先生！」

ミハシ君の甲高い声が背後から飛んできた。

「リキさんが何か見つけたみたいですよ！ 戻ってきてください！」

俺は思わず背後へ振り返り、ある一つの予測をしつつ、もう一度少年へと振り返った。

案の定少年の姿はなく。予測は確信へと変化した。あの少年はこの不可解な島の関係者に違いない。

俺がジャングルから岬へと戻ると、ミハシ君がこちらを手招きして、海面を指していた。そちらを見ると、懐かしい物体が浮いていた。あ

れは俺とミハシ君が乗ってきたボートだ。岬から身を乗り出すと、ボートの陰からリキが姿を現した。彼はボートにつかまり、上半身だけを海面から浮かび上がらせていた。

「ミハシから聞いたつすよー！ これ、先生達が乗ってきたボートでしょー！」

「ああそうだ！ よく見つけたな！」

ボートはこの島への上陸と同時に高波にさらわれてしまったはずである。もつとも、ここへ漂着する際も、ボートは自然に流れ着いたため、よく考えてみれば再びこの周辺に姿を現すのは不思議なことではなかった。

「先生！ 地下の倉庫からロープを取ってきて下さい！ 取り敢えずこいつを固定しましょう！」

「僕が取ってきます！」

リキの判断にミハシ君が応じ、彼は大きく頷



いて岬の入り口へと駆け出し、地上から地下へと姿を消した。少しして「ひいひい！」という悲鳴が聞こえてきたが、おそらく梯子を降りる際に、また下でも見てしまったのだろう。それからしばらくして、汗だくになったミハシ君がロープを抱えて戻ってきた。その間、リキはボートを岸壁へと寄せていて、彼らの行動は満点に近い確さだった。こうなると俺のすることは少なく、そのためある考えが脳裏をよぎった。ひよつとすると、さっきジャングルでみた少年は、あのボートでここに来たのかも知れない。だとすれば、あれを確保することはすなわち少年の移動手段を封じるといふことである。そうなれば再び会い、事情を問いつすこともできるだろう。ミハシ君から受け取ったロープの先を下にいるリキへと投げながら、そんなことを俺は思案していた。

「先生！ 手伝つてくれ！」

海面からの呼びかけに応じ、俺は上着を脱ぎつつロープをミハシ君に渡し、岸壁から海面へと降りた。リキはボートの先端部分にロープをしつかりと巻きつけていた。

「リキ、こりや大した戦利品だぞ」

「そうっすよね。これがありゃ、釣りにも出れるし」

「ああ、それに船が通りかかったら近づくことができる」

ボートが揺れないように支えつつ、俺達はそんな言葉を上機嫌で交わした。リキは岸壁を見上げ、ミハシ君に次の指示を与えた。

「ミハシ！ ぼーつとしてねえで、早くロープを固定するんだ！」

しかしボートから伸びたロープの先、つまり岬からミハシ君の姿は見えなかった。

「ミハシ君！ どうしたんだ！」

「こ、怖いのです…」

波の音にかき消されそうな、か細いミハシ君の声がかるうじて俺の耳に届いた。そうか、彼が高所恐怖症であることを、俺はすっかり忘れていた、ついさつきも梯子下りる悲鳴を聞いたばかりだというのに。自分の迂闊さに苦笑いを浮かべてしまったが、反対側でボートを海中から支えるリキは、目に殺気を宿し、ミハシ君目がけて怒鳴ろうとしていた。

しかし、リキが叫ぶのより早く、一陣の強風が海面から崖に吹き上げてきた。俺とリキは風と同時に発生した高波に全身を覆われてしまった。

身体が海中に放り出され、四肢の動きが水圧の抵抗でままならない。もがき苦しつた俺は、岸壁から突出する岩にしがみついた。ふと目を

開けると、リキも同じ岩にしがみついている。

「リキ！」

「先生！ ボートが！」

リキは飛沫から顔面を守りつつ、一点を指していた。俺がそちらに視線を向けてみると、空中に舞ったボートが海面へと着水し、それは高波で遙か彼方まで流され小さくなっていた。リキはそれを追いかけてようとして再び海面へ身を投じようとしたが、俺はたまらず彼の腕を掴んでそれを止めた。

「先生！」

「無茶だ！ 遠すぎる！！」

「だ、だけだよ！」

ボートは見る見るうちに小さく遠ざかっていき、十分ほどすると肉眼でその姿を確認することはできなくなっていた。がつくりと肩を落とし、落胆している俺達は、相変わらず突起した

岩にしがみつき、腰から下は海中という有様だったが、そんな胸元に、ボートを固定するはずだったロープが流れてきた。それを見たリキは。

「あいつが！」

目を血走らせ、ロープを掴んだまま岸壁を凄まじい勢いでよじ登り始めた。俺もただならぬ彼の殺気に嫌な予感がして後を追ったが、とても追いつけるスピードではなかった。ようやく岸壁を制覇し、地上へと戻った俺が目の当たりにしたのは、ミハシ君に馬乗りになって制裁を加える、ずぶ濡れのリキの後姿であった。

「こいつ！」

リキの拳がミハシ君の顔面を打ち付け、彼のかけていた眼鏡が地面へと落ちた。俺はたまらずリキを羽交い締めにして、ミハシ君から引き剥がした。

「こいつがとつととロープを木に縛り付けとき

や、ボートは流されずにすんだんだ！」

「いきなりの突風だったんだ、仕方ないだろ！」

そうは言い返したものの、ミハシ君がおおろして行動が遅かったのも事実であったため、俺はそれ以上何も言わず、ただリキの暴拳を背後から制し続けていた。

「くそつたれが！」

そう言い捨てると、リキは羽交い締めを振りほどき、入り口から地下施設へと戻ってしまった。俺は、あお向けに倒れているミハシ君を抱き起こした。

「う、うううう……」

口からは血を、眼からは涙を、鼻からは鼻水を、それぞれ大量に吹き出しつつも、ミハシ君の目には怒気が滲んでいた。俺がその眼光にたじろぐと、彼はヒビの入ってしまった眼鏡を拾い、喉から唸り声を上げた。

それはまるで動物が威嚇するかのような、低く禍々しい唸りだった。

魚を捕りに行こう。こんな俺の提案はおそらく最悪の結果を導き出してしまったのだろう。

あれ以来、リキとミハシ君はお互いはこちらん、俺とも口をきくことなく、それぞれの部屋から外に出ることはなかった。もっとも、リキは食事の際には倉庫に行くし、気分転換で地下施設内を散歩していることもある。だがミハシ君は、二段ベッドから決して出ることがなく、食事も俺が持つてくるレンジ食品を僅かに口をつけるという有様で、つまりは加害者と被害者の差が浮き彫りになっていた。しかし俺にとつては、狼煙の番を一人でこなさなければいけなくなつたという事実には差はなく、そもそも俺自身の提案で招いてしまつた事態のため、二人のやる気を喚起させるという行動はとりづらかつた。つまり、俺は彼らに遠慮して、彼らもそれ

を受け入れているようであつた。

ある昼間、俺が狼煙の番をするために地上へと上がると、まー坊が蹴だらけの顔をくしゃくしゃにさせながら、岬から歩いてきた。

「ずいぶんとご機嫌な様子だな」

少なくともこのボケたじいさんに遠慮はいらない。そのためか、最近の俺はこのまー坊と言葉を交わす機会がずっと増えていた。もっとも、彼からまともな返事がくることはなく、一方的なコミュニケーションなのだが。

「ね、ね、あれ、あれー」

まー坊は枝を狼煙場に放り込もうとする俺の腕を掴んで、強く引つ張つた。

「ど、どうしたんだいじいさん」

まー坊は岬へと俺を強い力で引つ張つた。老人だと言うのに、このまー坊とは足も速く力も強い。そんなことを思いつつ、俺も退屈だつた

ので引つ張られるままにしておくと、まー坊はやがて立ち止まり、海面のある一点を震えながら指した。

海面には、仰向けで流れる人間の姿があった。島までの距離は百メートルほどだろうか、小さく姿ははっきりしないが、上半身が裸で海面に長い頭髮が広がっていた。

「お…お…女か!？」

俺は思わず口に出してそう言った。まー坊は奇声を上げながら、ひたすらその人物を指し、相変わらず俺の手を強く握り締めていた。

「そ、そ…うだな…助けないとな…」

海面は穏やかで、仰向けの人物がもし生きているとすれば溺れる心配はないが、この島の周辺にはこの間のように突然の突風や高波の危険がある。俺は迷うことなく地下施設まで降り、シャワールームからバスタオルを持って来ると、

廊下で大声を上げた。

「リキ！ 手を貸してくれ！」

リキは北エリアの巨大な動力源の側にいた。

こちらの声に気付いたのか、リキは不思議そうな表情で、通路からやってきたタオルを握り締めた俺を凝視していた。

「な、なんだよ…俺に何か用かよ」

この間の一件以来、彼と言葉を交わすのは初めてだったため、リキの言葉は硬かった。俺も遠慮があるはずだったが、先ほど目撃した長髪の漂流者の存在が、そんなちっぽけな感情を押しやっていた。

「人が流れ着きそうなんだ。生きてるか死んでいるかはわからないが…女かもしれない」

「お、お…お女あ!？」

リキは甲高い声で、目を見開いてそう叫んだ。「そうだ。だけどここから百メートル近く沖な

んだ。まー坊が発見したんだが、俺達だけじゃどうにもならない。リキも手伝ってくれないか」

「あ、ああ…わかった！」

リキと俺は北側通路から地上へと上がり、今度は岬から海へと降りた。

クロールで泳ぎ始めたリキのスピードは速く、とても追いつけなかった。このままだと漂着者と最初に接触するのはリキであるが、それも仕方ないだろう。

波のせいかな、漂着者は先ほどよりずっと島に近づいていて、リキが接触するのに十分とかからなかった。彼は右手を振って、俺に向かって驚いた顔を向けていた。

「先生！ 男だよこいつ！」

俺もようやくリキに追いつき、漂着者を確認した。仰向けに浮いているそれはリキの言う通り若い男で、岬から見下ろしたときと同じよう

に、黒くて長い髪が海面いっぱい広がっていた。上半身は裸であり、黒い革のパンツの先には、やはり黒い皮製の靴を履いていた。恐らく長身で、顔立ちは顎が細く鼻筋が通っていて端正で美しかった。

俺は、同性だと言うのに、しばしこの漂流者に見とれてしまった。

「なあ先生、こいつ生きてるけど、どうするよ」俺が確かめてみると、男の引き締まった腹は呼吸で上下し、右手を取ると一定の脈が感じられた。それにしても、なんて安らかな表情で浮いているのだろうか。まるでこの穏やかな海を何時間もかけて、何事もなく静かに流れてきたかのような、そんな力みのまるでない様子だ。

「島まで連れていこう…」

「あ？ あ、ああ…そつだな…」

リキは躊躇しつつ俺の提案を受け入れ、俺達

はひとまずこの美しい青年の両肩を抱き、島まで引つ張って泳いだ。

「なんで裸なんスカね」

西側の岬に青年を寝かせた俺達は、あらためてこの漂着者を見下ろして観察した。

「さあな…うん…俺は水を持つてくる、君は彼を見てくれ」

岬の根元には、北側や南側と同じように地下施設へ入り口がある。俺は梯子で下まで降りると、倉庫に向かいコップに水を入れた。あの青年もやはり俺達と同じように記憶がないのだろうか、そんなことを考えつつ倉庫を出ようとする俺の視界に、廊下でたたずむミハシ君の姿が入った。

「ミハシ君…」

リキの暴力に晒されて以来、この少年はずっと部屋に引き籠もり、中央広場にある端末のバ

スワード解析も狼煙の番も、つまりこの島で与えられた仕事は一切投げ出してしまっている。

彼の気持ちもわからなくはないため、俺は何も言わなかったが、これはいいきっかけだろうとも思った。しかし具体的に彼へ指示を出す時間的なゆとりはなかった。

「何か…あつたのですか？」

「ああ…新しい漂着者が流れ着いた…いまリキが岬でみてるが…」

「そ、そんなのですか…」

不安そうなミハシ君は俺の言葉にそれほど驚いた様子ではなかったが、かまわず俺は廊下へ出て、突き当たりの梯子まで急いだ。

梯子を登って地上に上がろうとすると、俺に続いて梯子に手をかけるミハシ君の姿があった。

岬に出ると、リキが相変わらず青年を凝視したまま突っ立っていて、その姿はひどくぶっき



ら棒で気が利かなく見えた。

「タオルで身体を拭いてやるぐらいしたらどうだ」

俺に言われると、リキはハツとして足元にあるタオルを手を取った。

「こいつ、なんで裸なんスカね」

「俺にわかる訳ないだろ。お前：こいつに見とれてたのか？」

「ま、まさか：だつてこいつ、男っスよ」

青年の背中を抱きつつ、その身体を拭くリキの言葉には戸惑いが感じられた。しかし彼がもし見とれていたのも無理はない。それ程、この青年はスポーツ選手のように逞しく、モデルのように長身で、歌舞伎役者のように端正な顔立ちの、つまりは美しい容姿であった。俺は彼の口にコップを近づけ、水を飲ませてみた。

「こ、この人が：流れて来たのですか：」

地上に上がってきたミハシ君が、ま一坊と一緒にやって来た。二人の様子はひどく対照的で、少年は不安そうで、老人は嬉しそうであった。

「そうだ。海に漂流していた。怪我はしていないようだが、気を失っている」

「こ、この人も：記憶がないのでしょうか？」

「ずっと気を失つてるんだ、だから確かめようもないよ」

なぜリキもミハシ君も、俺に答えようのない質問をするのだろう。そんなことを思いつつ青年に水を飲ませていると、彼は急に咳き込み、俺とリキは思わず身を引いてしまった。

「ゴホッ、ゴホッゲボホオ！！」

青年は口から水を吐き出し、その量は飲ませた以上の量であった。おそらく飲み込んでしまった海水を吐き出しているのだろう。俺がそっ

と背中をさすると、呼吸を整えつつ彼はどきりとして振り返り、すぐさま手を払いどけ、腰を浮かせた。

「だ、誰だよあんた！」

鼻にかかった低い声で青年はそう叫んだ。大きく見開いた目は俺達四人を何度も見比べ、若干ではあるが緊張が和らいでいくのが感じられた。そりゃそうだろう。目がさめて軍服を着て武装した者達に囲まれているのならともかく、俺のような普通の男と、やや物騒ではあるが茶髪青年と、学生服姿の少年と老人である。彼には俺達が危害を加えそうにない者達に見えたはずだ。

「俺達は皆、何の関係もなく、この島に流れ着いてきた。共通しているのは、全員がこれまでの記憶がないという一点のみだ。そしてここは無入島だ。どこの国でどんな場所なのかも定か

ではない。地下に暮らせるだけの近代施設はあるが、その施設を管理する人も不在で不明だ。俺達は勝手にその施設を使ってここで暮らしている。」

できるだけわかりやすく、ゆっくりとした口調で俺はそう説明したが、まあ簡単に受け入れられる内容ではないだろう。そう思っていると、青年は視線を地面に落とし、何やらぶつぶつと咳くと大きく深呼吸をして再び咳き込んだ。するとリキが青年にタオルを投げ、腕を組むと俺の説明に続いた。

「俺はな、これは最初テレビ番組かと思ってたんだよ。俺以外は全部テレビの人間で、観察でもしてるんじゃないかとさ。だけでもう何週間も続いててよ。どうやらマジらしいんだよ。本気で記憶もねえし、船もねえし電話もねえから狼煙ぐらいさ、できることは」

リキの説明は、おそらく俺のそれより格段にわかり辛く主観的な感想だろう。青年は咳を止めると頭を何度か振り、冷めた笑みを浮かべた。  
「俺も…まったく覚えてない…目が覚める前までどこでどうしてたのか、思い出そうにも先に進めない…ただ…」

青年は視線を俺に向け、笑みを止めた。

「ひどく静かだった…浮いていたように…安らかだった」

「それこそ海に浮いてたんだよあんたは」

リキにそう言われ、青年は「ふうん」と頷き、今度は柔和な笑みを浮かべた。

「あの…なにか持っていないのですか？ あ…僕はミハシっています。この先生に付けてもらった名前ですけど…」

「あ、ああ…そうだな…」

青年は皮のズボンのポケットを漁り、そこか

ら青い合成樹脂の塊を取り出した。

「うお！」

リキがうめいたそれは、携帯電話であった。

「俺のなのかなあ…」

青年は首を傾げながら、自分が取り出したその機械を見つめていた。リキは興奮した様子で青年の背後から覗き込んだ。俺とミハシ君もゆつくりと青年が手にした携帯の画面を観察した。  
「濡れてて壊れてんじやねえのか？」

しかし青年が電源のスイッチを押すと、灰色だった画面は点灯し、「電源ON」の文字が表示された。まー坊を除いた俺達は一様に興奮したが、当の青年は無人島への漂着という状況をまだ把握していないためか、いたって平静であった。彼は慣れた手つきで携帯を操作し、やがてため息をついた。

「自分のなんだなあ……これ。手が覚えてるや」

そう呟くと、青年は携帯の電源を切り、再びそれをポケットにしまい込んだ。

「お、おいお前、なんでしまつちまうんだよ！」

リキが興奮して問い詰めると、青年は彼を軽く突き飛ばし、その場に腰を下ろした。

「圏外つて表示だ。リダイヤルにも何も入っていない、メモリーに番号が一つも登録されていない。この携帯からわかるのは、こいつの番号だけ」

「も、もうちょつと頑張つてみるよ」

体勢を整えつつ尚も問い詰めるリキに、青年は冷やかな笑みを浮かべた。

「ならあんたがやれよ。」

そう告げると、青年は携帯をリキに投げ、リキは舌打ちをしながらその電源を付け、モニタ―を見ながらうろつき始めた。俺は青年の一連

の行動に感心し、彼に告げた。

「この無人島は、四つの岬がある以外は虫一匹いないジャングルがあるだけだ」

俺が背後の森を指すと、青年は立ち上がりつつ振り返り、前面に広がるそれを認識していた。

「虫一匹いないつて……信じられないな……」

「詳しく調べたら一匹ぐらいはいるかもしれない。ただ俺達四人に昆虫の知識が豊富なのは一人もいない。」

「なる程、じゃあ虫からこの場所を推測するの  
も……」

「草木から推測するのも無理つてことだ」

「ふうん……俺も無理だな」

俺と青年の会話はスムーズで、それは記憶がなくなつて以来初めて経験する知的な刺激であり、しゃべりつつも俺は興奮していた。

「そして四つの岬のうち、南北と西には人工の

入り口がある。そこから梯子で降りた先には地下施設がある。そこに案内しよう」

「ああ…よろしく頼むよ先生」

「先生…？ 何で俺をそう呼ぶんだ？」

「だって…そのミハシって学生がそう言うってじゃない」

どうやらこの青年は記憶力もいいようだ。短気な青年に気弱な少年。そしてボケ老人と、この島での生活に絶望を感じ始めていた俺は、この青年に今後、状況の打開を手伝ってもらえるかと勝手に確信し、すっかり上機嫌になっていた。

俺達は携帯をもったままのリキと彼をぼうっと見つめているまー坊をそのままに、青年を西側の入り口から地下施設へ案内した。居住エリアの廊下を歩きながら、青年はきよるきよると地下施設を驚きつつ観察していた。

「ここが西エリア。主な施設は居住できる部屋

と食料のある倉庫だ。部屋は三部屋あってそれぞれ二段ベッドとシャワールーム、トイレがある。水は多分使い放題だけど、一応使いすぎないように気をつけている」

俺とミハシ君が寝泊りしている部屋を見せると、青年は嬉しそうにベッドに腰掛けた。

「シャワーがあるのはいいねえ。後で使わせてもらうよ。塩で身体がヒリヒリするんだ」

「ああ、説明が終わったらそうしてくれ」

俺達は食料庫に青年を案内した。

「段ボールの中にカレーとスパゲッティが入ってる。流しの下にある電子レンジで調理するんだ。そして飲料水は蛇口から出る」

「ふうん…」

青年は倉庫を一通り見渡すと、すぐに廊下へと戻った。

「あ、あの…何か質問はないのですか？」

「ミハシ君がそう尋ねると、青年は笑みを浮かべた。」

「後でまとめてするよ。他にも施設は広いんだろ」

「まあな…今度は中央広場に行こう」

中央広場まで歩くと、俺は北側エリアを指した。

「ここが中央広場なんだが、ここから北へ行く機械のある大きな部屋に突き当たる。なんの機械かはわからないが、多分この動力源だろう」

「ふうん…で、南は？」

「南は…廊下に扉がいくつもあるんだが、どれも開かない。そして…」

俺は東側の通路を塞ぐ壁を指した。

「東側は見ての通りすぐに行き止まりだ。この壁の向こうに何かあるのかはわからない。岩盤

があるだけかもしれないし、施設があるかもしれない」

「ふうん…」

青年は俺が指した壁まで歩くと、耳を当てた。

「こりゃ…音が抜けてるな…先生、この先には何かあるよ。多分ね」

あまりにもあつさりと青年がそう告げたので、俺もミハシ君も驚いて壁まで行き、青年がそうしていたように耳を当てた。確かに青年が言う通り、なんとなくだがこの施設全体に鳴っている機械の低い作動音が、壁の向こう側にも感じられた。俺達が必死に神経を集中させている姿を、青年は苦笑いを浮かべて見下ろしていた。おそらくここに至るまで、こんな単純な調査をしていない俺達を見て、おかしくなったのだろう。

「恥ずかしい話だが…ここに来て一週間にもな

るのに、俺達はここのことを殆ど調べていないし、理解もしてないんだ：」

照れながら俺がそう言うと、青年は一呼吸して広場にある端末に視線を向けた。

「あれはパソコンかい？」

「そ、そうです。電源は内蔵式、叩くとスイッチが付きます。放っておくと切れるみたいです。ですけどキーボードは何も印刷されていませんし、起ち上げるとすぐにパスワード画面で、先に進めないのです」

「そつかあ：まあ俺も、パソコンはそんなに詳しくないしなあ：」

そう呟く青年は真つ暗なモニターをつまらなそうに観察していた。するといつの間にか降りてきたまー坊が、青年の背中を軽く叩いた。青年はぎよっとして振り返り、椅子に腰掛けてしまった。

「あ、あんたは！？」

「まー坊だよ」

「まー坊？」

「そうだよ」

ニコニコと微笑むまー坊を観察しつつ、青年はある結論に達したのか俺に視線を向けた。

「そうだ。ボケてるみたいだ。いつからかこの島にいるらしいって：リキが：あの茶髪の男が言ってた」

「ふうん：」

「ねえねえ。君は何になるの？」

まー坊の質問は短かったが、その意味は広く難解であった。まー坊との会話は常に一方通行で長続きしないのだが、この青年は老人の問いに正面から対応した。

「何につて：俺は自分が誰だかもわからないんですよ。それが将来どうなるかって、わかる訳

ないでしょ？」

「まー坊は文鳥になって飛んでいくんだよ」

「は…文鳥にねえ」

まともに対応した自分が馬鹿馬鹿しく思えたのか、青年は鼻で笑い椅子から立ち上がった。

「そりゃあ、鳥になりやここから出られるよな

…先生さ、やつぱ俺達がまずやることって…」

「ああ…助けを求めると、ここから脱出する

…その両方だ」

「そ、それに、この施設がなんなのか調べるのも必要です」

青年は俺とミハシ君の言葉に頷くと、嬉しそうにまー坊を一瞥し、天井を見上げた。

「食料はどれくらい持つんだい？」

「いままでの人数だと、あと三週間ぐらいですけど…」

「俺の分で減る…か…」

「は、はい…」

視線を下ろすと、青年は再びまー坊を見つめた。

「この人の世話は誰がやってるんだ？」

「い、いや…誰もやっていない…」

「さつき三つ部屋があるって言ってたけど、部屋割は？」

「俺とミハシ君で一部屋、あとリキとじいさんが一部屋づつ使ってる」

「じゃあ…俺はまー坊と同室でいいよ。世話しなけりゃいけないしな」

青年の言葉は有り難がったが、なぜ彼がそんなことを言い出すのか、俺には今ひとつピンとこなかった。

「ところで洗濯や食器洗いとかはどうしてるんだ？ みんな勝手に？」

「そ、そうその通りだ…もつとも、食事はレン



「ジ食品だから食器洗いは殆どない」

言いつつ、俺はここに来て一週間で一度も自分の着ている物を洗濯していない事実、気付かずに、軽く驚いてしまった。普通、三日も同じ物を着ていれば垢で気持ちが悪くなるし、第一匂いがきつくなるだろう。しかしこの青年が洗濯の話題を出すまで、そんな事を一度も認識したことがなく、事実袖から匂いを嗅いでみたが異臭は一切しなかった。なにやら不気味で、俺はすっかり無口になってしまった。

「なあミハシ君」

「は、はい？」

青年に視線を向けられたミハシ君は緊張して返事をした。

「悪いんだけど、まー坊の部屋に行って、俺の寝床をちゃんとしておいてくれないかな？

多分ぐっちゃんぐっちゃんだろうし」

「わ、わかりましたあ！」

嬉しそうに返事をする、ミハシ君は廊下へと駆けて行った。青年はその後姿を見届けると、俺に険しい表情を向けた。

「なあ先生…あなたがこのリーダーでいいんだよね」

「ん…うん…そうだなあ…」

リーダーと言っても、まー坊をはじめ、リキやミハシ君がこちらの指揮下に入っているとはとても言い難い現状であるため、俺は口籠もつてしまった。

「大変みたいだね。まあ…正直、この面子じゃ島の調査もままならないんでしょ？」

気を使ってそう言う青年に、俺は思わず頷いてしまった。青年は視線を床に落とすと、パソコンのモニターに手をかけた。

「俺…出来るだけ協力するよ」

「す、すまんな……」

「だって……この状況は異常過ぎるよ……先生だつてそう思つてるみたいだけど、ミハシ君とリキつて野郎は……」

緊張感に欠ける。青年はそう言いたいのだろうが、さすがに言い過ぎと思つたのだから、いれ以上は言わずに苦笑いを浮かべるだけであつた。すると、中央広場に疲れ果てたリキがやつてきた。

「おい……これ返すよ」

リキは青年に携帯電話を手渡し、椅子にどつきりと腰掛けた。青年は冷笑を浮かべ、リキを見下ろした。

「駄目だつたんだろ」

そうつぶやく青年に、リキは視線を合わさずに首を軽く振つた。

「ああ……圏外だ」

「ここは契約範囲外なんだよ。きつと」

「みてえだな……そうだな……」

リキは何か思い当たつたのか、俺と青年に視線を向けた。

「先生、こいつのこと、何て呼ぶのか決まつたんスか？」

「いや……まだだ。そうだな……」

腕を組んで俺が考えていると、青年は目を閉じて何度も頷き、やがて見開いて笑みを浮かべた。

「セイジって呼んでくれ。多分それが俺の名前だ」

「お、お前……名前覚えてんのかよ」

「ああ……考えてみりゃセイジって名前が出てくるんだ……もちろん、友達や兄弟の名前かもしれない……だけどそれしか思いつかないんなら、俺はセイジでいい」

「ふん…」

あまりにセイジの口調に自信があつたためか、リキはつまらなそうに鼻を鳴らし、椅子から立ち上がった。

「新しい面子を記念して宴会でもやりてえ所だが、ここには酒が一滴もねえからな…飯はその倉庫にあるから勝手に食つてくれ」

「ああ…食事のことはさつき先生から聞いた」

「どうやらセイジと名乗る青年は、リキに対して嫌悪感を抱き、それを隠すこともしないらしい。冷淡な彼の言葉を聞きながら、俺はそう結論づけた。」

「部屋はどこを使つんだよ」

「まー坊老人と同室にする。いまミハシ君にベツドメイクを頼んでるところだ」

「ふん…じゃあ俺からひとこと言っておくがな、トイレは綺麗に使えよ。俺は綺麗好きなんだ」

なぜ自分の部屋でもないトイレの使い方まで

リキが気にするのか、俺にはわからなかったが、進んでしまっているセイジや俺達の間関係に自分も参加したかつたのだろう。リキはそう毒づく中央広場を後にし、南エリアへと歩いていった。

「セイジ！ セイジ！」

まだここにいたまー坊がセイジの背中をぴちぴちと叩き、セイジはそれに苦笑いで対応し、最後に鋭い視線を立ち去っていくリキの後姿に向けた。その様子を観察しながら、俺は不安になり天井を見上げた。

この無人島に漂着してから二週間が経過した。五人目の漂着者、セイジが流れていて四日目である。この長髪の青年の登場は、俺達の人間関係に微妙な変化を生じさせていた。

まず、翌日からミハシ君がパスワードの解析と狼煙の番に復帰してくれた。そしてその翌日にはリキも狼煙番を再開した。尤も、両者の仕事再開には大きな気持ちの隔たりがあり、前者は積極的であつたが、後者は嫌々といった様子であつた。無論、この二人にそれを命じたのはセイジであり、彼はまー坊の世話をよくやっていて、二人で散歩をする光景をこれまで何度も目にした。

狼煙番が軽減された俺は時間にゆとりも出来たため、今日は朝から東の岬を調べていた。やはりこちら側だけは、南北と西とは違い、地下

施設へ通じる扉が見当たらない。もつとも、他の三つも最初は岩盤でカモフラージュしてあつたため、ここに入り口がないとは断定できなかった。

「何をしてるんだ？」

背後から声をかけてきたのはセイジであつた。「この岬にも地下への入り口があるんじゃないかと思つてね」

「そうか：ここは東側か：そうだな、あるかもしれないね」

そう呟くと、セイジは膝を折り、拳で岩盤を軽く叩いた。

「痛え：ただの地面だなあ：扉なんて：」

「他の三つの扉は岩盤でカモフラージュされていたんだ。だからここにも可能性がないとは言いきれない」

俺の説明に納得したのか、セイジは立ち上が

ると辺りを見渡した。

「なあ先生：先生はこの島、どう推理してる？」

「そうだなあ：見当もつかないな：まあそういうときは消去法が一番なんだが：」

セイジは俺の提案に興味を示したのか、笑みを浮かべて両手の指を組んだ。

「自衛隊の基地：ならなんで誰もいないんだ：政府の施設。それも事情があつて放棄してる。」

言いながらも、俺はどう考えても結論が出ないことを確信し始めていた。そう、いくらこの島を理解しようにも、あるのは四つの岬とジャングルと地下施設だけである。その地下施設も動力源と端末とレンジ食品以外は寝泊りできる部屋があるだけで、ここには目的や具体的な意味につながるヒントは皆無であつた。

こうなると東側にあるであろうエリアと、閉

ざされた南側エリアの部屋に何があるか次第である。しかし俺にはどうせそれらの先にも殺風景な風景が広がるばかりで、やはり発見はないのだろうと勝手に思い込みはじめていた。それがここ最近、忙しさを理由に島の調査を怠っている理由だつたのだろう。

そんな結論に達した俺は、やる気を引つ張り出して、顔を何度か叩いた。掌にチクチクとした髭の感触が伝わる。

「なんか俺：すっかり疲れてたみたいだけど：そうだな：やはり東エリアへの侵入を本気でやらなくつちや駄目だな」

「ふうん：」

セイジは指を組んだまま、嬉しそうに俺を見つめていた。彼の登場によって、一番変化があつたとすれば、自分自身の心境という奴なのだろう。彼との会話は俺を知的に刺激し、それが

行動力となりつつあるのは明白であった。

「セイジ…君が来てくれて助かるよ」

「はは…ありがたいね、そう言ってもらえると…だけどき、ほんとにここは…なんなんだろうね」

「ああ…なんていうか…現実感がまるでないんだよな。そう…もしこれが夢ならひどく納得もいくんだが、それも違う。だけど…な…」

「夢か…ふうん…面白いね。自分が人の夢の登場人物って想像…気味が悪いけど、面白いね」

「だとすりゃ、これはリキかまー坊のどちらかの夢なんだろうな。あの二人の記憶が一番古いはずだしな」

「リキの夢はごめんだなあ…」

「まー坊のものな」

言った後、俺達は互いに苦笑いを向けた。するとジャングルからミハシ君とまー坊がやって

きた。

「二人とも…何をしているのですか？」

「入り口の調査だよ。それよりも…ミハシ君は？」

俺の問いに、ミハシ君は後ろを振り返った。

「狼煙番をしてたらまー坊さんと会って…で…ちよつと僕もジャングルを調べてみようと思つて…で…話し声が聞こえたので」

「そうか…それで、ジャングルで発見はあったのかい？」

セイジがそう尋ねると、ミハシ君は嬉しそうな表情を浮かべた。どうやら彼は、セイジに好意を抱いているらしい。

「パワードの手がかりを探してみただけですけど、なーんにも。ただ草と木が生えてるだけで。足がすっかり痛くなっちゃって」

頭を掻きながら、満面の笑みを浮かべたミハ

シ君は自分の両足を指した。出会って以来彼は靴を履いていない。靴下はすっかり真っ黒になつていて、所々破れていた。

「前から思つてただけど、なんで靴をはかないんだ？」

セイジは不思議そうにミハシ君の両足を観察しながら、そう呟いた。

「さあ…気が付いたら先生とボートに乗つて、そのときから靴吐いてないんですよね僕」

「へえ…じゃあきつと、ミハシ君は船の船室にいたんだな。先生も同じ船に乗つて、それが事故かなんかでやばくなって、二人でボートで脱出した…とか」

突飛な想像ではあつたが、俺は妙に納得してしまい、ミハシ君もそうであつた。

「それなら靴がないのもわかりますね。セイジさんは頭がいいなあ…」

「パソコンは苦手だけだな」

セイジとミハシ君は、先ほど俺とセイジがそうであつたように互いに笑い始め、それを眺めているまー坊もつられて笑つていた。いい光景である。何やら仲間という感じである。俺は充実感を得、ある行動を思いつき、それを実行に移した。

「せ、先生…」

その場で何度もジャンプする俺に、ミハシ君は驚きつつ声をかけた。セイジは首を傾げ、まー坊は視線を上下させている。

「南の入り口を発見したきつかけもこれだったんだ。扉がずれてな」

ジャンプをしながら俺がそう言っていると、セイジが俺の側までやってきて、一緒にジャンプを始めた。

「二人がかりの方が効果もでかいっしょ！ し

かし結構な運動になるなあ」

ジャンプにはやがてまー坊も参加した。いくらその場で跳躍しても、南側のときのように岩盤がすれることはなかったが、三人で共同して行う作業は心地がよかった。もともと、まー坊に作業の目的は理解できていないだろうが。そんな俺達を、素足に近いため参加できないミハシ君が羨ましそうに見つめていた。

睡眠の最中、脳は記憶を整理するための活動を始める。起きている際に経験した事柄や、知った事実を大切なものとそうでないものに仕分けし、系統立てて並び替える。そんなことを俺は知識として知っていた。そう、寝ている間、俺の頭も思い出を整理しているはずだろう。しかしここ二週間以前の記憶がないということは、蓄積されている情報もわずかで、いわば赤ん坊

程度の分量しか記憶容量を使っていないということである。

睡眠はひたすらに肉体を休息させる行為であり、ここに来てからずっと、毎晩の眠りは途方もなく深く、目覚めるのには毎朝苦勞していた。東の岬で飛び跳ねた翌日、身体を左右に揺さぶられる振動で俺は眠りから現実世界へと目を覚まされた。

「先生！ 先生！ 先生！」

目を開けると、ヒビの入った眼鏡をかけたミハシ君の必死な形相が視界に飛び込んできた。そうか：この眼鏡のヒビは、確かポートの件でリキにボコられて出来たものだったけ……

「ミハシ君……ど、どうしたんだ……」

「リキさんが！ まー坊さんを！ ひどいのです！ 危ないのです！」

ミハシ君は慌てているのか、俺の両肩を強く



握ったまま、支離滅裂な言葉をこちらに叫びつづけていた。ようやく意識がはっきりしてきた俺は、ミハシ君の様子からただならぬ事態が発生していると思うと、彼を押しどけて二段ベッドの梯子を降りた。

「ミハシ君、何があつたんだ？」

「と、とにかく来てください！ 死んじやいます！！」

『死』という言葉と、『リキがまー坊さんを』この言葉の組み合わせは不愉快な想像を喚起させた。

壁にかけてあつたジャケットを羽織ると、俺はミハシ君に手を引かれ、隣の部屋に連れて行かれた。

俺とミハシ君の使っている部屋の隣は、やはり二段ベッドのある寝室で、セイジとまー坊が

寝泊りしている部屋であつた。

「てめえ！！ いいかげんにしやがれ！」

ひどく威圧する、ひどく汚い言葉の主は茶髪のリキであつた。彼はいつかミハシ君にそうしたように、倒れているまー坊に馬乗りになつて拳を振り上げていた。よく見ると、まー坊はずでに殴られたのか、口から大量の血を流していた。部屋には汚物の異臭が充満していて、俺は思わず手で口と鼻を塞いだ。

「リキ！ お前何してるんだ！！」

リキの背中へ俺は叫んだが、まるで聞こえていないのか、この若者は老人へ拳を振り下ろそうとしていた。

「やめろ！」

叫ぶのと同時に、俺の背中がドスンと突き飛ばされた。次の瞬間、リキは長髪の青年に羽交い締めになれ、まー坊から引き離された。どう

やらセイジが飛び込んできたらしい。

「なんなんだよ、お前は！」

セイジは長髪を振り乱しながら、リキを恫喝した。

「ぐああああ！！！」

リキの叫びは獣のようで、目は見開かれ、眉間には皺が寄っていた。背後にいたミハシ君は恐ろしさのためかたじろぎ、俺もそうしなかった。だが息を呑むと、自分の役目を果たすことにした。

「リキ！ 何があつたんだ！ お前、まー坊を殺す気か！」

「はあはあはあはあ……」

ようやく落ち着き、現在の状況を把握したのか、リキの表情からはわずかつつだが殺気が消え始めていた。セイジはリキを離すと、倒れているまー坊に駆け寄った。

自由になった、眼前に立つ茶髪の青年が発する怒気に、俺は気圧されそうになった。

「こ、このジジイ、トイレを汚しやがって……」

リキはそう言い捨てると、セイジに介抱されているまー坊を睨み付けた。まー坊は顎を上げ咳き込み、視線は天井へ向けられていた。

「ト、トイレって……リキ……お前、そんなことで……」

「通りかかったら臭かつたんだよ！ で、入るとこのジジイがケラケラ笑つていやがって！ ざけんじゃねえっつーんだよ！！！」

「まー坊は病気なんだ、お前もそれはわかってるだろ！ 何考えてるんだ！」

「じゃーてめえは何考えてんだよ！」

顎を突き出し突つかかってくるリキの思惑が、俺にはまるで理解できなかった。

「な、なんなんだよ……リキ……」

「なんだよてめえ！ 俺がしらねうちにいる  
いる決めやがってよ！ 俺をなんだと思ってる  
だよ！」

リキはそう叫ぶと俺を突き飛ばし、そのまま  
廊下へと駆け出していった。床に尻餅をついて  
しまった俺は、訳もわからずその後姿を凝視し  
ていた。すると、ミハシ君がこちらの側までや  
ってきた。

「僕が：僕が悪いのです！」

「ど、どういことだ！」

ミハシ君は苦々しい表情で、俺の背後で介抱  
されているまー坊に視線を向けていた。

「今朝：朝食を食べている時：リキさんと一緒  
だったのです。僕：みんなで東の岬で飛び跳ね  
たって言って：そうしたらリキさんがいろいろ  
聞いてきたので、東側の探索を本格的にやるみ  
たいだって話したら、リキさん急に不機嫌にな

って……」

これまで、俺とリキのコミュニケーションは  
円滑であるとは言い難かった。あの茶髪の青年  
は、常に何を考えているかわかりやすく、思考  
は単純であったが、そのの変化が激しく、どん  
なきっかけで気持ちが変わるのかを、俺はまっ  
たく理解していなかった。

セイジが漂着して以来は、特にリキとの接触  
は減り、雑事なども頼むことはなく、ここ数日  
彼と言葉を交わすこともなかった。もちろん、  
そうなった原因はリキの協調性のなさにあった  
のだが、そんなこのごろをリキ自身、不安に思  
い始めていたのだろう。そして矢先に飛び込ん  
できた、東側エリアへの本格的探索という情報  
である。俺は自分の至らなさを実感した。

「俺が：リキにもきちんと話してりゃ、よかつ  
たんだよな……あいつ、積極的じゃないくせに、

仲間外れは嫌がるからな……」

この反省には、他人からのフォローへの期待が込められていた。その対象はセイジであるのだが、彼はまー坊の出血を拭きながら、時折首をかしげて、つまりは俺の言葉などまるで聞いていない様子であった。

「セイジ……どうしたんだ……」

「い、いや……変だよ……やっぱりこりゃ……変だ……」

「どうしたんだ……」

「う、うん……俺……まー坊ともう何日も同じ部屋で寝泊りしてて、このジイさんがトイレを汚すなんてなかったから……」

確かに、この二週間でここからリキの言うような異臭を感じたことはない。セイジの疑問もわからなくはなかったが、俺の言葉を無視してまで考えるほどのことではないと思えた。

「たまたまだる……だって、まー坊は俺達と違う

んだぜ」

「ち、違うんだ……それで俺、いろいろ思い出してみたんだけど……そもそもまー坊がトイレに行ってるのって……見たことないなって……」

そう言いながら、セイジは立ち上がってトイレの扉を開けた。異物の異臭はよりきつくなり、まー坊を除く俺達は一様に顔をしかめた。

「確かに……これはひどいですね」

セイジの後ろからトイレを覗き込んだミハシ君はそう呟いたが、俺は同様の行動をする気にはなれなかった。すると倒れていたまー坊が立ち上がり、よろよると部屋の外へと出て行った。

廊下にはまだリキがいるかもしれない。まだ状況は危険である。しかし俺はすっかり疲れ果て、まー坊を止める気になれなかった。多分セイジ達もそうだろうと思えば視線を向けると、彼とミハシ君は揃って首を傾げていた。

「なんだよミハシ君まで…どうしたんだよ」

「あ…はい…その…思い出したことがあって…今朝、朝食の前に食料の残りを調べてみたのです…セイジさんの分も計算し直そう思つて。ところが…食料が予想より、ずっと多く残つていたので」

「俺も時々昼飯を抜いてたし…ミハシ君も食べない時期があつただろ」

正直、ここ最近はカレーとタラコスパのローションに俺も飽き飽きで、時折食事を抜いたことがあつた。ミハシ君がそんなことを計算に加味していないとは思いたくなかつたが、彼もまだ少年である。判断間違ひもあるだろうと俺は思つた。

「は、はい…ですけど多すぎなのです…それで…セイジさんの言葉で思い出してみたのですが…先生は、まー坊さんが食事をしているのを見

たことありましたか？」

そう尋ねられ、俺は記憶を辿つてみたが、まー坊が飯を食べている姿を見たことはなかつた。しかしそもそも俺はまー坊に対しては、その存在を無視し続けていた部分もあり、わずかな情報からミハシ君の突拍子も無い予測に賛同する気にはなれず、あの老人と一番長く接しているはずである長髪の青年に視線を向けた。

「昨日の晩…俺はまー坊と一緒にカレー食つたんだよ。たまには一緒に食おうつて誘つたんだけど…まー坊、容器のビニールを中々開けられないわ、やたらとこぼすはで…」

セイジはそう言いながらトイレの扉を閉じ、腕を組んで壁に寄りかかつた。

「だけど…それ以前は俺もまー坊が何かを食べてるのつて…見たことがないし…」

言いつつ、セイジの表情は次第に曇つていき、

ミハシ君も怯えたように彼の長身を見上げていた。まー坊はそもそも食事の摂取もしなければ、排泄もしない。今朝の事件は昨晚食事をした結果である。二人の達した結論は多分そうなのだろう。しかしその考えはあまりにも馬鹿馬鹿しく、許容できるものではない。

二週間飲まず食わずに過ごせる人間がそうそういるものではない。ましてや相手はボケている老人である。食欲は旺盛であるはずだし、拒食症であればもつと弱っていて、岬で飛び跳ねることなどできるわけがない。

「考えてもしょうがないぞ。そんなことは…全部予測の範疇だし、そもそも有りえるわけがない」

そう言いきる俺に、セイジもミハシ君も頼りなく頷き、再び異臭のするこの部屋で考え事を始めてしまった。俺は二人の説得を諦め、手で

口を鼻を塞ぎつつ、廊下へと出た。

この状況は異常である。不自然な施設に皆が記憶がないという偶然。だが記憶がないからこそ、そもそも今が異常であるとも言いきれないのも確かであった。セイジにはこの前、誰かが見ている夢などという冗談も言ってみたが、寝て起きて、飯を食ってトイレで出す。そんな自分にまつわる生理的欲求が当たり前のように訪れる事実のおかげで、これが現実の世界での出来事であると認識していたし、それはセイジとミハシ君、そしてリキにしても同様の認識だろう。だがセイジとミハシ君のそれは、今回の一件でぐらつくかもしれない。そんなことを考えながら廊下を歩く俺は、ふとある部屋の前で立ち止まった。

ここは倉庫と寝室の間にある部屋で、常に扉が開かれている、カプセルが置いてある部屋で

あつた。未だにこのカプセルの意味はわからず、最初の数日はここを通る度にそのことを考えていたのだが、ここしばらくは存在すら忘れていた。しかし今は違う。

「カプセルの中には、こげ茶色のビール瓶が置かれていた。

今まで、このカプセルの中は空っぽで、こんな瓶は置かれていなかった。たとえ誰かが置いたにしても、そもそもビール瓶などこの施設では見つからないはずであつた。よく見ると、瓶の中には液体が入っていて、わずかではあるが小さな泡を生じさせていた。多分、これは瓶の外見通りの液体なのだろう。俺は恐る恐るカプセルから瓶を取り出した。

ラベルには見覚えがある。おそらく俺も飲んだことのある有名メーカーのビールだ。しかし奇妙なことに、前面のラベルしか印刷されてお

らず、後ろ側のラベルには「飲酒は20歳以上からです」という小さな文字以外は空白であつた。

瓶を振ってみると、中の液体から大量の泡が生じ、中身への疑問は確信へと変化した。

これはビールだ。酒である。酒と言えば、リキが事ある度に飲みたがつていたが、まさか彼が隠し持っていたり、発見した物ではないだろう。そうだとすれば、こんな目立つ場所に置いておくはずがない。セイジ達が発見したのだろうか。それは後で尋ねればよいと判断し、俺は取り敢えずジャケットで瓶をくるみ、それを海に捨てることにした。この状況下で酒はよくない。特にリキがこの事実を知れば、穩便に事が済むとは思えなかつた。最初は飲酒で彼の機嫌もよくなるだろうが、一度酒の味を思い出せば、その後彼がそれに拘り、脱出への行動の妨げに

なるのは明白である。

誰にも見つからず地上へと上がった俺は、岬でビール瓶を地面に叩きつけながら、足で破片を海面へと払った。地面へ僅かにビールがこぼれ、アルコールの匂いが鼻をついたが、強い日差しと潮風がそれを消すのに時間はかからないだろう。滅多に地上に出ることがないリキがこの事実気付くはずはない。

「ずっと…晴れだよな…」

誰もいないため、言葉にして俺はそう呟いた。ここに漂着してからずっと、天気は常に晴れで、夜になると満天の星空が広がる。俺達の中に星座の知識がある者が皆無のため、それから現在位置を割り出すことはできなかったが、初めてその星空を見た晩は、ミハシ君ともども感嘆のうめきを洩らしてしまったものだ。もっとも、今ではすっかり見飽きてしまったが。

ついでに狼煙の火を見ておこうと狼煙場へと向った俺は、枝と葉を投げ入れ、炎と煙の勢いを増させた。

この煙を見つけてくれる者はいるのだろうか。こうしたサバイバルには根気が付き物なのだろうが、見渡してもただ海が広がるだけの光景に、俺は絶望を感じ始めていた。

「火…火い…」

背後からの呟きに俺は振り返った。声の主はまー坊である。目に青い痣をつけた老人は、狼煙を囲む石に近づき、燃え盛る炎を恐怖いっばいの表情で凝視していた。

「まー坊は…火が怖いのか？」

「ああ…」

その返事があまりにも低い声で、これまでにない理性を感じさせる種類であったため、俺は驚いてまー坊の表情を覗き込んだ。皺だらけの



顔には恐怖はなく、目は冷たく鋭かった。ここ

答が戻ってきそうであり、ただ怖かった。

にいるまー坊はいつものボケ老人とは違う。その勝手に判断した俺は、先ほどセイジ達が抱いた疑念をぶつけてみた。

「まー坊は：飯とかトイレとか：いつ食ったりやったりしてるんだ？」

俺がそう尋ねると、まー坊は炎から視線を移さぬまま、やはり低い声で返事をした。

「まだわからんのか。トイレなぞ、行きたい気持ちになれば行けばいい。食わんでもどうとい

うことはない。それがこの人間島にんげんじまの法則だ」

はつきりとした口調で、澁みなくまー坊はそう呟いた。言葉の意味がよく理解できない俺は、もう一度問い直そうとしたのだが、炎を見つめるまー坊はどこか不気味で、欲しくない類の回

破裂したような音が俺の鼓膜を振動させた。

しかし相変わらず眠りは深く、それが起床の原因にはならなかった。すると今度は、低く落ち着いて違和感に満ちた、そんな音が聞こえてきた。ベッドの中で聞こえるそれにはメロディがあり、やがてはつきりとしてくる意識の中で、音の正体が管楽器によるものであることに気付いた。

朝っぱらから何だ…どうしてラツパの音がするんだ？ 誰がやってるんだ…意識を現実に引き戻しつつ、俺はベッドから上体を起こし、傍らに置いてあったズボンを穿いた。

「せ、先生…何の音でしょう…」

二段ベッドの上から、ミハシ君が眠そうな顔をひょっこりと出した。

「ラツパの音だな…何の曲だ…？」

「なにか：朝って感じですね」

ミハシ君の言う通り、廊下から聞こえてくるラツパの音楽は、目覚めの朝に似合った、静かで落ち着いたメロディだったが、しばらくするとその音色は止み、辺りから聞こえてくる音は、いつもの機械の作動音だけとなった。俺はYシャツを着てベッドから出ると、ミハシ君と一緒に廊下に出た。

「先生…」

廊下に出ると、隣の部屋からセイジが出てきた。彼もまだ眠そうであり、目は若干だがとろんとしていた。俺が首をかしげて「さあ？」と呟くと、セイジは頭を掻いてあくびを一つした。

音が聞こえてきた方角は定かではないが、この西エリアの廊下から行く先は、ひとまず中央広場である。誰が言い出したわけでもなく、共通した判断で俺達は広場へと向かった。

広場には、見たことがない人物の後姿があった。緑色の上下、足には茶色のブーツ、頭には縁の固そうで大きな帽子を被っていて、背は低く、ひどく痩せこけた印象を俺は受けた。

「だ…誰だ…」

俺の呟きに、後姿は頭だけ少し振り向いた。薄い眉毛に低い鼻、小さく鋭い目付きに皺だらけの顔面。それは昨日狼煙場で見ただけの、不気味で怖いまー坊であった。気付くと、まー坊は左手に小さなラツパ持ち、これで先ほどまでの疑問は解消したが、右手には拳銃を握り締め、銃口は前方に向けられ、その先には顔面を真っ青にして怯えるリキの姿があった。

「ま、まー坊…そ、その格好は…」

恐る恐る俺は尋ねてみたが、まー坊は再び正面で怯え続けるリキに顔を向けた。

「これより！ 敵国のスパイを射殺するっ！」

大声でまー坊はそう叫んだ。言葉ははっきりとしているが、意味はまるで理解できず、つまりまー坊は昨日岬で会ったときと同じ状態のように見えた。

「せ、せ、先生…！」

銃口を向けられ、壁を背にしたリキが情けない声を上げた。その声色からこちらに助けを求めているのは明白だが、この突飛な状況に俺自身戸惑っていて、どうすることもできずにいた。俺と彼の間には拳銃という圧倒的な凶器を手にした老人がいる。そして、老人に殺意があることは明白であった。

「リキ…説明してくれ…どうということなんだ」

「お、俺が知るかよ！ このじ、じいさん、こんな格好で出てきて、いきなりよ！」

リキの言葉は不明瞭であったが、その意味はまー坊のそれより理解しやすかった。つまり、

彼も現在発生している事態をまるで把握できていないということだ。

「ま、まー坊：」

「小官はまー坊ではない！ 広沢昌昭中尉である！」

俺はまー坊の背後から近づいて、取り敢えずコミユニケーションを取ろうとしたが、後ろを向いたまま発せられた彼の怒声に驚き、思わず身体を引いてしまった。

「せ、先生：まー：広沢中尉の格好：昔の軍隊の制服です…」

ミハシ君にそう言われてよく見てみると、確かにまー坊の服装は軍服のように見える。だとすれば、この老人、ついにボケきって記憶が退行でもし始めたのか。いや、まー坊のこれまでは子供のようであったから、むしろ記憶は進んだのだろうか。

「ひ、広沢中尉どの：なぜこの男がスパイなのですか：？」

拳銃を持った者を刺激しなくなかったため、俺はまー坊の自意識に合わせることにした。すると案の定、広沢中尉ことまー坊老人は、実に明確な回答を俺達に与えてくれた。

「この髪を見る！ これが日本人の髪かあ！」

言われたリキは、思わず自分の茶髪頭を抱え、その場にしゃがみこんでしまった。ガタガタと震える姿は恐怖に怯える子供のようであり、彼が張り付いていた壁には黒い煤のようなものが附着し、その個所には亀裂が生じていた。あれは、おそらく弾痕だろう。朝の破裂音の正体と、リキがなぜここまで怯えているのか、その二つが俺にはようやく理解できた。この銃は本物で、弾丸が込められている。もつとも、リキの怯えは少々度が過ぎているようにも見えたが、今は

そんなことを気にしている場合ではなかった。

「鬼畜米英めがあ！」

引き金を引こうとまー坊が叫んだその瞬間、俺は無意識のうちに彼の背後から体当たりをした。

銃声と同時に、いつのまにかまー坊とリキの間に割って入ったセイジが拳銃を長い足で蹴り上げ、ミハシ君がとっさにそれを拾い上げた。毎度の事ながらこの青年は実にいいタイミングでトラブルの解決を強行する。しかし結果として引き金を引くのを防ぐことはできなかった。

まー坊の背中に覆い被さっていた俺は、恐る恐る顔を上げた。

「う、ううう……」

眼前には茶髪を抱えたまま震えるリキの姿があった。どうやら弾は反れたようである。

ほっとした俺は、両手でまー坊を取り押さえ

たまま、自分の身体を起こした。掌を通してまー坊の激しい動悸が伝わってくる。倒された際、どうやらこの老人は気を失ったようであり、抵抗してくる気配はなかった。その様子に気付いたのか、一命をとりとめたリキが、恐ろしい形相を倒れている軍服姿のまー坊に向けた。だがそれと同時にセイジがリキの両肩を押し、壁に押さえつけた。先ほどの素早い行動といい、セイジのこうした機転と身体の機敏さには驚かされる。

「ぶつ殺してやるクソジジイ！俺にピストル向けやがって！」

吠え散らし暴れだしそうなりキの身体を、セイジは両手で実にうまくコントロールしていた。「ミハシ君、手伝ってくれ、まー坊を寝室に戻す」

「は、はい」

俺とミハシ君は一緒にまー坊の肩を抱いて寝室まで連れて行き、彼をベッドに寝かせて扉を閉じた。

「この扉…鍵がないのですね…」

「ああ…だけど拳銃は奪ったんだ…外で見張っておけば大丈夫だろう…」

その言葉に応じ、ミハシ君が先ほど拾い上げた拳銃を俺に手渡した。黒光りするそれはまさしくピストルであったが、そもそも知識の浅い俺にはどんな代物なのかは理解できず、取り敢えず上着の内ポケットにしまい込むことにした。中央広場に戻ると、自由になっていたリキがこちらに怒気を向けた。

「おい！ ピストルはどこした！」

「俺が預かった」

「あのジジイはどこすんだ！」

「多分…ボケてイッチまっただら…落ち着い

て前みたいに戻るまで、交代で見張るしかないな」

リキの言葉遣いに合わせてみたが、どうにも俺には似合わないようである。しかし彼の怒気は納まることはなかった。

「俺を撃とうとしたんだぜ！ それでいいのかわよ！」

「もともと！」

たまらず大声を張り上げたのはセイジであった。

「もともと…お前がまー坊をぶん殴ったりしたからこうなったんだろ…いい加減にしろよな」

セイジの言葉は正論とはいいい難かったが、死の恐怖を導き出した原因が自分にもあると気付いたのか、リキの怒気は少しずつ収まり、悪態をつくレベルまで沈静化していた。

「とにかく、俺は見張りなんてしねえからな！」

そう言い捨て、リキは南側エリアへと歩き、通路の行き止まりで梯子を上り始めた。

問題の主がそろって広場から退場したため、俺達三人はほとんど同時にため息をつき、壁に寄りかかった。

「セイジ：拳銃とか軍服とか：心当たりはあるか？」

俺の問いに、セイジは疲れきった表情で首を横に振った。尋ねる相手を変えてみようとしたが、当のミハシ君は広場から西側エリアへの通路に視線を向け、寢室の扉を注意し続けていたため、仕方なく質問を諦めた。多分、あの軍服と拳銃は、例のカプセルに入っていたのだろう。なんの根拠もないが、その思いは俺をひどく納得させていた。

俺達は一様に黙り込み、この朝に発生した事件に表情を曇らせていた。

まー坊を閉じ込めた寢室は、リキを除いた三人で見張ることになった。寢室の前の廊下に椅子を置き、ただ座っているだけの作業は単調かつ退屈であったが、そもそもこの島と施設は娯楽の類が一切なく、こんな仕事が増えても苦痛は少なかった。ただ、東エリアへの本格的探索という、先日挙げた目的は棚上げになっていて、その再開が俺にとって最も重要な懸案事項であった。

寢室に閉じ込められたまー坊は、特に逃げ出そうとする気配もなかったが、時折扉の向こう側からはぶつぶつと独り言が聞こえてきた。それは低くうなるような呟きであり、聞きよによつては恨み言にも聞こえた。セイジが一度、扉を開けて接触を試みたそうだが、老人はただベッドに膝を抱えて座ったまま独り言を呟くだ

けで、まるでこちらの存在を無視していたらしい。食事は暖めたレンジ食品を朝夜二回差し入れていたが、どうやら食べている様子もなく、容器はそのままだったため、食料事情も考え、監禁二日目からは一日一回だけの差し入れにした。もちろん、それでもまー坊は食べず、トイレに行く物音すらない。

この監視という仕事をもっとも効率的にこなしているのはミハシ君であった。彼は中央広場に置いてあるパソコンの電源が内臓式である点に着目し、それをまー坊の寝室前までモニターごと移動し、椅子に座って監視している最中も、ずっとパスワードの解析作業を続けていた。

監視の仕事がない時間は、できるだけ東エリアの探索を試みようとして、俺は岬や中央広場から東エリアを塞ぐ壁を調べてみた。しかし東の岬には他三方のような地下への入り口は見つか

らず、壁はいくら叩いてもびくともしなかった。別の入り口を見つけるために地上のジャンクルも改めて調査してみたが、静寂の密林はどこまでも不気味で、長く滞在すると俺の気持ちはどんどん現実感を失い、つまりは滅入ってしまった結果だけが残った。

リキとは食事の際や、廊下で時々姿を見かけたが、互いに言葉を交わすこともなく、それはミハシ君にしても同様であると彼は口にした。セイジを含めた俺達三人は一応の連帯関係にあったが、リキだけは異なり、彼はたまたま同じ場所で生活しているだけの存在であった。もっとも、まー坊の監禁により寝室が一つ減ったため、現在はセイジとリキが同じ部屋で寝泊りしている。セイジはリキと多少の日常会話があり、ある日、彼はこんなことを俺に告げた。

「リキは…先生に不信感を持つてみたいだ



ね」

「だろうね。俺も奴とは馬が合わない。ついついあいつを蔑ろにしてしまっているのは事実だ」

「あいつ、ナイフを持つてるそうだね」

「そうだ。あいつがこの島に持ってきた、唯一の所持品らしい」

「危険だな……」

セイジの言わんとすることは、俺にもよく理解できた。しかしその種の想像は始めてしまうと際限がなく、疑念で疲労してしまうだけだったので、俺はできるだけしないように努めた。

「こつちには拳銃があるんだ」

「そ、そうだね」

会話を切り上げたいがために言ってしまった言葉であるが、よく考えてみると、とんでもな

い決意表明であつた。これではまるで、リキと俺達が敵対関係であることを既定してしまっているみたいじゃないか。

「使わないよ。こんな物は使わない。リキにもナイフは使わせない。俺達はまともな日本人なんだ」

狼煙の番のため、地上に上がったある晩のことである。俺は岬から海を泳ぐ人影を見つけた。月明かりでぼんやりと見えるその姿はリキであつた。彼のクロールは早く、力強く、そしてどこか寂しげでもあつた。

この島に漂着してからというもの、皆をまとめてきたのは俺であり、号令をかけて中央広場に集めるのも常に率先して行つてきた。しかしその朝、俺達を中央広場に召集したのはミハシ君であつた。

どうやって交渉したのだろうか、広場にはリキの姿もあつた。

「おはようございます。皆さん」

ミハシ君の口調はいつになくはきつりとしていて、その表情は明るく自信に溢れていた。

「なんだよ坊主……」

壁に寄りかかつて腕を組むリキがミハシ君を睨み付けたが、それに動じることなく少年は俺達を手招きした。

「ついに、ついにです。パスワードの解析に成功したのです」

そう言つて、ミハシ君は机に置かれたパソコンを指した。俺達は一斉に注目し、じわじわと興奮していた。

「つてことはよ。動かせるんだな！」

「はいリキさん。まだわからない点も多々ありますが、今後は解析作業が中心となります」

そう言いながら、ミハシ君は椅子に座り、手馴れた挙動で端末を軽く叩いて電源をつけた。

「パスワードは何だったんだ？」

俺の問いに、ミハシ君はキーボードをゆっくりに叩きながら答えた。

「ニンゲンジマです」

ミハシ君の回答に、セイジとリキは眉をひそめ復唱した。『ニンゲンジマ』その言葉はどこかいびつな響きがあり、禍々しい感情を俺に抱かせていた。リキに殴られた後、まー坊が呟いた言葉にあつた単語だっただろうか。その言葉に聞き覚えのある俺は、「パスワードOK」とディスプレイに表示される文字を見ながらも、どこか不安であつた。

「苦労したのです。この言葉は見張りの最中、まー坊さんがぶつぶつ言つた単語だったので、それをいくら入力しても、やはりパスワ

ードは正しくないと表示されたのです」

「何でまー坊がこのパスワードを知ってたんだ  
…」

セイジの疑問は当然であり、リキも頷いた。

しかしミハシ君は自分の苦勞話から話題が反れるのが不満だったのか、口を尖らせて言葉を続けた。

「知りませんよそんなことは。多分言葉からすると、この島の名前なのでしょう。とにかく、最初、『ニンゲンジマ』：『ningenjima』と打つても、パスワードは認証されなかったのです」

「じゃ、じゃあどうしたんだよ」

リキにとって、ミハシ君の苦勞談はどうでもよいことなのだろう、彼は結論を急ぎ、モニタ―を食い入るように見入っていた。

「カナ入力だったのです。つまりは『ニンゲン

ジマ』アルファベットのキーだと『i y : @ y d @ j』と入力したら、認証されたのです。これはちょっと珍しいことです」

何も印刷されていない、真っ白なキーボードを見ながらミハシ君は首を何度も傾げていたが、セイジとリキは無反応で、つまりはミハシ君の疑問そのものが今一つ理解できないのだろう。俺にしてもそうであった。

「まー坊はこの島にもともいたのかなあ…つまり：施設の関係者だったとか」

セイジの疑問点はミハシ君と交わることがなく、その一点に絞られていた。

「おいおい、それじゃ俺、まずいんじゃないのか？」

リキは苦笑いでそう呟いたが、誰も返事をする者はいなかった。それぞれの気持ちはバラバラのまま、画面は進み、「S904 H 全景」

と書かれた文字の下に、この島の全景図が表示された。それは多分CGで描かれているのだろう。妙に綺麗で光沢があり、形こそ上手に再現されていたが、質感にリアリティが欠けていた。

「これは方向キーでぐりぐり動かせます」

言いながら、ミハシ君はキー操作で全景図を縦横手前奥と自在に回転させた。俺達は一応に感嘆のため息を洩らしたが、だからどうしたという気持ちにもなりつつあった。

「で…今はここまでなんです」

ミハシ君の操作で画面は進み、そこには、

「S904 H地下施設エリア表示

1. エリア全体 2. エリア北 3. エリア南  
4. エリア西 5. エリア東」という文字が表示された。

「エリア…東か…」

俺の呟きにセイジとリキは息を呑んだ。東工

リアはやはり実在する。その事実は今証明され、そこに何かあるのかも判明しつつあった。しかし、画面はそこから先に進むことがなく、ミハシ君はキーから手を離してしまった。

「ど、どうしたんだよ坊主、どうして止めるんだよ」

「まだここから先へは進めないのです。なにかインターフェースが劣悪なのか、ここまで進むのもやっとだったのです。時間を下さい」

「お、おう頼むぜ、頑張れよ」

調子がいいものだ。リキはミハシ君の肩を揉みながらすっかり興奮していた。俺がそんな茶髪にうんざりしていると、ミハシ君は再びキー操作を始め、画面は次々と変化した。

「それで…先生に許可が欲しいのです」

「何の…許可だい？」

「これです」

「ミハシ君が指した画面には「ドアロック全面解除 Yes No」と表示されていた。

「おそらく鍵の解除プログラムでしょう。この施設で現在鍵がかかっている部屋と言えば南工リアの数室です。これでYesを選択すれば、鍵が開かれると思うのですが」

「と、とっとと開けちまえよ。なあ先生」

「いいのですか：先生？」

「ミハシ君の懸念は俺にもよく理解できたが、状況の進展が優先だろう。そう判断した俺はミハシ君に鍵の解除を頼んだ。

カチリという音が南側への廊下から響いた。

これは確かに鍵が開いた音である。

「い、行こうぜ」

リキが率先して廊下へと歩き出した。俺達もそれに続いたが、セイジは興奮もすっかり冷めているのか、何やら神妙な面持ちであった。

「リキが興奮しているのが不満なのか？」

「いや：あいつはあだから今更どうでも：それよりも、まー坊のことが気になってさ」

「逃げ出したりは：多分しないだろ：それとも見張っておくか？」

「そうじゃなくって：俺もまー坊がこの隙に逃げることはないと思うよ。それよりも、やっぱりまー坊が『ニンゲンジマ』ってキーワードを知っていたのが気になって仕方がないんだ」

蔑ろにしてよい問題ではないが、セイジの疑念は少々度が過ぎるように思えた。

「後で：きちんと話したほうがいいな：もっとも、まー坊が話せたらだが：」

「ああ：」

南エリアに向かいながら、俺の興奮はセイジの疑念ですっかり冷めていた。そしてその落ち着きは、扉を開いて部屋に進入しても相変わらず

ずであつた。

これまで鍵がかけられ入れなかつたこの部屋は、たつた三つの物体が床に置かれただけの、実にはがらんとした光景であつた。俺達はその物体を見下ろした。

物体は人の大きさほどの長さがある先が丸い円筒形で、巨大なタンクやボンベのようにも見えた。よく見ると小さな覗き窓と扉が取り付けられていて、扉を開けてみるとその中にはクツションが敷き詰められていた。

「こりゃ……まるで棺おけたなあ」

セイジの呟きに、俺達は一齐に苦笑いを浮かべた。彼の指摘は正しい。これはまるで、水葬に使う棺おけのようである。

「気味悪……」

言いながら、リキが残り二つのボンベを開いた。三つはまったく同じ物体であり、そのい

れにもクツションが敷き詰められていた。それ以上調べようがないと判断した俺達は、別の部屋へと移動することにした。

結果は全て同様であつた。鍵の開いた南側エリアの部屋は六つ。その全てに三個づつ、例の物体が設置され、十八個全てが同じ形で同じ中身であつた。何の発見も感動もなく、この島らしいと言えばそれまでだが、ドアロックの解除は俺達にとって何の成果も与えてはくれなかつた。

あれから、ミハシ君は端末の解析に寝る間を惜しんで没頭していた。たまに様子を伺いに中央広場へ行くと、そこには大抵リキがいて、彼はミハシ君の背後にべったりと張り付き、解析作業を観察しているようだった。

まー坊の監視は俺とセイジで分担していたが、あまりにもまー坊が静かであつたため、それほど真剣にやる必要も感じられず、最近では寢室前が無人状態になることも度々であつた。そうして空いた時間、俺とセイジは東側の岬を調査…と言うよりは入り口を見つけるため、岩盤を岩で叩いて破壊するという、石器人のような蛮行に明け暮れていた。

岩を岩で叩くという行為は、労力に対する成果は極めて低い。同じ硬度の物質を叩き合わせても、砕けるのは双方であり、何度が叩きつけ

ると砕けてしまうため、岩を変えては砕くの繰り返し返して、ここ数日で入り口があるであろうと目星をつけた箇所は、数センチの深さしか砕けていなかった。

ある日、俺はセイジと二人で食料の残量を調べてみた。

「五人で三食として…あと十日分か…先生、こりや…魚を取るとかしないと…」

「もちろんだ…しかし…五人で三食なのか？」

ほぼ二十四時間監視状態にあるまー坊は、ここ数日で一食もしていなかった。しかしだからと言って、彼が衰弱している様子もなく、彼が飲まず食わずで生理現象が一切ないのは事実であつた。俺はある晩、寝ているまー坊に近づいて様子を観察してみたのだが、彼は寢息を一切立てず、そもそも呼吸すらしていなかった。最初は死んでしまったのかと驚いたが、やがて目

を開けた老人は一言「おはよう」と咳き笑みを浮かべ、呼吸は再開していた。

「もしまー坊が今から食べるって言い出したら、その時はやっぱり食べさせないとだめだろう」

セイジの言うことももつともである。であるが、俺はおそらくそんなことはもうないだろうと思ひ、俺が見張りの間は、まー坊が自分から言い出さない限り、食料を出す必要はないと決めた。

「あれから大分解析が進みました。成果を見てください」

ミハシ君がそう言つて俺達を中央広場に集めたのは、食料の残量が十日分になつてから二日目のことである。

「ミハシ君。主な成果は？」

「はい。東エリアの施設が判明しました。これを見てください」

ミハシ君は端末を操作して画面を進めた。

「まず、これまでに僕達が調査したエリアを表示します」

南北と西側、三つのエリアの見取り図がモニターに表示され、それにはそれぞれ部屋名が表示されていた。

北エリアには「動力室」西側エリアには「休息室」「倉庫」と書かれ、そこまでは俺達の想像通りであったが、西エリアの透明なカプセルが置かれている部屋は「調達室」南側のタンクが置かれた六室は全て「出口」と表示されていた。この二つの表示に俺は疑問を抱き、首を傾げ、顎に手を当てた。チクリとした感触が指に伝わる。

「調達室」と「出口」とはどういう意味なのだろうか。カプセルが置かれた部屋には、ビーリングが入っていた。あれは「調達」してきたと



いうことなのだろうか。そしてタンク部屋はなぜ「出口」なのだろう。あそこには入室以外の扉は存在せず、どう考えても出口があるようには見えなかった。それとも、隠し扉でもあるのだろうか。そんなことを考えていると、画面は東エリアの表示へと切り替わった。

東エリアは見取り図からすると、寢室程度の小さな部屋と、動力室ほどの巨大な部屋の二つから構成されていた。廊下の突き当たりには梯子の表示があり、それはやはり地上の岬へと伸びていたため、俺の推理は正しかったことになる。あの岩盤の奥には他の三箇所と同様に、扉が隠されているのだろうか。

「部屋の名前を表示します。見てください」  
ミハシ君の口調はいつになく緊張していた。俺達が息を呑んで画面に見入っていると、大きい部屋には「転換室」と、小さい部屋には「制

御室」と表示された。

「転換室：どういう意味なんだ？」

リキの疑問に、だが俺達の誰一人として答えられる者はいなかった。そもそも俺自身、「転換」などという言葉はあまり使ったことがなく、なんとなくの意味は把握できたがそれに部屋が付くとなると理解はまるでできなかった。

「行ってみるしかないだろう。俺達にできることは限られているんだ。この見取り図を見る限り、東エリアはやはり岬と通じている。これから入り口を見つけて、調査するんだ」

この俺の意見に異論をはさむ者はいなかった。俺達は地上に上ると東側の岬に移動し、セイジとここ数日掘り続けた岩盤の側までやってきた。「岩で砕いてたんだが、そんなことじゃ何日かかるかわからない：リキ、ナイフを貸してくれ」  
俺に促されたりキは、懐からナイフを取り出

したものの、それをこちらに渡すことはなかった。

「俺がやる…下がっててくれ」

その場に腰をおろしたりキは、両手に持ったナイフを振り上げると、それを既に削られていく岩盤目掛けて突き下ろした。金属と岩盤が激突する高音が生じ、それは何度も続いた。ふと隣にいたセイジを見ると、彼は目を大きく見開き、口をぽかんと開けてリキの挙動を凝視していた。

「どうしたんだセイジ」

しかしセイジは返事することなく、凝視を続けるばかりであった。その額からはやがて大量の汗が分泌され、それが頬を伝って地面へと滴り落ちていた。彼の様子を一言で表すとすれば、「恐怖」であろう。この青年は一体何に怯えているのだろうか。そんなことを考えながらも、

リキの破壊作業は着々と進んでいた。やはりナイフは岩よりも硬度が高いのか、岩盤は勢い良く削れて崩れ、効率はずっとよかった。そして、一際強く打撃を加えた瞬間、ナイフの刃は折れ、勢い良く飛んだそれは海面へと落下した。

「く、くう！」

リキは腕に伝わった衝撃に耐えきれず、体ごと地面に転がった。最後の打撃個所には僅かだが、岩盤ではなく金属の表面が姿を覗かせていた。

「扉だ！！」

他の三方にあつたものと同様の、灰色の金属面は扉であろう。俺の叫びに皆は呼応し、それぞれ岩を手に、辺りの岩盤を叩き始めた。セイジもようやく得体のしれない恐怖から解放されたようである。もろくなつた岩盤は次々と崩れ、やがて四方二メートルばかりの扉が姿を現した。

俺達は一斉にそれをこじ開けようと手を突っ込んでみたが、隙間はなかった。

「皆、下がっててくれ」

俺は上着の内ポケットから拳銃を取り出しつつ、全員を扉から遠ざけ、それ目掛けて何度も引き金を引いた。硝煙の匂いが辺りに立ち込め、スライドが下がりがきつた拳銃からは、いくら引き金を引いても弾丸が発射されることはなかった。だがその代わりに、扉はぼこぼこに凹み、周囲の岩盤との隙間が生じていた。俺達は一斉にそこへ手をかけたが、一人リキだけはぼう々と呆けていた。

「どうした、リキ」

「あ、ああ…」

リキの視線は、俺の尻へ注がれていた。気持ちが悪く思いつつ自分の尻を触ってみると、先ほど全弾を撃ち尽くした拳銃がポケットに入

っていた。自分でも気付かないうちにしまっていたのだろう。リキの視線は拳銃から離れることがなく、顔色が段々青白くなっていった。まだまー坊に殺されかけた恐怖が払拭できていないのだろうか。こいつも案外気が小さいと思いつつ、俺は再び岩盤と扉の隙間に手を突っ込んだ。

「せーの！！」

力を合わせ、俺達は扉を持ち上げ、それを放り投げた。下を見ると御馴染みの梯子と煙突状の通路があり、さらその奥には灯りが漏れている。

「行くぜ！」

ようやく恐怖から解放されたのか、興奮した様子でリキは梯子へと向かい、俺達もそれに続いた。それにしてもこの扉は他の三つとは違い、ずいぶん頑丈に取り付けられ、厚い岩盤に隠さ

れていた。この下にはよほど俺達に見つけて欲しくない何かがあるのだろうか、それとも南エリアのタンク部屋のときのように、殺風景な設備が待っているのだろうか。

通路まで降り立った俺達は、そこを真っ直ぐ進んだ。通路は地下施設でこれまで見てきたものと変化がなく、はるか前方は行き止まりになっていて、つまりあれは中央広場とここを隔てている例の壁なのだろうと認識できた。十メートルほど進むと、先頭のリキが立ち止り、右手の扉を指した。ミハシ君は心当たりがあるらしく、何度も頷いた。

「ここは…さきほどのエリア表示と照らし合わせる、小さい方の部屋、つまり制御室ですね」  
そう言いながら、ミハシ君はこの扉からやや離れた場所にある、やはり同じ壁側にあるもう一つの扉へと視線を向けた。

「あつちが転換室ですね」

「よし、まずはこっちの制御室から調べてみよう」

俺の提案に反論する者はおらず、扉を開けるとそこは寝室ほどの広さがあったが、室内の後ろ半分にはこれまでに地下施設では見たことがないほどの機械類が、大きな机を中心に設置されていた。俺達はその圧迫感に気押しされ、部屋への進入を踏みとどまってしまった。

「せ、先生…この機械…動いています…」

ミハシ君は俺の後ろから室内をよく観察しているようだった。確かに彼の言う通り、部屋の機械はランプ類が点滅し、机に設置されているモニターも何かが表示されている。俺は意を決して室内に入った。すると、部屋は左手に向かって緩やかな下り坂になっていて、そちらには機械類は殆どなかった。

「誰かいなのか！」

自分を落ち着かせる意味でそう叫んでみたが、返事はもちろんなかった。よく見ると、部屋の左手にはもう一つ扉があり、それに面した壁はガラス製で、隣の巨大な部屋がよく見通せた。

「この制御室と、隣の転換室はつながってるのか……それにしてもでかい部屋だな……」

セイジは制御室に入り、ガラス面から隣の部屋を見上げていた。俺もそれに習うと、確かに隣の転換室は天井がこちらの制御室より高く、面積もずっと巨大だった。しかし何か機械が置かれていた様子はなく、制御室後方の詰め込まれ振りとは対照的であった。

「調べてみます」

そう言いながら、ミハシ君室内に入り、俺達の背後で機械の一部を調べ始めていた。リキも部屋に入り、彼は転換室へとつながる扉を開け、

首を突っ込んでいた。

「なーんもねえなあ　倉庫か？」

リキの疑問をよそに、俺はミハシ君の作業を見守るため、制御室の後部へと向かった。ミハシ君がついた机には、中央広場にあった、何も印刷されていないキーボードが一つ置かれていて、彼は軽快な手つきでそれを操作していた。先生……こっちのモニター……なんでしょうこれは」

この制御室の机には三つのモニターが設置されていて、ミハシ君が促したのは一番右側にあった。画面には中ぐらいの大きさのウィンドーに、鳥の写真が表示されていた。

「鳥……」

よく見ると、写真の下には「白文鳥・オス」と表示されていて、更にその下には八桁の数字が増えは減り、めまぐるしく動いていた。文鳥

と言え、まー坊の言葉である。彼は常に「文鳥になる」と呟いていた。そして隣は「転換室」様々な符号が俺の頭を駆け巡り、不気味で心地の悪い結論に達しつつあった。

「あ！」

俺の想像を遮断したのは、ミハシ君の叫びと床を伝わる小さな振動であった。

「ど、どうしたんだ！」

「ご、ごめんなさい、うっかりY e sを選択してしまつて」

「何のY e sだ？」

「わかりません！」

ミハシ君と俺のやりとりをよそに、セイジが素早い動作で廊下へと身を乗り出した。

「先生！ 中央広場への壁が、シャッターみたいに上がってる！」

セイジの叫びに呼応し、俺とリキは廊下へと

頭を出した。言葉通りである。このエリアと他を遮断していた分厚い壁はゆっくりと、作動音と振動を発しながら天井へと収納されていた。「へー、こりや行き来が楽になる。でかしたな坊主」

リキの軽口に、だがミハシ君は無反応のまま、端末の解析を続けていた。

「大したことじゃなくてよかった」

言いつつも、俺の頭には直前までの疑問が再び浮かんだ。

「なあ先生、これって……」

セイジは文鳥が表示されているモニターに氣付いたようだ。

「ああ…セイジ…こりや…君が言つてたまー坊がここの関係者つて説…有り得るな…」

「だよな…これって文鳥だよな」

「これ…変えられますね」

端末を操作したミハシ君は、そう言いながらモニターの表示を切り替え、文鳥は鳩の写真に変化した。と、同時に五桁の数字も変化し、この両者には何か因果関係があるように思えた。

「ここで…これに転換させるってことか…」

突飛である。俺達の側まで来たセイジの言葉は短かったが、あまりにも現実性に乏しかった。

「おいおい、何二人で不思議がってんだよ。気持ち悪いな」

俺とセイジの疑問にリキが介入してこようとした直後、部屋の扉が乱暴に開かれた。小さな空間でひしめいていた俺達は一様に身体を硬直させ、乱入者へと視線を注いだ。

「空へー！ 帰るぞー！ 空へー！！」

制御室への乱入者は軍服姿の老人。皺だらけのまー坊であつた。彼は俺を突き飛ばして隣の大きな部屋へと駆け足で進入した。

身体バランスが崩れた俺は咄嗟に手をついた。掌には突起物の感触が当たり、それは小さく押し込まれた。

何かのスイッチを押してしまったのだろうか。低く強烈でぶれた音が鼓膜を振動させ、ガラス面から閃光が発せられた。眩しさから目を手で覆つた俺は、何が起つたのか理解できず、やがて音と光は止み、部屋は再び静寂に包まれた。

「このクソジジイ！」

リキが怒りの形相で隣の部屋への扉を開けた。ガラス越しにそれを目で追つた俺達だったが、リキは辺りをキョロキョロするだけで、まー坊の姿はそこになかつた。

「リキ…まー坊は…」

俺はリキに続いて隣部屋へ進入した。するとリキが、身体を小刻みに震わせながら、天井高くを見上げていた。

「せ、先生……」

視線を上げてみると、天井付近に一羽の鳩が飛んでいた。気が付けば、俺もリキと同じように身体が震えていた。鳩は力いっぱい部屋を飛び回ると、急降下して扉から制御室へ、制御室から廊下へと飛び出していった。

「まー坊！ まー坊！！」

遅れて入ってきたセイジは、部屋の中を見渡していた。しかし俺とリキは共通の結論に至っていたのか、共に震えながら怯えているミハシ君の待つ制御室へと戻った。

「先生……リキさんも……見て下さい……」

ミハシ君に促され、俺とリキは中央のモニターを見た。

そこには「帰還準備完了 出口への搬送を開始せよ」と表示されていた。

モニターには鳩の写真が映し出されていた。

まー坊が制御室に入ってきて、そのまま転換室へと進入した。俺が押ししてしまったスイッチをきっかけに、なんらかの機械が作動した。まー坊の姿が消えた。この島に俺達以外の生物はいなかったが、転換室に鳩が現れた。モニターには「帰還準備完了」の文字が表示された。

これが先ほど起こった事件の全てである。事実だけを単純に追って、それを結果へと結びつけるのは簡単だが、深く考察してみる必要がある。そもそもあの転換室には初めから鳩がいたのかもしれないし、まー坊は転換室から廊下へと通じる扉から飛び出し、今はジャングルをうろついているのかもしれない。

まー坊は消えた。鳩が現れた。

まー坊は逃げた。鳩は最初からそこにいた。

まー坊は鳩になった。



三つ目の結論がもっとも現実性に乏しいが、自然な流れでもある。もっとも、それを自然と思えてしまう俺の感性自体が、すっかりもうこの島での事態に適応し、異常になってしまっているのかもしれないが。

すっかり疲れ果て、制御室から出ようとする俺に、セイジがそつと呟いた。

「まー坊はこのことを知ってたんだな。だけど…文鳥じゃなくって鳩だったのは、予定違いだったんだろうな…」

「こんな馬鹿げた話があるかよ。人が鳩になるなんて、誰が信じられるかよ」

言いながらも、俺の心はセイジに賛同していたし、まー坊の予定違いはちょっと悲惨だなと、我ながら支離滅裂な感想も抱いていた。

「でも…飛べるんなら、この島から出られて…いいですよね」

ミハシ君がそうポツリと呟いた。

「ジジイ！ どこだよ！ どこなんだよ！」

少し前まで俺と呆然を共有していたリキだったが、もうすっかり現実感を取り戻したのか、彼だけは起きた事実を受け止めてはいないようだった。

鳥になればこの島から脱出できる。ミハシ君はそう言ったが、鳩は渡り鳥ではない。こんな孤島から、果たして食料のある場所まで飛べるんだろうか。鳥の知識に乏しい俺は、その夜、そんなことを考えながら南エリアまで歩いていった。

「帰還準備完了 出口への搬送を開始せよ」

あのモニターに表示されていた言葉が気になっていた。

帰還準備とは、まー坊が鳩になったことを意味する間のだろうか。もしそうだとすれば、そ

れに続く出口への搬送とはどういった意味なのだろうか。確か端末には、この南エリアの部屋全てが出口と表示されていた。

「出口」の一つの扉の前に、クシャクシャの得体のしれない物体がいた。それは小刻みに震え、どうやら生き物のようである。

恐る恐る近づいてみると、ピクピクと動くそれは、鳥の雛であった。昼間の鳩に続いて雛を発見するとは、これまでまるで無人島であったのに、この賑やかさは何だろう。そんなことを考えつつ、俺は部屋の扉を開いた。すると雛は扉の中へとよたよたと這って行った。この雛はここに入りたいたいのだろうか。と思った瞬間、俺は雛を抱きかかえ、設置されているタンク目掛けて走った。そうか、これは昼間の鳩だ。すっかり雛に戻っているが、きつとあの鳩だ。

理屈には合わないが、この島にまともな理屈

があるもんか。

虫もいないジャングル。いつまでも変わらない天気。いきなり現れたビール瓶、軍服、拳銃、半ズボンの少年。

「これで帰れるんだろ」

言いながら、俺は鳩の雛をタンクのクツションに下ろし、蓋を閉じた。するとタンクは振動を初め、覗き窓から中の様子を窺うと、雛は見る見るうちに小さくなっていき、鳥の原型をとどめず、小指の先ほどの得体のしれない生き物に退化していき、最後には見えなくなった。何が完了した。そう確信した俺は、東エリアの制御室まで駆け出し、中央のモニターを見た。そこには「帰還完了」の文字が表示されていた。

あの晩に見た事實はセイジにもミハシ君にも、無論リキにも語っていない。俺はそんなものだろうと事態を受け止め、あんな行動をしてみました。だが、翌朝になればやはり頭は混乱し、その日は一日部屋に籠りつきりだった。心配したミハシ君が、

「昨日の出来事をどう整理して、僕達はこれからどうしたらいいのでしょうか」

と尋ねてきたが、俺はベッドで震えるのが一杯で、それ以来彼は俺の判断を求めなくなっていた。

鳩が雛へ。タンクに入れたら雛からおそらく細胞核へ。一体あれはどこへ行ったのだろうか。モニターの表示を信じるのなら、あれはどこかへ「帰還」したらしい。帰還とはすなわち帰るということだ。まー坊は鳩になって、どこかに

帰ったのだろうか。

もう何日か食事もせずに部屋で震えていたが、さすがに空腹を感じて、俺は倉庫へと向かった。カレーもスパも、もう楽しみではなく、単なる空腹を埋めるための固形物に過ぎないが、食べるだけまあマシなんだろう。さてよ、鳩って食べたのだろうか：

あれこれ考えながら廊下を歩く俺の足取りは意外としつかりとしたもので、よくまあ食事を抜いて平気なものだと感心し、同時に恐ろしくもなった。

倉庫に着いた俺は、食料の入った段ボールを覗き込んだ。箱の中には見慣れたカレーとスパがいくつか入っていたが、気が付いてみると、他の段ボールは全て空で、つまりはこの目の前にある分で食料は最後ということなのだろう。  
「先生：見ての通りだ。あと何日かで食料が尽

きる……」

「そうか……」

背後から声をかけてきたセイジは深刻な様子だった。

「まずいぜ……先生……魚を獲るとか、畑を耕すとか……どうにかして食料を確保しないと」

「ああ……」

返事をしつつも、俺はセイジの緊迫感に対して正直疲れを感じていた。確かに食料問題は重要で、俺達が今後生きていく上で避けては通れない。空調の効いたそこそこ快適な地下施設、外敵の存在もなく、生存に不安のない環境。この島は「安全」で「危険」はなかったが、人間が生き延びていく何か欠けているような気がする。それは具体的に言えば食料なのだが、そんな単純なことではない。もっと抽象的で、もっと大きい何かはここには欠けている。セイジ

の不安は具体的過ぎて、それを考えることは今の俺にとって面倒で遠回りに感じられた。だからからと言って抽象的な「何か」がなんであるのかは全くわからない。ここ数日、ベッドに籠りながらあれこれ考えてみたが、脳裏をよぎるのは転換室での出来事、つまりまー坊が鳩に換わり、その鳩が俺の手で消滅した、あの気味の悪い事件だけである。

制御パネルのスイッチを押してしまった際、強い光が生じて一瞬視力を奪われたが、あの瞬間、確かまー坊は笑顔で手を振っていたようにも見えた気がする。もっともこんなのは勝手な思い込みかもしれないが。

「なあ先生……」

「悪い……食料のことは後で考えよう……ところでミハシ君は？」

「先生からの指示がないから、自分なりに判断

するって、例の制御室でシステムを調査しているよ。かなり色々とわかったらしい」

自分の不安に応えないためか、セイジの表情からはあからさまな不満が滲んでいた。

「そうか：パスワードの件といい、なんかすっかりあの子に任せっきりだな…」

思えばこの島に漂着して以来、俺は皆ヘリーダーとして指示を与えていたが、結局大した成果は挙げておらず、その上セイジの救助やまー坊の世話、パスワードの解析など、具体的な物事は全て他人が解決してきた。自分の不甲斐なさを今更ながら思い知り、せめて何か手伝えることはないかと、制御室へ向かうことにした。

「ミハシ君、すまん…ここ何日か寝込んでいて」

制御室ではミハシ君が端末に向かっていて。

俺の謝罪をこの少年は、最初は驚き、やがて柔らかな笑顔で受け止めた。

「いいのです。僕もリキさんに殴られてからは、しばらく何もしていなかったのですから」

それにしてもこの少年は妙なしやべり方をする。堅いというか、持って回ったというか。まあそれでも、このフォローは嬉しい。

「このキーボードで動物の切り替えを行います」

ミハシ君が一番右側のモニターを指して、システムの説明を始めた。

「動物には雄と雌の二種類があって、それをこのキーで選択できます。動物自体は…ほとんど色々な種類がいて、僕もまだ全てを確認できていません。驚いたことに…」

キーボードを操作して、ミハシ君は画面の動物を切り替えた。それは二本の巨大な牙を持つ、太古に生息したマンモスであった。

「こんな物まで…」

こんな物まで、その後には続くはずの言葉を俺は呑み込んだ。そもそもこの制御室と隣の転換室は、一体何の目的を果たす部屋なのか、その答えを俺にしてもミハシ君にしてもおぼろげながら導きつつあったが、それはあまりにも現実的ではなく、荒唐無稽であったため、口にすることは出来なかった。よくモニターの表示を見ると、マンモスの画像の下には「絶滅種」という文字が映し出されていた。

「恐竜なんかも選択できますけど、それも全て絶滅種と表示されました…あと…」

画面の表示は、今度は花や木に変化した。それはいずれも花なら一輪、樹木なら一本と単品で、切り替わる画面は、さながら地球の生体力タログのようでもあった。

「動物だけじゃないのか…」

「はい、アメーバなどの単細胞生物も選択でき

ました。およそ、僕が知っている全ての『生き物』がこの画面で選択できます。もちろん、知らない生き物の方がずっと多いのですが…」

「なあミハシ君、動物を色々と表示してみてくださいるか」

「は、はい」

ミハシ君はキーボードを操作して、画面の動物や花を次々に表示させては切り替えた。俺はモニター表示の、特に下部に注目しながら表示内容を確認した。

それぞれの生き物の下には、何桁かのカウンターが表示されている。この桁数は物によってバラバラだったが、全てに表示されているわけではなく、むしろその替わりに「絶滅種」と表示された物の方が多いくらいだった。

「なあ…鼠とか昆虫はものすごい桁数なのに…象とかパンダとかが桁数がえらく少ないのって

…」

「え、ええ…」

俺の疑問に、ミハシ君は回答できるだけの情報を既に得ているようである。しかし彼は頷くだけで具体的な言葉は口にせず、ただ右側のモニターに視線を向けていた。

「これは…地球上にいる生き物のカウンターなんだろう…激しく表示が動いているのと、いない奴が絶滅種つてなっているのがその証明だ」

俺は思い切って結論に近づく推論を口にした。だがミハシ君はそれには頷かず、こちらに背を向けたまま、身体を小刻みに震わせていた。彼が納得したくないのはわかる。地球の全ての生き物を表示するカウンターなど有りえるわけがない。もしそんな推論を認めてしまえば、漂着してから起こった不可解な出来事は有りえて当然になってしまうからだ。そう思っただけで少年の顔

を覗き込んで見ると、なんと彼は口の両端を吊り上げていた。

「み、ミハシ君…」

「面白いですなえこれ…ここは何でもアリなのですな」

そう呟くミハシ君の表情には、自棄の色が濃く滲んでいた。

制御室を出た俺は、中央広場へと向かった。

広場に置かれた端末には電源が入っていて、画面をみるとこの島の全体図が表示されていた。少し操作してみようととも思ってみたが、何も印刷されていないキーボードには不安があり、誤操作でもしたら何が起こるかわからないと思いついて手を引つ込めてしまった。ふとモニターから目を離すと、南エリアの通路からリキが歩いてきた。

「ようリキ」

「こしばらく彼がこの島でどう過ごしているのか、それは全く不明であった。だが彼のことだから、施設をぶらぶらしたり、海で泳いだりしているのだろう。どちらにしても、この状況を打開するような結果をもたらす行動をしていないのは容易に想像できた。リキはズボンのポケットに両手を突っ込んだまま、俺を睨み付けた。」

「ミハシが言ってたぜ、あの部屋は人間を別の生き物に換える部屋だつて」

「リキとミハシ君がここ数日でどんな言葉を交わしたのか、それはわからなかったが、俺とに對してとは違い、ミハシ君は自分の考えをリキに語つたのだろう。それは俺ですら思つてはいたが語らなかつた、あまりにもシンプルでわかりやすい推論だつた。」

「そう結論づけるのは…」

俺が言葉を続けようとしたその瞬間、リキが急に俺との距離を詰めた。

「どうすんだよ！ どうやってここから出るんだよ！ あんた何にもしねえじゃねえかよ！」

「お、おい…」

「このままじゃ俺達だつて死んじまうんだぜ！」

鳩になつたであろうまー坊が果たしてどこへ消えたのか、あれを「死」というのに抵抗があつた俺はリキの単純な思考に辟易としたが、そもそも俺以外は南エリアのタンクで消えたあの鳩の顛末を知らず、そのことに気付くと彼の不安もよく理解できた。しかし一瞬生じた誤解の空白が、茶髪の青年の怒気を更に強めてしまつたのか、リキは俺を壁に突き飛ばすと西の居住エリアへと荒つばい拳動で歩き去つて行つた。



狼煙の番を終えた俺は、西の海へと沈みつつある夕日をぼんやりと眺め、その後背後のジャングルへ振り返った。

何日か前に会った、あの半ズボン姿の少年は一体何者なんだろうか。おそらくあの少年は、この島の目的を知っているのだろう。あのときはこちらもまだ理解していることが少なく、少年の登場に戸惑うばかりであったが、もし今度会うことができれば色々と尋ねることができだろう。もっとも、それまでに俺達が生き延びることができればの話だが。そう考えると俺は空腹を覚え、梯子を降りて倉庫へと向かった。倉庫の扉の前には、セイジとミハシ君の姿があった。

「二人とも飯か？」

俺の言葉に振り向いた二人は、一様に不可解

そうな表情を浮かべていた。

「どうしたんだ。さっさと倉庫に入って飯にしようぜ」

そう言いつつ倉庫の扉に手をかけたが、それはピクリと動いただけで開くことはできなかった。

「な、なんだよこれ……」

「さっきからそうなんだよ。俺とミハシ君で開けようとしたんだけど……」

セイジの言葉にミハシ君も頷いた。

「閉てつけが悪いのかなあ……そもそもここの扉が閉じてたことなんてなかったのにな」

言いつつ、俺は体重をかけて扉を開こうとし、セイジとミハシ君も一緒に手伝ってくれた。しかし扉はガタガタと揺れるだけで開かれることがなかった。

「おいおい、どーなってるんだ、これは」

俺達は扉から離れて顔を見合わせた。閉ざされた倉庫の扉。困難となった食料への到達。朝から変化した状況は、ここにいない唯一の男がどこにいるかという疑問を想起させ、俺も含めた全員が引きつった笑みを浮かべた。

「ガタガタうるせえぞ！ 扉は開かねえようにしたんだからな！」

扉の向こう、倉庫の中から聞こえてくる声の主は、よく知った茶髪の青年であった。

「リキ！ てめえどういっつもりだ！」

セイジが扉を両拳で叩いてそう叫んだ。

「この食料は俺が全部食べる。もうお前達は知らねえ！」

「馬鹿だなてめえは！ あと何食もねえだろ！ そんなことしたら、これから獲る魚は分けてやらねえからな！」

リキに対してはセイジも言葉が荒くなる。し

かし彼の言う通り、食料の独占という反乱行為は、つまりは俺達グループからの離脱と反目を意味する。食料庫に籠ったら最後、外に出ることはままならず、あと何日か分の食料を消費した先に待つのは飢え死にだけである。やはりリキの思考回路は単純であり、それだけに度し難いと俺は判断した。海にいけば無限の食材が待っているはずである。もちろんそれを捕獲するのに困難は付きまとうが、どちらにしても、もう食料はないのだ。

「ははは！ 海に魚なんていねえよ！」

「な…！？」

リキの言葉があまりにも自信と確信に満ちていたため、俺達は一様にたじろいだ。

「俺は最近この辺を潜つてみたんだ！ 魚も貝も、海藻すらありやしねえ！ 海には何もいねえよ！」

不自然かもしれないが、ジャングルに虫の姿も見かけない以上、この島の周辺であればそれも事実かもしれない。

「リキ。どうするつもりなんだ。俺達は力を合わせてこの事態を切り抜けなきゃいけないはずだろ。お前一人で食料を独占したところで、何の解決にもならないんだぞ」

「うるせえ…俺には考えがあるんだ…」

俺の問いに答えるリキの声は低く、掠れていて、力強かった。

セイジがその後何度も扉を叩き、リキの暴拳を止めようとしたが、倉庫の中から返事が返ってくるのがなく、一時間ほど頑張った後、俺達はひとまず中央広場にやってきた。

「どうするのですか先生…」

「うん…倉庫への進入口は他にないのかな…」

「調べてみます」

ミハシ君は端末を操作して西側エリアの見取り図をモニターに表示させた。

「ダメですね…入り口は廊下につながる一つだけです…」

「そうか…」

リキがどうやって扉を閉ざしたかわからないが、三人がかりでも開かなかつた以上、力づくで突入するのは難しいだろう。こうなると、やはり説得しか方法がないのだが、俺にはあの茶髪の青年を言葉で懐柔できる自信はあまりなかった。

「あいつが倉庫から出る理由を作ればいいんだ。たとえば助けが来たとか嘘をつくとか…少しでも扉が開けば、後はどうにでもなる」

体力と格闘に自信があるためか、提案するセイジは自信たっぷり、俺もその方法しかない

かと納得させられた。

「そうだな：だけどすぐにやってもバレルだろう：今はまだ、あいつも気が張って油断がないはずだ：たぶん今日は眠れないだろうから、朝から試してみよう」

俺の言葉にセイジは大きく頷いてくれたが、言いつつも情けない気持ちに襲われた。疎遠だったとはいえ、リキはついさっきまで仲間だったはずである。裏切ったのは彼の方だが、計略で陥れるのは気が引け、こんな結果になった自分のリーダーシップのなさが恨めしかった。

俺達三人は、何が起こるかわからないという判断から、三人が同じ部屋で寝ることにした。セイジのベッドから、マットと布団を俺とミハシ君の寝室に持ち込むため、どたばたと搬入作業を始めたのだが、そうしている間も俺達の注意は倉庫へと向けられていた。しかし扉が開い

てリキが姿を現すこともなく、空腹の俺達は仕方なく寝室に入った。

「腹減つたなあ：もうカレーもパスタも飽きてたけど、いざ食えないとなるとなあ」

セイジのぼやきに、俺とミハシ君は苦笑いで答えた。

「それにしても：リキが言っていた、魚がいな」というのは本当なのでしょうか」

いつのまにか敬称を省略してミハシ君がそう呟いた。セイジは床に敷いたマットに腰を下ろし、両手を枕にして壁に寄りかかった。

「さあな：だけどなんであいつ、あんなに馬鹿なんだ？ 先生、あいつはずっとそうだったのかい？」

「ん：そうだな：」

セイジはリキに対して悪意を隠すことがなく、人間としてのレベルもずっと下だと思っ

ようである。俺にはそこまでリキという存在をはつきりと定義してはおらず、問いに返事をすることができなかった。

「僕のこれにヒビが入っているのも、あいつにやられたからなのです」

二段ベッドに上ったミハシ君が眼鏡を外しながらそう呟いた。敬称略から「あいつ」に変化するまで十分もかからず、彼がセイジの影響でリキに対する感情を向け始めているのは明白であった。

「やつばそうなのかあ…しっかしあーゆー奴っ  
ているよなあ…普段は無口で不機嫌そうでさ、  
急に怒り出して何考えてるかわかんねえ奴」

「俺は…」

毒づくセイジがあまりにも笑顔だったため、俺は自分の気持ちを言葉にすることで沸き起こりそうな不愉快さを抑えようとしたが、何を言

いたいのかもよくわからず、すぐに黙り込んでしまった。

「なあ先生、俺が何を言いたいかわかるか？  
あいつをハメて捕まえても、もう仲間にしてやることなんてできないんだ。一度裏切った奴は絶対信用できない」

「それが君の経験上からくる判断か？」

「ああ…記憶はないけど、疑いなく言えるね。  
リキはもう敵なんだ」

セイジの判断には隙間やゆとりがなく、あまりにもシンプルであった。無論、こんなサバイバル生活ではそうした方が正しいのだろう。だが迷いや躊躇のない彼の判定基準が、俺にも常に向けられているかと思うと、恐ろしくもあつた。

俺達はその夜、交代で寝ることにした。最初

に起きていたのはセイジで、三時間後に俺が、そして更に三時間後、ミハシ君を起こすことになつた。

「交代だよ。起きてくれ」

二段ベッドの下で眠るミハシ君を俺は身体を揺すつて起こした。しばらくしてやっと目を覚ましたミハシ君は、枕もとにあつた眼鏡をかけると、不安そうな顔をこちらに向けた。

「大丈夫：何か合つたら俺かセイジを起こせばいい」

「は、はい：先生：リキさんは、本当にもう敵なのでしょうか」

「セイジが言つてたことか？ うん：まあ、ただ、リキもヤケになつてただけだろう：捕まえて説得すれば：敵とかつて、そんなはずきりしたものでないよ」

この言葉に多少安心したのか、ミハシ君の表

情は和らぎ、笑顔が戻つていた。

ミハシ君を一人起こしているのは不安もあつたが、番を交代してもらつた俺はすぐさま深い眠りへと落ちた。

「起きろてめえら！」

乱暴な叫び声で俺の意識は眠りから現実へと引き戻された。この島にやつてきて、もう何度かこうして睡眠を無理やり妨げられたことがあつた。それは常にろくでもない事件を伴つていたのだが、今回もその例に漏れてはいなかつた。

扉の前に、泣き出しそうなミハシ君と、その背後から折れたナイフを首筋に突きつけたリキの姿が見える。これは、初めてリキと出会つたときとまるで同じ光景だ。セイジも今の声に起こされたのか、布団から上体を起こし緊張していた。

「リキ：てめえどーゆーつもりだあ…」

そうセイジは威圧したが、リキは動じることなく、顎で出口を促した。

「いいから起きろ。てめえらはこれから東エリアに行くんだ」

「行つて…そこで何をするつもりだ」

「うるせえ！ 俺に考えあるつたろーがよ！ てめえ言うこときかねえと坊主刺すぞ！」

俺の言葉にリキは激昂した。ミハシ君の緊張感頂点に達したのか、学生服のズボンの裾からは透明な液体がしたり、部屋にはアンモニア臭が漂った。

「汚ねえ！ 汚ねえよこいつ！」

リキはミハシ君をナイフの柄で小突いた。ミハシ君の両眼からは水分が分泌され、それが頬を伝つて既に水浸しになっていた床へ零れ落ちた。

俺とセイジはリキの暴力に従つしかなかった。

俺達は制御室に向かうため廊下を歩き出し、その背後からミハシ君を羽交い締めにしたリキの足音が続いた。

「セイジ、てめえは隣に行け」

制御室にまで脅されて来た俺達へリキがそう命令した。

「てめえ…」

セイジは振り返つて凄んでみたが、リキは顎で隣の転換室を促すばかりである。彼の目的は完全に予想できなかったが、大方の見当はついた。

「リキ、ここの設備はまだ調査中なんだ。ミハシ君からどう聞いたのかは知らないが、馬鹿な真似はよせ」

「うるせえんだよアホが！ いいから早く隣に行けよ！ 殺すぞ！」

そう叫びつつ、リキが折れたナイフの残った

刃をミハシ君の首筋に強く押し付けたため、セイジは苦々しい表情を浮かべたまま、扉を開け、隣の転換室へと移った。

「ひひ…そうそう…そうだ…てめえはドアを塞いどけ」

そう言われた俺は、仕方なくセイジが通った扉の前に立った。

「そうじゃねえだろ。あっち向いてノブを押さえてろよ！」

暴力を盾にした細かい要求に従うのは悔しかったが、今はまだ反撃のチャンスではない。そう判断した俺は、机の前に立つリキに背を向け、ドアノブを握り締めた。横の壁は全面ガラス張りになっていて、そこからセイジの様子も見えたが、彼は腕を組んだままガラス越しに対面するリキを睨み付けていた。

「ミハシ、クジラだ。クジラにしろ」

物音を立てながらリキはそうまくしたてた。

おそらく、椅子にミハシ君を無理矢理座らせているのだろう。ガラスの反射は弱く、背後で何が起こっているかは正確に掴めなかったが、音と状況から容易に想像はできた。

「あ、あ、あああ…」

ミハシ君のか細いうめき声が聞こえ、それに続いてキーボードを叩く軽くて乾いた音が制御室に響いた。脅す者と、どこまでもそれに逆らえない者。両者のやりとりを背中を感じる俺は、自分が妙に落ち着いているのが不思議だった。

「あ…うあ…ど、どのクジラ…」

「なんだ!？」

「クジラだけでも百種類以上…ど、どのクジラ」

「そうだな…一番でけえのは、確かシロナガスクジラだったな。それにしろ」

「う、うう…」



先ほどの見当に間違いはない。リキはセイジを、まー坊が鳩になつたように動物へと入れ換えさせるつもりだ。しかしその目的は一体なんであろうか。

「リキ！ お前一体セイジをどうするつもりだ！」

「るせえ！ 食料がねえんだ！ 一番でけえのにのするしかねえだろ！」

ねえだろ、と言われても…なる程、つまりリキは俺達を食料になりそうな動物に換えて、それを食つて生き延びるつもりなんだろう。しかしよりによってクジラとは、確かに眼前の転換室は、体育館ほどの広さがあり、クジラぐらいならなんとか納まりそうだが、折れたナイフでどうやってクジラの巨体を制し、解体するつもりなのだろう。「考えがある」とは言っていたものの、やはりリキはリキである。

「そうそう、それだよ。そのシロナガスだ。よしスイッチを押せ」

「で、でも…」

「俺が押してやる。死ぬ、セイジ！」

叫び声の後、机を叩くような音が響いた。おそらくリキが例のスイッチを力いっぱい叩いたのだろう。しかしまー坊の時とは異なり、転換室からは光や音も発せられず、制御室は奇妙な静寂に包まれた。

「ど、どうなつてんだよ？」

「わ、わかりません…もしかすると…この数字が0になつてゐるせいでしょうか」

「わ、わかんねえよ！ じゃあ別のにしろ！」

「は、はい…」

「そうそう…その牛でいい。それにしろ。それなら数字もいっぱいじゃねえか」

再びスイッチを叩く音が聞こえたが、やはり

何も起こらず、リキの焦りが怒りへと変化する、そんな気配の変化が背中越しにピリピリと感じられた。

「どーなつてんだよこれはよお！ このスイツチじゃねえのかよお！」

轉換室のセイジには、ガラス越しに制御室の様子が見えているはずである。そう思った俺は正面の扉から視線をガラス面に移したが、轉換室にいるはずのセイジの姿はなかった。もっとよく見ると、轉換室から廊下へと通じる扉が開いている。

なんて問抜けな話だ。リキは俺に轉換室と制御室をつなくこの扉を締めさせたが、あまりにも片手落ちである。思わず笑い出しそうになった瞬間、背後の扉、つまり制御室から廊下へと繋がる扉が開かれ、激しい物音と男達の怒声が出た。

「てめえ！」

「いつの間にい！」

俺が振り返ると、ミハシ君の小柄な身体が机から吹っ飛ばされてきた。その両肩を受け止めると、身体を低く構えつつリキと対峙する、セイジの背中が眼前に飛び込んできた。

今まであまり意識してはいなかったが、漂着以来、セイジはずっと上半身裸のままであり、その背中の筋肉は逞しかった。よく見ると、セイジは背中にびっしりと汗をかいていて、身体も小刻みに震えていた。そしてそれ越しに見えるリキは折れたナイフを構えていた。なる程、体力に自信があるセイジでも、折れているとはいえ、ナイフを持った者と対峙するのは極度の緊張が伴うのだろう。

「ぶっ殺してやる！」

ナイフを持つリキの手も震えていたが、これ

は緊張というよりは猛っているからだろう。こんな状況でも俺はなぜか冷静であり、その原因がはつきり判明すると、もう躊躇はなかった。

「いい加減にしろ」

俺は拳銃を懐から取り出し、それをリキに突きつけていた。見る見るうちに茶髪青年の顔色が真つ青になり、その膝はガクガクと震えだしていた。銃口を向けられた恐怖は今ひとつ想像できないが、このリキの怯えは異常かつ滑稽ですらあった。もちろん、この反応を俺は予測していた。

まー坊に脅されていた際、そして岬で拳銃を見たときも、リキの拳銃に対する恐怖は尋常ではなかった。無論、これにはもう一発の弾丸も入ってはいなかったが、威圧には充分過ぎる効力を発揮していた。

「リキ！ ナイフを捨ててこっちへこい！」

セイジの命令にリキは怯えながら従い、二人は転換室へと入った。顔面蒼白となっていたリキに抵抗する様子はなく、俺も相変わらず制御室の扉から銃口を向けたままであったが、リキに対する警戒よりも、セイジが何をしようとしているかの方が気になっていた。「ミハシ君！ こと廊下への扉をロックできるか！ 俺が逃げ出した扉だ！」

そう叫ぶセイジに、机に戻ったミハシ君は大きく頷いた。既に抵抗心とナイフを失っていたリキをセイジは突き飛ばすと、制御室へ戻って扉を閉ざした。

「先生、もうこつするしか他に方法はないんだ」

「セ、セイジ……」

「先生、セイジさん、廊下への鍵とここへの扉、両方をいまロックしました。これであいつは転換室に閉じ込められたのです」

「ミハシ君は明るく嬉しそうであった。セイジはドアノブを回して扉が開かないことを確認すると、ミハシ君の背後について、彼の肩を軽く叩いた。

「よし…どの動物にするかだ…」

二人は右側のモニターを見ながら、嬉しそうに切り替わる生き物の画像を吟味していた。俺は拳銃を懐にしまうと、ガラス越しにリキへと注意を向けた。ようやく正気を取り戻したのか、リキはガラス何度も何度も叩いていた。その表情は恐怖に歪み、なにやら叫んでいるようだが防音のためか、声は聞こえなかった。

「これにしましょう」

「そうだな毛の色なんかそのままもんな」

俺が机に向かうと、セイジとミハシ君が見つめる画面には、茶色のハムスターの画像と二行に渡って膨大な桁の数字が表示されていた。

「脅すだけだろ。二人とも…」

「転換室のリキには聞こえないだろうと思ひ、

俺はそうセイジ達に言った。モニターを見ていた二人は同時に俺の方へ向いたが、言葉の意味が伝わっていないのか、どちらも不思議そうに眉間に皺を寄せていた。

「先生…さっきもいったでしょ。もうこうするしかないんだよ」

「だけどリキは充分怯えている。この拳銃があれば、あいつは言うことを聞く」

「ですけど…それに弾が入っていないとばれれば…」

「ミハシ君の言うことはもつともであったが、リキをハムスターに換えてしまうのは、いくらなんでもやり過ぎだと思えた。

「俺はあいつに殺されかけたも同じだ。もう許すことはできないんだよ。いいよな」

セイジもミハシ君も本気である。俺にはもう、二人を止めることができなかった。

「じゃあなりキ！ ネズミになったら可愛がつてやるからな！」

スイッチを押すのと同時に、セイジとミハシ君は腕で目を覆った。しかし、やはり転換室からは光と音もなく、ただ怯えてガラスを乱打するリキの姿が見えるだけであった。

「やっぱりスイッチが違うのか？」

「で、ですけど…このパネルに他のスイッチはありませんし、まー坊さんの時も、先生がこれを押ししてしまつて…」

「先生、本当にこのスイッチなのか？」

セイジの指しているスイッチは、確かに俺がまー坊に突き飛ばされた際に押ししてしまったものである。制御パネルまで行った俺はそれを確認した。

「やはり…まだこの設備は使い方がわからないんだよ。俺達に扱うのは無理さ」

言いながらも、俺は機械が作動しなかった事実にはほつとしていた。

「よく調べてくれよ。このままじゃどうしようもないだろ」

そうセイジに言われたものの、あそこまでリキを脅かせばもう充分だろう。そう思いつつスイッチを見た俺に、セイジは言葉を続けた。

「押してみてくれよ。どっか引つかかっているかもしれないし」

「ああ…」

言われるまま、俺はスイッチを押してみた。

すると、スイッチは僅かに凹み、何かが引つかかっている様子はなかった。他のパネルを調べてみようかと、俺はスイッチから離れたが、その瞬間、部屋全体が振動し、ぶれた音と共に転換

室が眩い光に包まれた。

「な、なんだと!？」

眩しさに、俺は目を腕で覆った。やがて音と振動は収まり、光も消えたため転換室を見ると、そこにリキの姿はなかった。セイジとミハシ君は俺を見た。なぜ機械が動き出したのか聞きたいのだろうが、そんなこと俺にわかるはずがなかった。俺はスイッチを押しただけである。なぜリキとセイジが押してもなんの反応もなかったのに、まー坊の時といい、俺が押すとシステムが作動するのだろうか。スイッチを押してしまった指を見つめた俺は、手の甲に赤く「管」と記されている事実は今更ながら気付き、何やら恐ろしくなっていた。

「成功だな」

ガラス越しに転換室を見たセイジはそう呟いた。彼の視線を追うと、広い転換室の床を小さ

な物体が駆け回っている。

「鍵を開けました」

ミハシ君に促され、セイジと俺は転換室へ入り、這い回る茶色い生き物を摘み上げた。それはハムスターであり、キーキーと鳴きながら俺の手に噛み付こうとしていた。

「はは…性格はリキのまんまなんだな。こんな凶暴なネズミ、見たことないぜ」

言いながらも、セイジの表情は強張っていて、予想はしていたものの起こった事実の不可解さにシヨックを受けているようであった。

「先生、これなら食料もそんなにいらなし、せめて可愛がつてやろうぜ」

罪の意識からか、セイジはせめてもの気持ちでそう言っているのだろうが、俺は未だ話していなかった事実を語るのにいい機会だろうと判断した。

「いいか：こうなったりキが、結局どうなるのか：鳩があの後どうしたか、二人とも知らないだろ」

「鳩：島から逃げたんじゃないのか？」

呑気に呟くセイジに、俺は苦く自棄がちな笑みを向けた。

ハムスターになつたりキを、俺は倉庫まで運び、空いていた段ボールの一つに閉じ込めた。

その様子を見ていたセイジとミハシ君には、この行動の意味が理解できないのだろう、ひたすら首を傾げていた。

「閉じ込めるのですか？」

「ああ：この方が変化がよくわかる：昼になったらまた見に来よう」

そう説明したものの、やはり二人は首を傾げつづけていた。

数時間後、俺達は再び倉庫を訪れ、先ほどリキを閉じ込めた段ボールを開封した。

段ボールの角はかじられて小さな穴が空いていたが、そこからリキが抜け出すことはなく、中には先ほどよりずっと小さく、幼くなったハムスターの赤ん坊がヒクヒクと痙攣していて、それを見下ろしたセイジとミハシ君はうめき声を上げた。

「まー坊の鳩もこうだったんだ。しばらくして見つけたら、すっかり離になつていた」

「こ、このまま：この先はどうなるんだ：」

「さあ：ただ、俺はこうなつたまー坊を、南のタンクに入れた：今回もそうしよう」

俺はすっかり小さく無力になつたりキを掬い上げ、南側エリアの「出口」と端末で表示されている部屋へ向かった。セイジ達も俺に続いた

が、二人の表情には疑問が溢れていて、その様子は滑稽に感じられた。

「このタンクに、俺は雛になつたまー坊を入れただ」

そう言いつつ、ハムスターの赤ん坊を、俺はタンクの一つに入れ、二人に覗き窓から中の様子を見るように促した。やがてタンクは振動を始め、まー坊のときと同じように、リキだったハムスターの赤ん坊は胎児へと退行し、遂には見えなくなってしまった。その一部始終を目の当たりにしたセイジ達はタンクにしがみ付き、起きた出来事に身体を震わせていた。

無論、その後制御室のモニターに、「帰還完了」の文字が表示されていた事は言うまでもない。



まー坊とリキが消え、この「人間島」には俺とセイジ、ミハシ君の三人が残った。もともと消えた二人は俺に対して協力的とは言えなかったので、ここでの暮らしに人手が不足するという事態には陥らず、むしろ残酷な考えをすれば、食いつ持が減って助かるとも言えた。ただ、その消え方が問題である。彼らはいずれも、こちらが選んだ動物の姿に換わって、しばらくすると胎児化し、南のタンクに入れた後消滅してしまった。人が消えるにしてはあまりにも荒唐無稽で非現実的である。しかしそれを目の当たりした以上、これは現実の出来事であって拒絶することはできない。

俺達は、事実に対してそれぞれがそれぞれの受け止め方をしていた。まずセイジはあの日以来、俺に話し掛けることもなく、たまに見掛け

ると常に携帯電話を操作していた。その様子からは苛立ちが感じられ、こちらから声を掛けることができずにいた。

ミハシ君は東の制御室に入り浸り、ずっとシステムの解析に没頭していた。彼は俺に対してもこれまで通りで、システムの使い方を実に詳しく、わかりやすく説明してくれた。

「このキーボードを操作して動物と性別を選択します。そしてスイッチを押せば転換が始まります。ただしカウンターが絶滅種やゼロの場合はスイッチを押しても反応せず、左側のモニターに警告メッセージが表示されます」

操作は簡単だったが、それを実証する機会がないのが問題だともミハシ君は言った。

「なあ。なんでリキの時、スイッチを押してもシステムは中々稼動しなかったんだろうな」

「はい。それも左側のモニターを見ればわかる

と思います。これは主に警告メッセージを出すために使われているようですから」

「そうか：しかし原因を調べるにしても…」

「ええ、実験をしようにも、あっちの転換室に誰かがいないとこうなるのです」

そう言つてミハシ君はスイッチを押した。右側のモニターには黒い猫が、左側には「転換対象者の準備が出来ていません」といつたメッセージが表示されていた。なる程、実証する機会がないとはこういうことか。俺達の誰かが動物になる覚悟があればそれも可能だが、今後このシステムを使うことはないだろう。ふと俺は、端末を操作するミハシ君が、眼鏡を掛けていない事実気付いた。出会つたときから彼はずっと眼鏡をかけていて、リキに殴られてヒビが入つた後もずっとそうであつたのに、どうしたの  
だろうか。

「ミハシ君：眼鏡はどうしたんだい？」

「ああ：最近：何か目の調子がよくて、眼鏡がいらないのです。ヒビも入っていましたが、今では部屋に置きっぱなしです」

目の悪い人間が、そう簡単に視力が回復して、眼鏡がいらなくなるなんてことがあるわけがない。しかしここは人間島だ。何日か絶食しても空腹感もなく、風呂に入らなくても異臭がしない事実は俺自身が直面している。それに人間が動物に換わつてしまうこのシステムの前では、視力の回復など些細な出来事である。

この制御室にあるシステムは、この島にあるどの機械よりも機能が明確であり、それを調査することで様々な謎を解明できるかもしれない。だがもつと単純かつ切実な問題が俺達には迫つていた。カレーとスパゲッティは合わせて残り九食分しかなく、まともに三人が三食食えば三

日、どう切り詰めても五日以上はもちそうにもない。空腹感こそないが、絶食を続けて生き延びられるという保証はどこにもない。飢え死にというごく近くに迫った問題を解決するべく、俺は中央広場にいたセイジに声を掛けた。

「セイジ、魚や貝がいるか調べてみよう。君は泳げるよな」

「あ、ああ…」

携帯電話を操作しながら、セイジは心ここにあらずといった返事をした。

「いくらやっても繋がらないんだろ？」

「そうなんだ…圏外の表示のままで…それにしても、どうして着歴やメールの一通も入っていないんだ」

「そりゃ…自分で言ってたじゃないか。買い換えればかりかもしれないって」

「そうなんだけどさ…」

携帯電話のボタンを操作するセイジからは奇立ちが感じられた。俺は彼に食料の調達を手伝ってもらうのは困難だと思い、仕方なく一人で地上に上がることにした。

梯子を上って地上に出ると、外はいつもの快晴で、波もなく穏やかな海が岬から広がっていた。

本当にこの海には魚がないのだろうか。リキはそう言っていたし、彼が海を一人で泳いでいるのは何度か目撃したことがある。しかし自分で確かめる必要があると思ひ、俺は下着姿になつて崖から海へと潜ってみた。

海中で目を開くと、そこは青く澄んでいて、背後と眼下には岩肌が広がっていた。動くものは何もない、ただ穏やかな空間である。時々水面を見上げると、日差しが海面越しに強い光を照り付けていた。

一時間ほどの時間をかけて、島をぐるりと一周泳いでみた。しかし魚の姿は一切なく、食料に出来そうな貝や海草の類も一切見つかることはできなかった。崖から地上に戻った俺はすっかり疲れ果て、岬で呼吸を整えていると強い太陽の光と熱で、濡れていた全身はすっかり乾いていた。

海の幸をあてにはできない。青く澄んで美しい海だが、その実は生物が一切生息していない死の空間である。そう思って背後を振り返ってみると、視界にはうっそうとしたジャングルが広がっていた。

まともに調査はしていないが、あの森の中に食料になる草や木の実、茸の類がもしかするとあるかもしれない。そんな期待を抱きつつ、シヤツと上着を着込んだ俺は、一縷の望みを胸に、木々の中へと分け入った。

木の根、枝、そして足元に生える雑草。その全てを調べてみても、食料となりそうな物はなく、葉を口に含んでみても僅かな水分が染み出すだけで、とても腹の足しになるとは思えなかった。もう駄目なのだろうか。倉庫の食料を食い尽くした時が俺達の最後なんだろうか。ここしばらく、俺は空腹感をあまり感じていなかったため、その恐怖に今ひとつ現実感は無かったが、海とジャングルを調べてみても、何も発見できなかったという徒労感が急激に襲来し、俺はすっかり疲れてその場にへたり込んでしまった。

「こんな場所でもなんにも思い出せずに死ぬのかよ！」

声に出して叫んでみると、幾分気持ちは晴れ、立ち上がる分の気力が確保できた。そして、ぐんと縦に移動した視界に、少年の姿が飛び込んで

できた。

あれは、いつかボートを発見した際にここで目撃した少年である。黒いシャツに黒い半ズボン。指だけが妙に太く、鋭い目をした色白で生氣のないの少年。彼は俺から数メートルほど離れた場所からこちらを見ていた。この少年は多分この島のことを知っている。彼の落ち着いた様子をそう結び付けていた俺は、この状況を打開する希望を少年に向け、今度こそは有益な情報を聞き出そうと慎重になった。

「なあ君：君はいつからここにいるんだ？」

しかし俺の問いに少年は答えることもなく、ただ能面のような表情をこちらに向けつつづけていた。

「俺達はもうすっかり困っている。食料もないし、記憶を戻す手立ても、どうやって帰るかその方法もわからない。助けてくれ」

自分よりはるか年下の少年に頭を下げ、俺はそう助けを求めた。しかし頭を上げて少年を見ると、彼の様子に変化はなく、能面が崩れることすらなかった。

「お前は誰だ。そしてお前は知っているはずだ。ここはどこだ!？」

感情に任せて俺はそう叫んだ。俺の怒気に押されたのか、少年の能面はようやく崩れ、軽い驚愕が白い頬を振るわせた。しかし再び表情を戻すと、彼はようやく俺の問いに返事をした。

「ここは、僕だ」

短く、意味も理解できず、観念的ですからある言葉だ。俺の心はまたもや昂ぶりつつあったが、とにかく成立はしていないものの会話が始まったのだ、この機会を潰すことができないと判断した俺は、怒りを制御して質問を続けた。

「ここが君なら、君が俺達をここに連れてきた

のか」

「いいや。君達は来るべくしてここに来た。誰も連れてきたわけじゃない」

「このままじゃ俺達は飢え死にする。これからどうすればいいんだ」

「もうそろそろ食べなくても平気なはずだよ」

「そんな馬鹿な。人間は食べなきゃ死ぬんだ」

「それは身体がもたないからだ。けどもう、君は身体の訴えからは自由になりつつある。とくに身体の悩み事はなくなっているんだよ」

駄目だ。俺には少年の言葉がさっぱり理解できない。一体このガキは何をしゃべっているんだ。激しい苛立ちが心をかき乱したが、ミハシ君の視力は回復し、俺は空腹感もなく、まー坊は足が速く力が強かった。「身体の訴えから自由になる」という少年の言葉を、実はとくに理解しつつあり、その事実に関心自身が恐れてい

るのが次第に判明していき、俺の呼吸は激しくなっていた。

「そろそろ自覚したらどうだい」

「何をだ。俺には記憶がまるでないんだ。ここに来た理由もわからなけりゃ、どうして飯を食わなくてよくなるかなんてわからねえ。お前がそれを知ってるんなら教えろ！」

「僕に教えることなんて何も無いよ。だって君はうまくやってるじゃないか。後は自覚して、きちんとかんたことだよ。そうすれば全部うまくいく」

「お前！」

我慢できなくなった俺は、少年に近づいて胸ぐらを掴んだ。彼の体重は恐ろしく軽く、ふわりと持ち上がるとその手応えが不気味で、思わず手を離してしまった。少年は、ふわりと地面に着地し、俺に笑みを向けた。

「考える必要はそれ程ない。君ならうまくやれるよ。僕にもできたんだ」

そう呟くと、少年は右の手の甲を俺に向けた。そこには以前見たときと同じように「管」という赤い文字が記されていた。俺と同じように。

「お前は…その文字は…」

「もうすぐ僕の役目も終わる。君が自覚さえしてくれば、僕は還ることが出来るんだ。しっかりしてくれよ。後たつた二人じゃないか」

「何を…自覚すりゃいいんだよ…」

「難しいことじゃない」

俺は顎に手を当て、心当たりを探ってみた。ちくりとした髭の感触が指に伝わる。

さてよ。俺はこの島に来てから、時々こうやって顎に手を当てて考え事をしてきた。その度に指へこの痛感が伝わっていた。

俺の髭は気がついた時からまるで伸びてない。

もう一ヶ月近く同じ長さのままだ。それが何を意味するのかわからないが、気味が悪く身体が小刻みに震えだした。

「これが…自覚…か…」

気がついてみると少年の姿は俺の眼前から忽然と消えていた。鬱蒼としたジャングルの中で、俺は一人震え、二度と顎へ手が伸びることはなかった。

気を取り直したわけじゃないが、いつまでも震えているわけにはいかない。今の問答を二人に相談する必要があると、俺は地下施設へと戻った。セイジとミハシ君は、制御室にいた。

「あ、先生…見てください、選べる動物にこんなのがいました」

ミハシ君が指したモニターには、全裸の人間の写真が表示されていた。

「白人に黒人、いろんな人種が選択できるので  
す」

嬉しそうにミハシ君は報告し、セイジは興味  
深くモニターを覗き込んでいた。

「なあ……」

俺は二人に少年との会話を報告し、その内容  
を検討しようと思っていた。しかし制御室に入  
り、このシステムの意味をなんとなく理解した  
俺は、いわゆる自覚をってしまったのか、急に  
おかしくなり壁に寄りかかった。

「先生……」

異変に気付いたのか、セイジとミハシ君は俺  
を心配そうに見つめていた。

「なあ……ここは空気が淀んでるな……外に出よう  
か」

俺の提案に、二人は首を傾げて反応したが、  
制御室から廊下へと出ると、彼らもそれに付き

合ってくれた。

西の岬に出た俺達は、夕日が沈む海をぼんや  
りと眺めていた。

「気晴らしに歌でも歌おう」

俺の提案に、二人はあからさまな嫌悪感を示  
した。彼らは何か言いたそうな表情でこちらを  
見つめていた。

「歌おうよ。なんでもいいから」

自覚しつつあった。ここがどこで、俺達がな  
んでここにいいのか。しかしそれを認めること  
は未だ難しく、特にあの制御室のシステムを目  
の当たりにすれば、それは尚更であった。なん  
でもいいから身体を使いたかった。だが俺はそ  
もそも運動が得意ではない。ミハシ君もそうだ  
ろう。であれば、歌を歌うという行為は多分適  
当なのだろう。そう思って提案したものの、俺  
は歌など何も思いつくことができなかった。



「ラー、ララ、ラララ、ラー」

セイジが海に向かって歌いだした。

「歌詞は思い出せないけど、メロディならなんとなく覚えてる」

セイジはそう呟き、俺とミハシ君の肩に手を回した。

「ラララ、ラー。ラー、ラララー」

セイジに合わせて歌ってみると、俺もそのメロディをなんとなくだが、覚えているような気がしてきた。やがて、遅れながらもミハシ君も一緒に歌いだした。

明日には二人に俺が自覚した事実を全て語る。それからどうするかは三人で相談すればいい。きっと俺達なら楽しくやれるはずだ。

気がついてみると、目が痺れ、生暖かい感触が頬を伝わった。俺は泣いているんだろう。セイジとミハシ君もそのようである。俺達は、多

分偽物であろう夕日に向かって歌詞のない歌を震える声でいつまでも歌い続けていた。

翌朝、目が覚めた俺が食料庫に向かうと、その途中例のカプセルがある部屋で、一冊の本を発見した。本はビール瓶の時と同じようにカプセルに入っていて、表紙には「歌謡百選『蘇るヒット曲』と書かれていた。ページをめくってみると、その内容が俺の記憶を刺激した。そう、これは俺が知っている歌ばかりだ。どうやってこの歌を覚えたのかは思い出せないが、詩の一つ一つが闇であった記憶に光を当て、充実感に身体が震えた。しかし、ページの大半は白紙で、中には歌のタイトルだけが書いてあるものや、歌詞そのものが歯抜けになっていたりした。

この本は俺が欲しいからここにあったのだろうか、それともあの色白の少年がプレゼントし

てくれた物なのだろうか。判断はできなかったが、とにかくこれでまともな歌を皆で歌うことができる。そう思った俺は部屋から駆け出し、セイジとミハシ君を大声で呼んだ。すると、二人は部屋を出てすぐの廊下にいた。その表情は暗く、特にミハシ君などは今にも泣き出しそうであつた。

「どうしたんだ二人とも…そうだ、これを見てくれよ。歌詞の載つた本だ。今日はこれを使って歌おうよ」

「なあ先生…昨日、俺とミハシ君で話し合つたんだ」

セイジの声は重く低く、ある種の決意が込められていた。

「もう限界だ。食料もないし、助けにきてくれる気配もない。俺達はこのままじゃ終わりだ」

「セイジ…食料なら何とかなるぞ。この部屋に

あるカプセル、これはよくわからないが何か物を取り寄せることができるらしい。ほら」

俺は歌の本をセイジ達に見せた。しかし彼らの反応は鈍く、表情は暗いままであつた。

「俺達はここにいちゃいけないんだよ先生。ここは通過点なんだ。ようやくそれがわかつたんだ」

「じゃあ…二人はどうするつもりなんだ」

「ぼ、僕達は…あのリキさんやまー坊さん達みたいに、制御室のシステムを使って帰還するのです」

か細い声で、ミハシ君がそう告げた。

「帰還つて…動物に替わつてタンクに入るってことか？」

俺の問いに、セイジとミハシ君は小さく頷いた。

「ま、待てよ…本当にそれでいいのかよ。帰還

って言ったって、それはモニターに表示されるだけで、実際は死んでるかも。それに動物になるんだぞ。そんなのでいいのかよ」「先生は：相変わらず思い出せないのかい？」

セイジの問いが何を意味するのか、一瞬俺には理解できなかった。

「思い出すって：俺達は記憶がまるでないんだ。ここでの出来事ぐらいしか：」

言いながら俺は、セイジとミハシ君が気まずそうに視線を逸らすのに気付いた。なる程そうか。二人は思い出したのか。

「よ、よかったじゃないか：な、ならますます家に帰らないと」

記憶が戻ったのなら、ここで生き延びて助けを待つのが当然だ。俺はもうすっかり二人の確信も、戻った記憶の正体も薄々理解し始めてはいたが、理性がそれを阻んでいた。

「身体が生きてるって実感が段々しなくなってきた。腹も減らないし、昨日だって寝てないのに全然疲れない。まー坊だってそうだった。俺達はもう：」

セイジが何を言いたいのか、俺にはよく理解できた。しかしそれを聞いてしまえばあまりにも決定的である。俺は掌で言葉を制し、ゆっくり頷き返した。

「わかったよ：俺にスイッチを押してくれて言いたいんだろ。転換室からは制御室のキーボードは操作できないもんな」

「あ、ありがとう先生：」

セイジとミハシ君は俺の手を握り締めた。しかし彼らの体温はまるで感じず、おそらく彼らもそうなのであろう。俺達は皆はっとして頭を掻いた。

「僕はこれがいいです」

制御室についた俺達は、早速キーボードを操作して替わる動物を選択した。ミハシ君が選択した画面に表示されていたのは、大きな黒い犬の写真であつた。

「犬か…」

「はい。僕はこれでいいです」

「本当にいいのか。ここで暮らしていくこともできるんだぞ」

「はい…ですけど僕には絶えられそうにもありません」

ミハシ君はそう呟くと、自分の足元に視線を落とした。彼はずっと靴をなくしたままで、もう靴下もぼろぼろなのだろうか、素足のままであつた。

「自分で脱いだのだから、靴がないのは当然だったのですね。面白いですね、身に付けていた物は、こっちに持つてくることができなのです

ね」

ミハシ君の声は震えていた。彼の言葉と、靴がないという現実。そして出会つてからずっと高い所を怖がつていた事実を照らした俺は、ここがどこで、自分達がどうしてここにいるのが、よりはつきりと認識できた。

「最初は猫がいいとも考えていたのです。ですけど猫は高いところに行きます。僕にはそれが怖いのです」

人間を止めて犬や猫になりたいというミハシ君の心境は、歌の本を見て喜んだ俺には到底理解できない種類のものではあつた。つまりこの少年は自分が人間であることに失望した過去を持つているのだろう。俺は説得を諦めてがつくりと肩を落とした。

「じゃあ…僕はこれで…」

隣の転換室への扉を開けると、ミハシ君はと

ほとほと中へと入っていった。彼はそのまま床に体育座りをして、こちらへ小さく手を振っていた。

「セイジ、これでいいのかよ」

「先生：ミハシ君だって散々考えた結果なんだ。俺達は怖いんだよ。どうしてこうなっちまったのか、段々とわかってきて、それを受け止められないんだ。俺はリキの持ったナイフが怖くて仕方がなかった。その理由も今ならわかる。あれは酷い経験だ。あんな記憶を持ったまま、俺はもうどうすることもできないんだ」

セイジは俺の側までやってくると、スイッチを手をかけた。

「さあ実験だ：いくぞミハシ君！」

スイッチを思いきりセイジは押したが、システムは起動することなく、左側のモニターには「管理者以外の転換作業は認められていませ

ん」と表示された。

「やつばな…」

そう呟くセイジの視線は俺の右手に記された「管」という字に注がれていた。

「先生が押すしかないみたいだな。頼むよ」

この「管」は「管理者」という意味か。あの少年は、俺が自覚さえすれば、自分が帰還することもできる。そんなことを言っていた。未だにその意味を完全には理解できなかったが、ぼんやりと、これまでの出来事は起こるべくして起きたのであろう。そんな気がしてきた。

もちろんためらいもある。常識的に考えれば、これは一種の人殺しだ。だが引きつった笑顔でこちらへ手を振る学生服姿の少年を見てみると、これからの行為に罪の意識は感じられなかった。俺はスイッチに手をかけ、それに体重をわずかに傾けた。

光と振動、ぶれた音が同時に発せられ、その全てがやんだ後、ガラス越しの転換室には一匹の黒い犬の姿があった。

「どうして換わった直後は大人の姿なんだろうね」

穏やかな口調でセイジがそう呟いた。

「たぶん…新しい身体に馴染ませるためだろうな」

何の根拠もないが、今の俺にはその言葉への迷いは一切なかった。セイジは転換室への扉を開け、犬になったミハシ君を制御室へ招き入れた。ミハシ君は尻尾を振り、嬉しそうに俺達を見上げていた。

「ミハシ君…だよな」

そう尋ねると、大きく元気に「ワン！」という返事が制御室に響いた。姿はすっかり犬になっってしまったが、どうやらこれはやはりミハシ

君のようである。彼は俺達に身体を摺り寄せ、ピスピスとくるくると鼻を鳴らしていた。

「さて…次は俺だな…」

セイジはミハシ君に教えてもらったのだろうか、ぎこちない手つきながらもキーボードを操作して画面の表示を変えた。

「あれえ…おつかしいなあ…確かこれでうまくいくはずなのに」

画面にはチンパンジーの写真が表示されていたが、どうやらセイジが換わりたい生き物は別のようである、彼がしきりに首を傾げていると、背後からやってきたミハシ君が、顎でキーボードを押しした。

「お、サンキュー」

そう礼を言いながら、セイジはミハシ君の頭を撫でた。画面には、人間の女性の写真が表示されていた。

「俺はやっぱ人間がいいんだ。それも生まれ変わるなら女の子がいい」

「生まれ変わる…か…」

「そうとしか思えないよ」

「そうだな…」

セイジの言葉を肯定するのであれば、俺達はもう既に生きてはいないということである。しかし今はそれを深く考えることもできず、俺はただ転換室へ向かうセイジの背中を見守りつつ、スイッチに手をかけることしかできなかった。

女になったセイジは相変わらず美しく、その裸体を直視し続けることができない俺は、上着を手渡して視線を床に落とした。

「なあセイジ…これでよかったのか」

「さあな…」

声色こそ違つが、あまりにもその口調がセイジそのものであったため、俺は驚いて眼前に立

つ女性の顔を見た。

「なんか…よくわからないんだよ。頭はぼんやりとしたまんまで。だけど俺は相変わらず俺のままだ」

女性は無表情で、身体はまだよく馴染んでいないのか、時々膝をかくかく震わせながら、必死にバランスを取ろうとしていた。俺は彼女に肩を貸して、ミハシ君と制御室を出た。

俺達は中央広場に着いた。セイジを椅子に座らせた俺は、彼女の身体が先ほどまでより若干だが小さくなっている事実に気がついた。

「先生…意識が遠くなってきた…どうやら俺が俺でいつづけられるのも、あと少しみたいだ…」

女の声で呟くセイジは穏やかで、苦しそうな様子ではなかった。

「なあセイジ…俺はこれから一人ぼっちでどうすりゃいいんだ」

「さあ…そうだな…どうなんだろう…また…この島に誰かが流れ着いてくるだろう。その度に同じようにすれば…いいんじゃないのかな？」

「いつまでだ」

「先生のためにスイッチを押してくれる人が来るまで…かな」

セイジは最後にそう呟くと意識を失い、椅子から床へと崩れ落ちた。

「ミハシ君…セイジは気を失ってしまったようだ」

しかしその言葉にミハシ君は返事をせず、机の角を熱心に噛み続けていた。

「そうか…もうすっかり犬になったんだな…君は」

しばらくすると黒い犬は座り込み、そのまま眠り込んでしまった。

夜になったころ、俺は南のタンクがある部屋に、すっかり赤ん坊になった女の子と子犬を抱えてきた。二つのタンクを開けて中へ入れると、タンクはいつものように作動し、二つの生き物は姿を消した。

「さようならセイジ。さようならミハシ君」

こうして、俺はこの人間島にいる最後の一人になった。



あれから何日経ったのだろうか。俺は相変わらず人間島にいる。倉庫の食料はもう残ってはいないが、寝る前に食べたい物を願うと、それは翌朝にはカプセルの中に、ご丁寧にも調理済みの状態で現れるため、食料に困るということではなかった。もつとも、特に食べたい物がないうきなどは、何日も飲まず食わずだったがそれで飢えることもなく、いよいよ俺は、自分が既に生きていないという実感を得つつあった。最初はその自覚が恐ろしくて仕方がなかったが、慣れてしまえばそれも過去のこと、それよりもこう意識が現実的だと暇を持て余して仕方がなかった。

助けを求めるといふ発想も、それ自体がなくなっていた為、もう狼煙の番をすることもなく、取り敢えず暇を潰すべく、カプセルから充電式

の小型テレビを取り寄せてみた。しかしいくらスイッチをつけても画面は砂の嵐ばかりであり、まあ電波が受信できないのだから仕方がないだろうと思ひ、今度はビデオとゲーム機を取り寄せた。しかしいずれのソフトも、どうやら以前に俺が見たり遊んだりしたことがある物ばかりで、失った記憶は多少刺激されたが、娯楽としてはかなり物足りなかった。

取り寄せられるのは、俺が知っている物だけであり、つまりこれは俺のイメージを具体的な形にしてくれるシステムなのだろう。だからビール瓶のラベルも単純なことしか書いておらず、あれは多分リキの妄想が形になった物だったのだろうと今更ながら理解できた。

そう考えてみれば、この施設や設備、いや、島そのものや周辺の海、星空までもが全て誰かの妄想なのかもしれない。現在のデータラメさは

それならひどく納得がいく。

さて、だとすればその妄想の主は一体誰なのだろうか。俺でないことは確かだから、あのジヤングルで出会った色白の少年かもしれない。彼は「ここは僕だ」と言っていた。

しかし、これはなんとも奇妙な感覚なのだが、俺の周辺全てが他人の妄想だとしても、いまここに居るという現状には作為がなく、とても自然な成り行きのように思えた。俺はここに来るべくして来たのだし、皆にしても多分そうなんだろう。やはり、セイジが言っていたように、俺達は皆死んでしまった存在なのだろうか。だとすればここは「あの世」ということになる。だがおかしなものだが、あの世にしていると仮定したところで、今の俺はここでどうやって「生きて」いこうかを考えつつづけている。

地下施設の端末や、制御室のシステムは一応

全て操作できるようになった。もうこの島で分らないことは何もない。だが、ここで暮らしつつづけても、俺が何者で、具体的にどんな理由でここに来たのかは未だ分からず、もう既に記憶へ対する興味は薄れ掛けていたものの、気がかりではあった。

それから更に日が経つと、もう俺の時間の感覚はすっかり麻痺していて、過去の記憶に対する執着はますます薄れていた。この期間、俺は殆ど寝て過ごしていた。肉体的な実感がなく、言うのは面白いもので、いくら寝ても寝疲れがなく、目が覚めてしまうということがない。

食欲も便意もない俺は、いつまでも寝つつづけることができた。

ある日、気分転換にジャングルへ行った俺は、森で倒れている一人の中年男性に出会った。彼もやはり記憶がなく、意識が回復した後もしば

らくは混乱していた。もちろんこの男に俺の知っている全てを話してもよかったのだが、退屈しのぎをしたかったため、俺は自分も現在の状況をよく分かかっていないと嘘をつき、しばらく彼と過ごしてみることにした。

プラスチックのプレートが着いた紺色の帽子を被っていたため、彼の呼び名は「魚屋さん」になった。魚屋さんは高いところも平気で、刃物や銃、炎を見せても平然としたものだったが、唯一水には過剰な反応をし、岬から海を見下ろした時などはその場で両肩を抱いてガタガタと震えだしてしまった。多分、この人は溺れたのだろう。なのに、俺が「もし動物になってこの島から抜け出すとすれば、魚屋さんは何がいい？」と尋ねると、彼は「イルカがいいなあ」と遠い目をして語った。

魚屋さんが現れて一週間ほど経った頃、彼は

もうこの島と現状の非現実性に疲れ果ててしまったのか、ゲツソリとした様子で部屋に籠りきりになってしまい、さすがに可愛そうだと思つた俺は、知っている全てを打ち明けた。心が病にかかりつつあったのか、魚屋さんは俺の荒唐無稽な話を全て受け入れ、その夜彼はイルカになつてタンクの中で消滅した。

こんなことが、あれから何度かあった。魚屋さんの次は、いかにもガラの悪いパンチパーマの男で、何かにつけて暴力に訴える厄介な気性だった。こんな奴に制御システムを見られては何をされるかわからないと判断した俺は、中央広場から東側を隔てる、重くて分厚い壁を下ろし、東の岬からの通路も封じ、男にシステムの存在を気付かれないようにした。やがてこの男はこちらを手下扱いし、すっかり王様気取りを始めたため、俺はまー坊の残した拳銃で脅しを

かけ、蟻に換えてやった。

その次は初めてのケースだが、漂着者は中年の女性であった。彼女は人懐っこく、どうやら俺に好意を抱いたのか、ずっとここで暮らそうと言い出し、しまいには人の下着を勝手に洗い出す始末だった。彼女はこちらの好みではなく、むしろその好意に対して辟易とした俺はうまく転換室へ誘い出し、唯一彼女が残っていた記憶を頼りに、飼っていた猫とそっくりに換えてやった。

再び独りになった俺に、ふとした疑問が湧いてきた。なぜこの島にやってくるのは、どうもこいつも人間が濃い面子なのだろう。まあミハシ君は比較のおとなしかったが、パソコンに對する彼の執着は尋常ではなく、リキの怒気と不安に對するこだわりや、セイジの滌刺さ、まー坊の陽気さ、そして後から来た三人に共通し

た血の気の多さと、まるで穏やかな人物は一人として流れ着いてこなかった。そして全員に共通しているのは、皆何かの恐怖、つまりトラウマの類を持っているという点であり、やはりそれがこの島に来た直接の原因なのだろうと納得すると、俺の身には一体何が起こってこんな場所に来る羽目になったものなのかと、失われた記憶に對する興味も再び湧いてきた。

俺がすっかり環境に慣れ、数えきれないほどの人間を生き物に換えてタンクへしまった頃、あの色白の少年が中央広場に姿を現した。

「やあ……すっかり自分の役目を果たしているようだね」

役目とはっきり言われると、何やら抵抗感がある。漂着した人間を動物に換えて消してしまふ役目など、無論自分から望んで演じているわけではない。しかしいつも唐突に登場する少年

だ。前回までは地上のジャングルだったが、遂にこの地下施設まで訪れてきたのか。

「さあな…君は…これまでどこにいたんだ？」

「僕はずっとこの島にいたよ。僕は君よりずっと昔からここにいるから、どこにでも隠れて君がうまくやれるかを見守ることができんだ」

相変わらず少年の言葉は今ひとつ意味不明だったが、以前に比べてずっと理解できるようにはなっていた。つまり、彼は俺なんかよりずっと先輩だから、ここの仕組みを熟知しているし、思い通りにできることも多いのだろう。それにしても見守られていたとは恥ずかしい。リキとの醜い争いや、岬で泣きながら歌った日没、自分の一回りほど年上のおばさんに迫られた夜、そんなもろもろ全てを覗き見られていたとは。

「今日は何をしに来たんだ」

「僕はもう還るんだ。だって君が僕の代わりを

立派に務めてくれるものね。だから頼みに来たんだよ」

俺がここに来る以前まで、あの制御室のスイッチを押すのは、この少年の役目であったということなのだろうか。確かにこの子の右手の甲にも、俺と同じように「管」の字が記されている。

「俺に頼み？ できることなんて、一つぐらいかないぞ」

「それでいい」

セイジは女性になって、意識を失う直前にこう言っていた。俺がああ転換室に入って還るには、スイッチを押す人間が必要だと。彼の代わりをこれから務めるということは、つまりこの少年も、例のシステムを熟知しているはずだろう。うまく騙せばこちらが還ることだって出来る。だがそんな計略はすぐにどうでもよくなっ

た。

還るも何も、俺はいままでどうしてきたのか相変わらず記憶もない。この人間島での暮らしは退屈だが、自分の現在はここから始まっているのだし、多少なりとも愛着がある。

「なあ…君も記憶がないままここに来たのか？」

「そうだよ。ここに来るには記憶が邪魔なんだ。換わるのに昔のことを憶えているのは色々面倒らしいんだよ。だけどここに長くいると、やつぱり思い出してしまっただね。それだけ強烈な体験だし、長居しているとなつとなついね。」

「もしかして…君は…」

「そう、僕も最近全部を思い出した。もつとも、あつという間の出来事で、何が原因でこつちに来たのか、理由もよくわからないけど」

「ミハシ君達は、かなり酷い目にあつてここに

来たみたいだな」

「そう、それが条件なんだよ。心がいつまでも悔しいままでと、人間はこんな島に来てしまった。だけど僕達は違う。呆気なく、わからないままこつちに来たからこそ、拘りも恐れもなくスイツチを押す仕事ができるんだ」

「僕達は？ じゃあ俺達と、他に流れ着く連中は違つてことなのか？ だから俺だけちつとも思い出せないのか？ ここに来る前何があつたのかを」

「そう。僕等は管理者だから、ここに長居をするために来た者達だから、思い出せないほど短い最後だったんだよ」

相変わらず少年の言葉は観念的で、具体性に欠けていた。こんな島で何年も、いや何十年も人間の残骸を生き物に換える仕事をしていると、俺もいつかはこんな訳のわからないしゃべり方

になつてしまふのだろうか。

それにしてもだ。なんて味気のない「あの世」なのだろう。俺は死後の世界など、多分信じてはいなかったが、ここまでシステム化され、樂園でも地獄でもない役所や工場のような空間だと、かえつてありがちな「あの世」が羨ましくも思えた。それにここを実感できる人間にも条件があつて、それが無念のうちの最後だとは、どこまでいつても人間は不平等に扱われるのだろう。おまけに、それを管理するのも俺達人間だとは。

悲しくはない。ただ寂しいだけだ。

「今すぐ制御室に行くか？」

「いや：僕もここは長かつたし、少し歩き回りたいな。いいかな？」

「ああ。お前みたいな奴でもいなくなると寂しいからな」

俺達二人の管理者は、北エリアからこの施設を巡つてみることにした。

「この動力室は、僕の前の管理者が作ったんだ」  
パイプだらけの金属の塊の前に、少年はそんなことを呟いた。

「どうしてこんな物が必要なんだ？　ここに動力なんていらないだろ」

「うん。だけど前の管理者は、やっぱり動力源がないと不安だつたらしい。不安だと想像通りにはいかないからね」

そんなものなのだろうか。だとすれば、この島の歴代の管理者は、俺も含めて全員が自然に興味のない奴だつたのだろう。頭上にあるはずの、いい加減なジャングルを思い出しながら、俺はそんな感想を持った。

「この島は、てつきりお前の妄想の産物だとかり思つていたが……」

「うん。僕が気付いたときから人間島はあったし、手に「管」の字がある人もいた。その人も、気付いたら島にいたらしいから、ここのオリジナルを 誰が形作ったのかはわからないんだ」  
「最初にこの島を作った奴か：どんな奴だったんだろうな」

「さあ：だけどパソコンとか用意したのは僕だよ。これから来る人には、こっちの方が便利だと思っ」

中央広場に戻った俺達は、電源の入った端末の前で立ち止まった。

「ミハシ君がいなけりゃ、使い方もわからなかつたけどな」

「僕にもよくわからないんだよ」

「そ、そうなのか」

「だって、僕が生きてた頃には、こんな物はなかったもの。形とか、システムっていうの？ ソ

フトっていうの？ そういうのも全部後から来て、もういなくなった人から教わって真似てみたんだ」

「だからキーボードに文字が印刷されてなかったり：とにかく色々と不便に出来てるんだな」

俺の呟きに、少年は笑みを浮かべて「ごめん」と謝った。ここや制御室に端末を導入する前は、一体どういった仕組みでこの島や帰還システムを制御していたのだろう。そんな疑問もふと湧いたが、少年の笑みがあまりにも無邪気だったため、どうでもよくなってしまった。

「じゃあレンジ食品も後から来た奴らの妄想だったんだな」

「うん。僕はレンジって物すら知らないもの。ただ、前にいた子が、すごく好きだったんだ」

俺達二人は倉庫にやってきていた。カレーとスパが切れて以来、ここには俺の妄想で取り寄



せた食材で埋め尽くされている。セイジ達の後から来た人々にもそれを食べさせてきたし、今後も俺にとって重要な仕事の一つになるはずだ。

「これはお弁当に…カップラーメンかい？」

少年は段ボールに入った食材を指しながら、笑顔でそう尋ねた。

「そう。いつまでも腐らない弁当に、それこそ永遠に保存がきくカップ麺だ。どうやら俺はこれまで独り者だったみたいだな。見てみるよそのパッケージ」

俺に促され、少年はカップ麺のパッケージを興味深そうに観察した。

「すごいなあ。成分表示までばっちりじゃないか」

「だろ。俺はそんなものばかり食べてたらしいよ。まあこれからはもっとマシな食い物を妄想できるように頑張ってみるよ。流れてくる奴ら

も、これじゃ味気ないだろうしな…だけど待てよ…」

根本的な疑問が俺の脳裏に浮かんだ。死んだ人間の残骸。魂とでも言うのだろうか。それを地上の生き物に生まれ変わらせるのは管理者の裁量一つである。もし俺がいつまでもスイッチを押さない場合、この島はそんな無念で果てた者達でいっぱいになってしまうのだろうか。

「そうしたければ、そうすればいい」

少年の答えは明快だった。

「生きてる奴と、果てた奴の勘定まで君が気にすることはないよ。ここに来る奴の方が圧倒的に少数派なんだ。命のバランスなんて、僕たちの知らないところで帳尻が合ってるだろうしね」

そう言われてみればそうである。こうしている間にも、凄まじい勢いで生き物は生まれ、果

ている。俺が担うのは、その極々一部で、そもそも全てを担いきれるはずがない。

最後に、俺と少年は制御室までやってきた。

「やっとこの日が来たんだな」

この少年は、俺が来るまで一体どのくらいの年月をこの島で過ごしてきたのだろう。電子レンジも知らないというから、何十年も前なのだろうか。そもそも、ここで地上の時間が完全に一致しているとは言いきれない。ただはつきりしていることが一つだけある。

「俺がこの島から出るには、管の字がある奴が来るまで待つしかないんだな」

「その通り」

少年は、俺に満面の笑みを浮かべた。そろそろ始めるべきだと判断した俺は、ミハシ君に教わった通りに端末を操作した。

「大したものだなあ……」

俺がキーボードを操作するのを感じしながら、少年はそんなことを呟くと、右側のモニターに視線を注いだ。

「俺はさ……死後の世界なんて信じてなかったと思っただよ。だけどここは酷いもんだな。神様も悪魔もいなりや、あるのは殺風景な島と機械だけだ。こんなあの世つてあるかよ」

今更そんなことを言っても仕方がない。しかしこれでこの少年ともお別れかと思うと、つい予てからの不満が俺の口から漏れてしまった。

「ここは人間が作ったんだ。だから人間が考えられる以上の物は何もない。もっとも、別の島じゃ閻魔とか神様とか名乗って、来た人間をたぶり脅したり、説教したりする管理者もいるそうだよ」

他にもこんな島がある。その事実になんか驚き

つつも、まあ不思議はないと妙に納得したりもした。

「僕がいなくなったら、君はこの人間島を好きに変えればいい。天国でも地獄でも。そして君はこの島そのものになるんだ」

「やめてくれよ。俺にはそんな観念的な言葉、今のところ理解できそうにない」

「なるほど」

短く返事をした少年は、次々と画面を変える俺の手を止めさせた。

「僕はこれがいい」

少年が選んだのは、一輪の蘭の花であった。

「こんなのでいいのかよ。人間にだってなれるんだぜ」

「人間はもう飽きるほど見てきたし、嫌いになるには充分なんだよ。僕は花になりたい」

蘭の花は、立派に育つのに人間の手を必要と

するはずだ。しかし画面に表示された花を嬉しそうに眺める少年を見ると、そんな忠告は野暮だと思った。

「頼んだよ」

そう言い残し、少年は転換室へと入っていった。スイッチに手をかけた俺は、ガラス越しに転換室の少年を見た。彼はひどく穏やかな表情をこちらに向け、それはせいせいしているようにも見えた。このまま右手に体重をかければ少年は人間から蘭に換わる。だが、最後にもう一つだけ聞いておきたいことがあった。俺は慌てて転換室の扉を開けた。

「なあ。どうして…つまり…そのなんだ。こんなややこしい手を選んだんだ？」

「ややこしい？ スイッチを押すのが？」

「いや、なんでさっさと俺の前に現れて、事情を話してくれなかったんだ。俺達はこの島に着

いて脱出しようと、生き延びようと必死だった。ただどうだとわかっていれば、無駄な努力はしなかったし、嫌な思いもせずに済んだ。つまりこれは俺からお前に対する最後の抗議だ」

少年は生気のない表情を俺に向けると、視線を正面のガラスに逸らした。

「だつて信じないだろ。それに、だからまー坊を残しておいたんだ」

俺とのコミュニケーションを、少年はもう望んでいない。逸らした視線とぶつきら棒な口調をそう認識した俺は、仕方なく扉を閉じ、再びスイッチに手をかけた。確かにそうだ。こんな少年がこの全てを語ったところで、俺達の誰もが信じるはずもなく、事態はかえって混乱していたかもしれない。しかしそれならば、ボケた老人ではなく、もう少しまともなコミュニケーションができる人物を残しておいて欲しかった。

たものだ。だがそう思いつつも、これまで俺は必死にあがきながら、結局はこの仕組みに従い、今や俺は管理者になつていて。

やはりここに来たのも、ここでの出来事も全て自然な成り行きなんだろう。そう考えると何やら気持ちも楽になり、気がついてみれば重心は右側に小さく傾いていた。

少年は白い蘭の花に換わつた。

俺は花こそ白く美しいが、根も剥き出しで無様な蘭の花を、カレーの容器に入れた土に植えると、それを両手に抱えたまま、西の岬から夕日を眺めていた。

もうしばらくすればこの花も種に戻り、タンクに収めるしかないのだろう。その後、この人間島には本当に俺だけになる。次に管の字を記した者がいつくるのか、明日か、数十年後か、それは分からない。時間が経ちすぎるほど経て

ば、俺もやがて少年のように観念的な考えに至るのだろうか。それとも相変わらずなのだろうか。

とにかく一人は退屈で寂しい。それがいつまで続くかもしれない、つまりこれは罰ゲームみたいなものなのだろうとも思えた。だとすれば、俺はここに来る前に、よほど他人を孤独にしてきたのかもしれない。

夕日は水平線へと沈み、星空が満天に広がった。誰が妄想したのやら、本当にでたらめであろうりするほど星の数が多い。一際巨大に見えるのは満月だ。思えば、ここで月を見るのは始めての経験だ。なるほど俺の妄想力も、空に上がるほど巨大になっただらしい。

蕾へと退行した少年を手に、俺は岬の入り口から地下施設へと戻ろうとした。すると、月明かりに照らされ、洋上に浮かぶ一人の人影が見

えた。

仕事だ。少年をタンクに戻したら、すぐに地上に上がってあの人影を助けに行こう。きっと記憶がなくて困っているはずだ。奴はどんな人物なのだろう。今回はどんな風にここを説明してやろう。男なら友達に、女なら色気のある関係になりたいものだ。

俺はわくわくしながら梯子に手を掛け、地下施設へと降りていった。

「人間島」おわり